
未来視の生きる方法

すとりー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来視の生きる方法

【Nコード】

N9638T

【作者名】

すとりー

【あらすじ】

セラという変わった能力が使える人が存在している世界。ある事件により未来を視る力を持たされてしまったパルミラ。そのせいで彼は世界に嫌悪感を持つようになってしまった。しかし、転校生のおかげで彼にとっての日常は徐々に変化していく。小さい変化は積み重なり、最後に彼とその周りに何をもたらすのでしょうか。

オープニング（前書き）

セラという不思議な力が使える世界、
マホウツカイという名の神様が信じられている世界。
そんな一風変わった世界で未来を見る少年が繰り広げる物語です。
楽しんでもらえることを願いつつ……

オープニング

6010年7月11日

朝の7時。目覚ましが鳴り僕は目を覚ました。眠気はあまりないが頭が動いてくれていない。少しの時間ボーっとする。いつも起き掛けはこんなものだ。

そうした後、ベッドから抜け出して着替えを始めた。そのあとで食パンを焼いて、牛乳を取りだして、朝食とした。朝は忙しいし面倒くさいから毎日こんなもので済ましている。朝食を抜くと午前中の授業を耐え抜くことはできないのは分かっていることなので、少しでも腹に物を入れることを心掛けている。

朝食を取り終えたならもう学校に行くだけといいたところだが、洗濯物も干していかなければならない。一人で住んでいると自由な代わりに面倒なことも全部自分でしなければならぬ。

だが、こうなってしまったことはどうにもならないのだからするしかないのだ。僕は朝に終えなければならぬ家事を全部済ませて家を出た。

このように朝にやることが多いため、僕の登校時間は一般的な生徒よりもはるかに遅い。とはいえ今まで一度も遅刻したことがないのは奇跡と言ってもいいだろう。

その要因としては徒歩5分で着くほど近い学校に通っているということだと思う。これには随分と助かっている。おかげで遅刻をして教師に目をつけられるということもなく、毎日を平和に過ごせている。

5分経った。目の前に巨大な門と校舎が広がっている。自分の家の何倍の面積があるのか、比べたことも測ったこともない。巨大な壁と広大な面積を併せ持つ。これが僕の通っている学校、私立セラ学園だ。普通はセラ学と呼ばれる。この西大陸の首都でも有名な学

校だ。

学校自体は極近年にできたばかりできれいなこともあり、人気も高い。そしてなにより私立なら学費が高いそうなのだが、ここはそこまで高くないし、もしもお金がなかったとしても制度もしっかりしているおかげで通うことができる。

学校ではそれなりに楽しくさせてもらっているが、近くに自分の数少ない友人はだれも住んでいないので、通う相手はいなくいつも一人寂しく通っている。

校門を抜けた。そこから僕の口が動き始めた。他の人には聞かれないぐらいの小さな声で、まるで誰かとしゃべっているかのようだ。それは校舎に入り、自分の教室に入るまで続いた。

教室に入った途端、ホームルームの鐘が鳴った。騒いでいた教室も少しだけ静かになり、皆、着席を始めた。理由は共通している。

「おう、お前ら。連絡事項なし。以上」

一瞬だけドアを開けてそれだけを言い残して帰って行った、担任が恐ろしいためだ。とはいえ怖いわけではなく、むしろ皆尊敬していると思う。2年連続で担任であるニクラス先生に頭が上がらなくなっているからだ。いつの間にある先生は僕たちを従わせたのだろうか。

本来なら後10分は授業の時間まであるのだが、担任が早く終わらせることを考えているので時間が空いた。それによってまた教室が騒がしくなってきた。

「なあ、ちよつといいか？」

僕にも話しかけてくるやつがいた。どうせ宿題を見せてくれとかいうくだらない用事だろうが、一応目立たないように過ごすのが信条なので対応することにした。

さて、この学校の大きな特徴がある。それがこのセラ学と言われる授業のことだ。名の通りセラについて勉強する学問だ。

セラというものを簡単に説明すると、手から炎を出したり、獣の姿に変化したりすることができるようになる不思議な力のことだ。しかし、これは人間の場合のみで、他にも流用することができ、学園で付いている光や空調、学校を管理しているシステムもこれ動いている。とにかくいろいろと出来るようになる便利な力だ。と考えてもらえばいい。

「じゃあ今日はセラというものの成り立ちについて」

少しおどおどしている頼りない教師が教壇に立ち、説明を始めた。他の教科よりは面白いので僕は一応聞くようにしている。しかし、こういう態度の教師は大抵生徒になめられるものだ。ほとんどの生徒はしゃべっていて、あまりまともに授業がされているとは言い難い。そんなことにはおかまいなしにこの教師は説明を続けていた。

昼時になった。教室で弁当を食べると周りがるさいので、僕はいつも外で食べることにしている。最近、周りから見つからず静かな場所を見つけたので、そこに移動しようと階段を降りた。

「あ、先輩。お疲れ様です」

階段を降りたところで見知った顔と出くわした。『漆原』という漢字の名字を持つ『双子』男の方は泪、女の方はうるはという。普通のやつらと少し雰囲気が何か違う、校内では美男美女の天才双子として有名だ。天は、いや、世の中は不公平に出来ているものだとこの『2人』と出会った後から考えるようになってしまった。

「先輩どうしましたか？」

「なんかぼーっとしていらっやいますけど、何かありました？」

「いや、世の中ってなんだろうなーと考えていた」

「「？」」

あわてて取り繕った。とても取り繕えたと思えないような言い訳

だったけど、一応納得というか流してくれた様だ。

「いいですけど」

「今からどこかに行かれるんですか？」

「うん。昼食を食べに外にと思って」

「先輩よくいつも弁当ですよ」

「面倒だと思いませんか？」

「自分で作ってる君に言われてもなあ」

「いえ、私が作ってるのは大したものじゃないですよ。昨日の余りとか使ってますから」

「俺も似たようなもの……」

彼が何かを思ったかのように止まった。そして

「「では、これで」

「うん。また、後で」

あわただしく去っていった。何かあったのだろう。ただ僕には分からないことだから、とりあえず自分の行きたいところに行った。

学校から出るといつも窓から見える、森というのにふさわしいほど木々が生い茂っている地帯に入った。なぜ学校にこんなものがあるのか分らないが、あるものはありがたく利用させてもらっている。夏が終わったばかりで外はまだ暑い。しかし日の射さない森の中は、森の中の方から風が吹いているのでとても涼しい。何より学校の喧騒が届かない。個人的には穴場だと思っている。

「さて、食べるとしますか」

木々が光を遮っているのに、森の中は判断できるぐらいには森の中は明るい。

「……」

ふと気づくと僕よりあまり離れていない場所に女の子がいた。

僕と同じように食事をとっているようだ。

「……」

もっとも向こうは購買で買ったらしきアンパンをもふもふと咀嚼

していた。

「……」

こちらに気付いた様子もなく食べている。

「……」

どうやら食べ終わったようだ。

「……」

こちらを黙ったまま見てきた。お互いに特に驚きはなかった。たぶん数秒ほどこちらを見てきた後、森のさらに奥の方へと入っていた。

「この奥つて、迷うと思うけどなあ」

そんな疑問を抱きながらも始業のベルが鳴るまで、食事をとり終わった後もずっとその場にいた。

就業のベルが鳴り、一瞬だけ顔をのぞかせた我が担任も行った後、家に帰ろうと思い席を立った。

しかし、それも無理な話だったようだ。仕方なく足を生徒会室の方へ向けることにした。

そう、先ほど言った通り僕が向かっているのは生徒会室だ。あまり生徒に任せるのではなく大体のことを大人がやっているが、生徒とのパイプライン役は必要なことだ。それで作られたのが生徒会だ。言っておくが、僕は決して生徒会に入ったつもりはないし、帰宅部で通している。それなのに、なぜか僕は生徒会室の前に立っている。ちなみに今日は何の用事もない日だ。おとなしく帰っても何も言われまい。

「失礼します。失礼しました」

「捕まえなさい」

「……りよ、了解であります！」

我が担任のまねを試みたが、上手くいかなかったようだ。一瞬だけ開けて、すぐに閉めようとした扉は何者かによって支えられて

いた。

「先輩、毎度のことですけど観念してください」

「私の身が持ちませんよー」

支えているのは男女のペア、昼にも会った漆原だ。

「放して欲しいな。怪我するよ」

「いえ、無理です。お願いですからまともに入ってきてください」

「

懇願するような声で言われた。

「入ってきなさいよ。入らなかつたらどうなるか分かってるでしょ？」

奥からハスキーなボイスが聞こえた。僕も観念して扉から手を放す。

「うわっ」「きゃっ」

その反動で漆原はこけてしまった。

「だから言っただけだなあ」

半ば観念しながら入った。

「いらっしやい。ゆっくりしていきなさいよ」

奥にいたのはこの部屋の主、生徒会長ことレネ・アルブレヒトだ。僕の1つ上の学年にあたる。

ぶっちゃけるとかなりの美人だ。本当に僕の1つ上かと見紛うほどだ。プロポーションもすごく、隠れファンがファンクラブを作っているのも、若干僕が恨みを買っているのも知っている。原因はおそらく今の生徒会だろう。

今、生徒会の中にいるのは僕、レネさん、そして漆原兄妹のみ。生徒会は会長しか所属していなくて、副会長も書記もいない代わりに僕たちが強制的に手伝わされている。

どうやら会長は、自分以外の生徒会役員をいなくなるようにし、実際それでも問題ないよう証明をして見せた。それで、生徒会には会長以外の役員は存在しない。問題ないなら手伝わなくても良いじゃないですか、と以前言ってみたことがあるが、凄まじい笑顔で微

笑まれたのでその質問はしないようにしている。

「どうしたの？ ぼーっとして。なにかあった？」

「いえ。別に何もありませんよ」

あのときの笑顔は今思い出すだけでも戦慄が走る。思い出していたことも気取られないようにするでしょう。

「それで、今日は何も用はないですね？　なんで呼び出したんですか？」

「なんとなくよ」

一言であっさりと返された。なんとなく、であまり時間を消費されたくはないがしょうがない。この人には一生逆らえないだろう。

「あら。いいのかしら？」

「もう、諦めましたよ……」

椅子に腰を掛ける。反論しても無駄な事を悟り、話を聞くことにした。

生徒会での時間を過ごされた（こう言うのが一番正しいと思うので）後、スーパーに寄った。タイムサービスセール中でいくつかのものが安くなっていたので購入して、帰った。

帰るととりあえず買ったものを冷蔵庫に収め、干していた洗濯物を取り囲み、夕食を作った。風呂に入り、出された課題をこなし、ベッドに入った時刻は12時45分。そのまますぐに寝た。

というところで目が覚めた。

6010年7月11日

朝の7時。目覚ましが鳴り、僕は目を覚ました。眠気はあまりないが頭が動いてくれない。少しの時間ボーっとする。いつも起き掛けはこんなものだ。

そうした後、ベッドから抜け出して着替えを始めた。そのあとで食パンを焼いて、牛乳を取りだして、朝食とした。朝は忙しいし面倒くさいから毎日こんなもので済ましている。朝食を抜くと午前中の授業を耐え抜くことはできないのは分かっていることなので、少しでも腹に物を入れることを心掛けている。

朝食を取り終えたならもう学校に行くだけといいたところだが、洗濯物も干していかなければならない。一人で住んでいると自由な代わりに面倒なことも全部自分でしなければならぬ。だが、こうなってしまったことはどうにもならないのだからするしかないのだ。僕は朝に終えなければならぬ家事を全部済ませて家を出た。

このように朝にやることが多いため、僕の登校時間は一般的な生徒よりもはるかに遅い。とはいえ一度も遅刻したことがないのはある意味では奇跡と呼んでもいいだろう。

その要因の一つとしては徒歩5分で着くほど近い学校に通っているということが挙げられるだろう。これには随分と助かっている。おかげで遅刻をして教師に目をつけられるということもなく、毎日を平和に過ごせている。

5分経った。目の前に巨大な門と校舎が広がっている。自分の家の何倍の面積があるのか、比べたことも測ったこともない。巨大な壁と広大な面積を併せ持つ。これが俺の通っている学校、私立セラ学園だ。普通はセラ学と呼ばれる。この西大陸の首都でも有名な学校だ。

学校自体は極近年にできたばかりできれいなこともあり、人気も高い。そして本来私立なら学費が高いそうなのだが、ここはそこまで高くないし、もしもなかったとしても制度もしっかりしているおかげで通うことができる。学校ではそれなりに楽しくさせてもらっているが、近くに自分の数少ない友人はだれも住んでいないので、通う相手はいなくいつも一人寂しく通っている。

校門を抜けた。次の瞬間だった。

『おはよう、パル。今日も遅いのね』

突然何の前触れもなく、声が聞こえた。

『おはようございます。レネさん。僕の事情ぐらい分かっているでしょう？』

他の人には聞かれないぐらいの小さな声で返答する。ちなみにパルとは僕、パルミラ・アガスティアのこと。レネさんは生徒会長のレネ・アルブレヒトのことだ。

『大変なら手伝いに行きましょうか？』

「毎日世話になっていたら多大な借りを作ることになりますので、やめてください」

『あら。別に良いと私は思うわよ』

「僕がいろいろと困りますので勘弁してください」

こうして会話をしながらも、僕は普通に学校に入る。もう何度も繰り返されてきたことだ。慣れている。

『困るってどんな風に?』

「レネさんが借りだと思っただけでも、僕が思っんです。それに毎日することなので、もう慣れましたから」

『慣れていない時期に言えばよかったかしら?』

「その時期はまだ僕たちまだ会っていませんよ」

校舎に入り靴を履きかえる。周囲のみんなは急いでいるが、僕は特段気にすることもなくいつものペースで履き替え階段を上る。

『仕方ないわ。パルが一度遅刻したら提案するのでしょうか?』

「そうしてください。遅刻しないように気をつけますので」

3階まで階段を上り、教室に入った途端、ホームルームの鐘が鳴った。騒いでいた教室も少しだけ静かになり、皆、着席を始めた。理由は共通している。

「おう、お前ら。連絡事項なし。以上」

一瞬だけドアを開け、それだけを言い残して帰って行った担任が恐ろしいためだ。とはいえ怖いわけではなく、むしろ皆尊敬していると思う。2年連続で担任であるニクラス先生に頭が上がらなくなっているからだ。いつの間にある先生は僕たちを従わせたのだろうか。

本来なら後10分は授業の時間までであるのだが、担任が早く終わらせることを考えているので時間が空いた。それによってまた教室が騒がしくなってきた。

「なあ、ちよつといいか?」

僕にも話しかけてくるやつがいた。どうせ宿題を見せてくれとかいうくだらない用事だろうが、一応目立たないように過ごすのが信条なので対応することにした。声は今では聞こえなくなっていた。

さて、この学校の大きな特徴がある。それがこのセラ学と言われ

る授業のことだ。名の通りセラについて勉強する学問だ。

セラというものを簡単に説明すると、手から炎を出したり、獣の姿に変化したりすることができるようになる不思議な力のことだ。しかし、これは人間の場合のみで、他にも流用することができ、今学園で付いている光や空調、学校を管理しているシステムもこれで動いている。とにかくいろいろと出来るようになる便利な力だ。と考えてもらえばいい。

「じゃあ今日はセラというものの成り立ちについて」

少しおどおどしている頼りない教師が教壇に立ち、説明を始めた。他の教科よりは面白いので僕は一応聞くようにしている。しかし、こういう態度の教師は大抵生徒になめられるものだ。ほとんどの生徒はしゃべっていて、あまりまともに授業がされているとは言い難い。そんなことにはおかまいなしにこの教師は説明を続けていた。

『この授業つまらないわ。話し相手になりなさいよ』

「授業中に能力使って話しかけてこないで下さいよ。独りごと言う変な奴だと思われたらどうするんですか」

『パルの責任じゃない』

「ですよねー」

僕もこの時間の授業は大半のことを知っているし、退屈なのは本当なのでレネさんに付き合うことにした。

昼時になった。教室で弁当を食べると周りがうるさいので、僕はいつも外で食べることにしている。最近、周りから見つからず静かな場所を見つけたので、そこに移動しようと階段を降りた。

「あ、先輩。お疲れ様です」

階段を降りたところで見知った顔と出くわした。漆原兄妹だ。

「先輩どうしましたか？」

「なんかぼーっとしていらっしやいますけど、何かありました？」

「いや、少し考え事してしまった」

「「？」」

あわてて取り繕った。一応納得というか流してくれた様だ。

「いいですけど」

「今からどこに行かれるんですか？」

「うん。昼食を食べに外にと思って」

「先輩よくいつも弁当ですよね」

「面倒だと思いませんか？」

「自分で作ってる君に言われてもなあ」

「いえ、私が作ってるのは大したものじゃないですよ。昨日の余りとか使ってますから」

「俺も似たようなもの……」

彼が何かを思ったかのように止まった。そして

「「では、これで」」

「うん。また、後で」

あわただしく去っていった。何かあったのだろう。ただ僕には分からないことだから、とりあえず自分の行きたいところに行った。

学校から出るといつも窓から見える、森というのにふさわしいほど木々が生い茂っている地帯に入った。なぜ学校にこんなものがあるのか分からないが、あるものはありがたく利用させてもらっている。

今の季節は夏が終わったばかりで外はまだ暑い。しかし日の射さない森の中は、森の中の方から風が吹いているのでとても涼しい。何より学校の喧騒が届かない。個人的には穴場だと思っている。

「さて、食べるとしますか」

木々が光を遮っているのに、森の中は判断できるぐらいには森の中は明るい。

「……」

ふと気づくと僕よりあまり離れていない場所に女の子がいた。

僕と同じように食事をとっているようだ。

「……」

もつとも向こうは購買で買ったらしきアンパンをもふもふと咀嚼していた。

「……」

こちらに気付いた様子もなく食べている。

「……」

どうやら食べ終わったようだ。

「……」

こちらを黙ったまま見てきた。お互いに特に驚きはなかった。こちらはあちらの存在を事前に知っているからこそ驚かなかったが、向こうは全く驚かなかった。こんなところ普通の人は来るはずかないのに。たぶん数秒ほどこちらを見てきた後、森のさらに奥の方へと入っていった。

「ここ奥つて、迷うと思うけどなあ」

そんな疑問を抱きながらも始業のベルが鳴るまで、食事をとり終わった後もずっとその場にいた。

就業のベルが鳴り、一瞬だけ顔をのぞかせた我が担任も行った後、家に帰ろうと思ひ席を立った。

しかし、

『今日は生徒会室に来なさい』

それも無理な話だったようだ。仕方なく足を生徒会室の方へ向けることにした。

そう、先ほど言った通り僕が向かっているのは生徒会室だ。あまり生徒に任せるのではなく大体のことを大人がやっているが、生徒とのパイプライン役は必要なことだ。それで作られたのが生徒会だ。言っておくが、僕は決して生徒会に入ったつもりはないし、帰宅部で通している。それなのに、なぜか僕は生徒会室の前に立っ

る。ちなみに今日は何の用事もない日だ。おとなしく帰っても何も言われまい。

「失礼します。失礼しました」

「捕まえなさい」

「「りよ、了解であります！」」

我が担任のまねをしてみたが、上手くいかなかったようだ。一瞬だけ開けて、すぐに閉めようとした扉は何者かによって支えられていた。

「先輩、毎度のことですけど観念してください」

「私の身が持ちませんよー」

支えているのは男女のペア、昼にも会った漆原だ。

「放して欲しいな。怪我するよ」

「「いえ、無理です。お願いですからまともに入ってきてください」

」

懇願するような声で言われた。

「入ってきなさいよ。入らなかったらどうなるか分かってるでしょ？」

奥からハスキーなボイスが聞こえた。僕も観念して扉から手を放す。

「うわっ」「きゃっ」

その反動で漆原はこけてしまった。

「だから言っただけだなあ」

半ば観念しながら入った。

「いらっしやい。ゆっくりしていきなさいよ」

奥にいたのはこの部屋の主、生徒会長ことレネ・アルブレヒトだ。僕の1つ上の学年にあたる。この人がたまに頭の中に聞こえる声の主だ。

「どうしたの？ぼーっとして。なにかあった？」

「いえ。別に何もありませんよ」

特に妄想でもなんでもなし。初めて聞こえたとき向こうに確かめ

たことで、彼女の持つセラの力を使ったもので『音』の力を持っているそうだ。

「それで、今日は何も用はないですよ？なんで呼び出したんですか？」

「なんとなくよ」

一言であつさりと返された。なんとなく、であまり時間を消費されたくはないがしょうがない。一度だけ逆らったら、3日間ほど大音量でレネさんの声を耳に流され、授業は聞こえないのに当てられるや、友人との会話も一切成立しないで大変な目にあつた。唯一の救いは学内だけで、始業と就業を告げるベルのなっている間は聞こえなかつたということぐらいだ。

「あら？いいのかしら？」

「もう、諦めましたよ……」

椅子に腰を掛ける。反論しても無駄な事を悟り、話を聞くことにした。

生徒会での時間を過ごされた（こう言うのが一番正しいと思うので）後、スーパーに寄つた。タイムサービスセール中いくつかのものが安くなっていたので購入して、帰つた。

帰るととりあえず買ったものを冷蔵庫に収め、干していた洗濯物を取り囲み、夕食を作つた。風呂に入り、出された課題をこなし、ベッドに入つた時刻は12時45分。そのまますぐに寝た。

これが、僕のいつもと変わらない……………繰り返される日常だ。

オープニング（後書き）

出来ればよろしいのですが、オープニングだけは1 3 まで一氣に読んでほしいと思っています。

オープニング・2

6010年7月12日

「はっ、はっ、はっ、はっ」

目覚まし時計もなっていない時刻、6時ぐらいに目が覚めた。起きた気分は最悪。そしてこれから始まる一日も同時に最悪なものになると分かってしまった。

とりあえずのろのろと体を動かし、顔を洗いパンだけを焼いた。洗濯物も干す気にはなれない。仕方ないので普段よりも相当早く、家を出ることにした。憂鬱な気分なのだがしょうがない。学校にはいつも通り、通わなければならないのだから。

暦の上では一応秋なのだが、夏が終わったばかりのこの時期は、朝でも少し暑かった。それでも、いつも登校する時間よりはるかにましだ。今日は逆に早すぎて誰もいない通学路を通って行った。

学校の前に差し掛かったが1人か2人見かけるぐらいで、他には誰もいない。今いる連中も朝練のある部活に入っている連中だろう。そんな連中は校舎の隣にある、部活塔の方へ駆けて行った。それを横目に見ながら校舎の中に入っていった。

校舎の中は閑散としていて、いつもざわついている廊下も今だけは静かだった。その中を淡々と歩く。階段を上り3階にたどり着いた。自分の教室を覗いて見るとすでに人がいた。女子の委員長だ。真面目な感じの子ではあったが、こんなに早く来て何をしているの

か。僕には到底無理なことだ。

あまり人とは出会いたくなかったのでそのまま足を階段の方へ向けた。

ギギと、鉄がさびた音のする扉を開けて屋上へと出てきた。たまに来るが鍵は掛けられてない。休憩するためのスペースとして使えるようベンチが置いてあるのだが、さすがに今の時間では誰もいないようだ。

ふと耳をすませると部活塔の方から音が聞こえてきた。トランペットの音色だ。個人的には正直あまり好きではない。どちらかというとピアノやヴァイオリンの音色の方が好きだ。しかし、今は屋上にいたかったのでその音に耳を澄ましていた。

音色も消え、校舎の方が徐々に喧騒で包まれる中、そろそろ潮時かと思い屋上を後にしようとした時だった。校門から校舎までの道より少し外れたところにあるグラウンドで大きな声がした。

「今日はお前のためにこうして部下も持ってきたんだよ!!」

「こいつですか？」

「ああ。女一人だからって遠慮はいらねえ！ やつちまいな！」

腕にギプスらしきものを巻いた男がわめいていて、周りの男が女学生に突っ込んでいったようだ。しかし、女学生は動じることもなく向かってきた男たちの水月を正確に突き、無力化していくのが見えた。いや、正確に言うところまでは見えないのだが、彼女ならきつとそうするのだろうということぐらいは推察できた。

やがてそこに立っているのは彼女と腕にギプスを付けている男の2人だけになった。男は目の前の惨状に怯み、

「おぼえていやがれー!」

負け犬の代表格のお決まりの言葉を吐いて逃げて行った。

その後、グラウンドは女子の黄色い悲鳴でとても五月蠅くなった。ここよりは教室の方が静かになっているだろうからと思い、教室へ

戻って行った。

戦っていた子はカタリナ・ノルティモ。僕も聞かされたから名前ぐらいは知っている。隣のクラス2-Cにいる女の子で確かめたことはないがおそらく僕らと同じ被害者の一人だ。

さて、聞かされたと言ったが、そんなことを聞かさせてきたやつが向こうから歩いてくるのが見えた。

「やあ、フレン」

「おう、パルじゃないか。見たか？ さっきのやつ」

「屋上から見てた。なかなか凄かったな」

「だよな」。あいつらには困っていた人たちも多かったけど、今回で少しは落ち着いてくれると思うんだよな。ところでさ、その彼女の写真いる？」

「僕よりも女の子に売った方がいいと思うよ。きつと言い値で買い取ってくれる」

「そうか。じゃあ今から女の子に売ってくるぜ！」

言うが早いがフレンはどこかへ駆けて行った。

「元からそのつもりだっただろうに。なんで聞いていくかな」

お調子者で、情報収集が得意で、なにかとかこつけては校内の女の子の写真を売ろうとしてくる、未だに原理がよくわからない僕の数少ない友人と思える一人だ。こんな僕と5年間付き合っているのだから、きっと彼は根がお人よしなのだと、とりあえず思うことにしている。

しかし、最近はフレンとあまり会っていない気がする。新聞部の部長をしているから、多分そのせいで忙しいのだろう。もうすぐ予鈴が鳴るというのに。

こちらは何もしていないのだから遅れる謂われはない。教室に入ると小声で会話するようになった。どうやらあの人が話しかけてきているようだ。始業ベルまで続き、相変わらずすぐに終わった朝の

HRも終わり、ちょうど授業が始まる直前のことだった。

「皆の衆、遅れた！」

偉そうな口調と共に入ってきたのは、僕たちよりもはるかに小さく、年齢も5歳は歳下に思える女の子だった。

「イザ！ 久しぶり！」

「お、おおう。確かに久しぶりじゃが……これ、抱きつくでないわ！」

「この感触久しぶりよー!!」

「はあ。癒される……」

「はーなーなーせーなー!!」

もみくちやにされていた。見ていられなかった。

「そうしてるのはいいけど、次の授業始まっちゃうよ？」

僕が独り言のように言くと、女の子はイザを除いて全員着席した。理由なんか一つしかない。

「おう。これから授業を……イザ。来たなら席につけ。授業始めるぞ」

「は、はひい」

次の授業は我らが担任、ニクラス先生の授業だ。あまり下手なことではない。

もみくちやにされていたイザは、何とか立ち上がり自分の隣の席に来た。椅子の位置が高く座るのに苦労しており、座ったとしても足をぶらぶらさせていた。

「それじゃ、始めるぞ。まずは前回の続きからだ」

何事もなかったかのように授業が始まった。

「パル」

小声で隣の主が話しかけてきた。

「なに？」

「ありがとうなのじゃ」

満面の笑顔で言われてしまった。とはいえこちらは感謝されることに思い当ることがなかったので不思議そうな顔をしていたら

「まあ、ええわい」

笑顔のまま授業を受けていた。おそらく、研究の方が一段落したのだろう。

この子の名前はイザ・ソリア。れっきとした17歳であって、ズルしてこの学校に入ったわけではない。最初クラスと一緒にあったときには驚いたものだが、今は慣れた。天才と言われており試験では常にパーフェクトをたたき出し、クラスの平均点の向上に一役かっている。

普段は研究所にいるのだが、たまにこうしてクラスの中で一緒に勉強している。学業の免除がされていなく、出席日数は稼いどかないといけないからだそうだ。

「ニクラス！そこは我が答えようぞ！」

……おそらくこの校内で唯一、ニクラス先生と対等に渡り合える人物だと思う。

そんなイザの登校もあったが、それ以外は何事もなく昼をむかえた。僕は昨日と同じ場所に行くとした。

唐突だがこの大陸の木々は赤い。僕の知り合いの中で最も変人の男が言っていたことだから、とても信用ならないことだったけれども、普通は緑色なのだそうだ。赤はきれいな色だが、あまり目にはよくない。だから、緑色に囲まれた中で食事をとってみたいと思う。

「……」
どうでもよいことを考えながら昨日と同じ位置に僕が行くと、また昨日と同じく昨日と同じ場所に彼女がいた。

「……」
今日は向こうも僕が来たことに気付きじつと見てきた後で、アンパンを咀嚼した。

「……」
昨日よりもおそらくだが咀嚼スピードが速い。何か急いでいるのだろうか。

「……」

僕が弁当箱の中を半分食べ終わる前に、彼女はここから森の奥の方へ立ち去って行った。

とりあえず、今日わかったことといえば、彼女が学校の生徒で僕と同じ学年だったということだ。この学校は制服で学年を見分けることが出来る。だからこそ分かったことだ。

僕も弁当を食べ終わったので、持ってきた本を読むことにした。少し暗いが見えないことはない。なんとなく買って読んでいる推理小説ではあるが、意外と面白い。また続きを読むとしよう。

昼の授業は退屈だった。何が楽しくて古語まで習わないといけないのかが理解できない。

隣のイザだってお休みモードだ。もっとも彼女はすでにこの程度のことは知っていると思われるが。とはいえ僕も知っているため、することもなくぼーっと外を眺めていた。

授業が全て終わったため、今日は帰ることにした。たぶん明日レネに文句を言われるだろうが、かまわない。授業を終えてすぐに、予兆は来ていた。

どこにも寄り道をせずにまっすぐに家に帰った。タイムセールがあるとかそんなことを考えている場合ではない。かろうじて玄関の鍵だけはかけ、靴を脱ぎ捨て、バックをその辺に捨て置き、洗面所へ向かい、

そして――

目が覚めた。

6010年7月12日

「はっ、はっ、はっ、はっ」

目覚まし時計もなっていない時刻、6時ぐらいに目が覚めた。起きた気分は最悪。そしてこれから始まる一日も同時に最悪なものになると分かってしまった。

とりあえずのろのろと体を動かし、顔を洗いパンだけを焼いた。洗濯物も干す気にはなれない。仕方ないので普段よりも相当早く、家を出ることにした。憂鬱な気分なのだがしょうがない。学校にはいつも通わなければならないのだから。

暦の上では一応秋なのだが、夏が終わったばかりのこの時期は、朝でも少し暑かった。それでも、いつも登校する時間よりはるかにましだ。今日は逆に早すぎて誰もいない通学路を通って行った。

学校の前に差し掛かったが1人か2人見かけるぐらいで、他には誰もいない。今いる連中も朝練のある部活に入っている連中だろう。そんな連中は校舎の隣にある、部活塔の方へ駆けて行った。それを横目に見ながら校舎の中に入っていた。

校舎の中は閑散としていて、いつもざわついている廊下も今だけは静かだった。その中を淡々と歩く。階段を上り3階にたどり着いた。自分の教室を覗いて見るとすでに人がいた。女子の委員長だ。

真面目な感じの子ではあったが、こんなに早く来て何をしているのか。僕には到底無理なことだ。

あまり人とは出会いたくなかったのでそのまま足を階段の方へ向けた。

ギギイと、鉄がさびた音のする扉を開けて屋上へと出てきた。たまに来るが鍵は掛けられてない。休憩するためのスペースとして使えるようベンチが置いてあるのだが、さすがに今の時間では誰もいないようだ。

ふと耳をすませると部活塔の方から音が聞こえてきた。トランペットの音色だ。個人的には正直あまり好きではない。どちらかというとピアノやヴァイオリンの音色の方が好きだ。しかし、今は屋上にいたかったのでその音に耳を澄ましていた。

音色も消え、校舎の方が徐々に喧騒で包まれる中、そろそろ潮時かと思い屋上を後にしようとした時だった。校門から校舎までの道より少し外れたところにあるグラウンドで大きな声がした。

「今日はお前のためにこうして部下も持ってきたんだよ!!」

「こいつですか?」

「ああ。女一人だからって遠慮はいらねえ! やつちまいな!」

腕にギプスらしきものを巻いた男がわめいていて、周りの男が女学生に突っ込んでいったようだ。しかし、女学生は動じることもなく向かってきた男たちの水月を正確に突き、無力化していくのが見えた。いや、正確に言うところまでは見えないのだが、彼女ならきつとそうするのだろうということぐらいは推察できた。

やがてそこに立っているのは彼女と腕にギプスを付けている男の2人だけになった。男は目の前の惨状に怯み、

「おぼえていやがれー!」

負け犬の代表格のお決まりの言葉を吐いて逃げに行った。

その後、グラウンドは女子の黄色い悲鳴でとても五月蠅くなった。

ここよりは教室の方が静かになっているだろうからと思い、教室へ戻って行った。

戦っていた子はカタリナ・ノルティモ。僕も聞かされたから名前ぐらいは知っている。隣のクラス2-Cにいる女の子で確かめたことはないがおそらく僕らと同じ被害者の一人だ。

さて、聞かされたと言ったが、そんなことを聞かさせてきたやつが向こうから歩いてくるのが見えた。

「やあ、フレン」

「おう、パルじゃないか。見たか？ さっきのやつ」

「屋上から見てた。なかなか凄かったな」

「だよな」。あいつらには困っていた人たちも多かったけど、今回で少しは落ち着いてくれると思うんだよな。ところでさ、その彼女の写真いる？」

「僕よりも女の子に売った方がいいと思うよ。きつと言い値で買い取ってくれる」

「そうか。じゃあ今から女の子に売ってくるぜ！」

言うのが早いがフレンはどこかへ駆けて行った。

「元からそのつもりだっただろうに。なんで聞いていくかな」

お調子者で、情報収集が得意で、なにかとかこつけては校内の女の子の写真を売ろうとしてくる、未だに原理がよくわからない僕の数少ない友人と思える一人だ。こんな僕と5年間付き合っているのだから、きっと彼は根がお人よしなのだと、とりあえず思うことにしている。

しかし、最近はフレンとあまり会っていない気がする。新聞部の部長をしているから、多分そのせいで忙しいのだろう。もうすぐ予鈴が鳴るというのに。

こちらは何もしていないのだから遅れるいわれはない。教室に入ると

『パル、どうしたの？』

声が聞こえた。周りを見ても自分に向かって声をかけた人は誰もいない。間違いなくレネさんだろう。

「どうしたって言われても。どうもしませんよ」

『そんなわけないでしょ。どうしてこんなに早く来ているのよ』

「たまたまですよ」

自分の席に着く。

『明日は槍が降るわね』

「別に僕は遅刻魔でも何でもありませんけど」

『むしろ、いつもこのぐらいに来れるのならそうなさい』

「無理です。勘弁してください」

と僕がつぶやいた次の瞬間、始業のベルが鳴った。それと同時にレネさんとの会話も途切れ、僕は姿勢を正す。とはいえその姿勢も、相変わらずすぐに終わった朝のHRとともに終わり、そして教室に響き渡る大声が聞こえたのは、授業が始まる直前のことだった。

「皆の衆、遅れた！」

偉そうな口調と共に入ってきたのは、僕たちよりもはるかに小さく、年齢も5歳は歳下に思える女の子だった。

「イザ！久しぶり！」

「お、おおう。確かに久しぶりじゃが……これ、抱きつくでないわ！」

「この感触久しぶりよ……！」

「はぁ。癒される……」

「は……な……せ……！」

もみくちやにされていた。見ていられなかった。

「そうしてるのはいいけど、次の授業始まっちゃうよ？」

僕が独り言のように言っていると、女の子はイザを除いて全員着席した。理由なんか一つしかない。

「おう。これから授業を……イザ。来たなら席につけ。授業始めるぞ」

「は、はひい」

次の授業は我らが担任、ニクラス先生の授業だ。あまり下手なことはできない。

もみくちやにされていたイザは、何とか立ち上がり自分の隣の席にきた。椅子の位置が高く座るのに苦労しており、座ったとしても足をぶらぶらさせていた。

「それじゃ、始めるぞ。まずは前回の続きからだ」

何事もなかったかのように授業が始まった。

「パル」

小声で隣の主が話しかけてきた。

「なに？」

「ありがとうなのじゃ」

満面の笑顔で言われてしまった。とはいえこちらは感謝されることに思い当ることがなかったので不思議そうな顔をしていたら

「まあ、ええわい」

笑顔のまま授業を受けていた。おそらく、研究の方が一段落したのだろう。

この子の名前はイザ・ソリア。れっきとした17歳であって、ズルしてこの学校に入ったわけではない。最初クラスと一緒にあったときには驚いたものだが、今は慣れた。天才と言われており試験では常にパーフェクトをたたき出し、クラスの平均点の向上に一役かっている。

普段は研究所にいるのだが、たまにこうしてクラスの中で一緒に勉強している。学業の免除がされていなく、出席日数は稼いどかないといけないからだそうだ。

「ニクラス！そこは我が答えようぞ！」

……おそらくこの校内で唯一、ニクラス先生と対等に渡り合える人物だと思う。

そんなイザの登校もあったが、それ以外は何事もなく昼をむかえ

た。僕は昨日と同じ場所に行くとした。

唐突だがこの大陸の木々は赤い。僕の知り合いの中で最も変人の男が言っていたことだから、とても信用ならないことだったけれども、普通は緑色なのだそうだ。赤はきれいな色だが、あまり目にはよくない。だから、緑色に囲まれた中で食事をとってみたいと思う。

「……」

どうでもよいことを考えながら昨日と同じ位置に僕が行くと、また昨日と同じく昨日と同じ場所に彼女がいた。

「……」

今日は向こうも僕が来たことに気付きじつと見てきた後で、アンパンを咀嚼そしゃくした。

「……」

昨日よりもおそらくだが咀嚼スピードが速い。何か急いでいるのだろうか。

「……」

僕が弁当箱の中を半分食べ終わる前に、彼女はここから森の奥の方へ立ち去って行った。

とりあえず、今日分かったことといえば、彼女が学校の生徒で僕と同じ学年だったということだ。この学校は制服で学年を見分けることが出来る。だからこそ分かったことだ。

僕も弁当を食べ終わったので、持ってきた本を読むことにした。少し暗いが見えないことはない。なんとなく買って読んでいる推理小説ではあるが、意外と面白い。また続きを読むとしよう。

昼の授業は退屈だった。何が楽しくて古語まで習わないといけないのかが理解できない。

隣のイザだってお休みモードだ。もともと彼女はすでにこの程度のことは知っていると思われるが。とはいえ僕もある程度は知っているため、することもなくぼーっと外を眺めていた。

授業が全て終わったため、今日は帰ることにした。たぶん明日レネさんに文句を言われるだろうが、かまわない。授業を終えてすぐに、予兆はすぐそこまで来ていた。

どこにも寄り道をせず、まっすぐに家に帰った。タイムセールがあるとかそんなことを考えている場合ではない。かろうじて玄関の鍵だけはかけ、靴を脱ぎ捨て、バックをその辺に捨て置き、洗面所へ向かい、

そして――

吐いた。

それはもう見苦しいほどに

吐いた。

洗面台に向かって胃の中のをぶちまけ続けた。

途中から吐き出すものがなくなった。

胃酸が出てきた。

倒れた。

床が冷たい。

そしてそれでも地に向かって嘔吐し続けた。

酸っぱい。

キモチワルイ

鼻からも何か出てきた。

ナニガキモチワルイノ

咽びかえるような液体の海が作り出した腐臭。

ワカラナイ

それでまた吐き、本当に何も、水すらも出なくなっても吐き続けた。

ボクニハワカラナイ

ワカラナイヨ

身は擦れ、やがて体は胃酸の海に沈みこんだ。ナニカが体に付着する。

ナンデボクハコンナコトヲシテイルノダロウ

何も考えられなくなっても、ただただ吐き続けた。

アア、マホウツカイサマ

ワタシハナニカ
ツミヲオカシタノデシヨウカ

頭の中では鐘が鳴り響いている。

キモチワルイ

きつと、零時を告げる世界の鐘だ。

ナカニナニカイル

その音色は自分の頭を腐らせる。

ソレハソコニハアツテハイケナイ

鐘の音がますます大きくなり、
自分が何をしていたのか、どこにいるのかもあいまいになる。

アア。

イッソコノママ
キエテシマエレバイイノニ

目の前が全て黒色に染まり、
僕のナニカは暗闇の中に落ちていった。

オープニング 3

さて、これで理解してもらえただろうか。

これが、僕の見ている世界だ。

寝ている間に次の日の未来を見る。

これがあの日…… 7年前の9月11日から続いている僕の世界、つまらない、なにも新しいことの起こらない世界だ。

もしかしたら、未来を見るこの力は便利だと思う人もいるかもしれない。実際、便利であることはあると思う。これに助けられたことも、これを利用したこともあった。

しかし、考えてみてほしい。次の日に起こることのすべてが分かってしまうということを。新しさも楽しみも潰えるのだ。そして、なによりも最悪なことは自分が見たそれらのことが全て現実として起こってしまうということ。良いこと、美しいことで世界が満たされているわけではない。むしろ汚いこと、どうしようもないことの方が世界には満ち溢れている。それを何度も見せつけられるのだ。

でも、未来を見ることができるのならそれを変えることだってできるはずだ。僕もそう思い、何度も何度も変えようとしたことはあった。

でも、無理だった。別の行動を自分がすることはできるし、それによって変わることは確かにあった。でも、結局僕が夢で見たことと同じことになってしまう。僕の両親もまた……。

いつしか最初から決まっている事柄が存在することに気づいた。

それに絶望し、それを嫌悪し、それに恐怖心を抱きながらも僕はそれと共に歩むしか道はなかった。

自分の内に潜んでいるものを気持ち悪く思い、耐え切れなくなることもたまにある。それが昨日のあの事態だ。なんてことはない。ただ単にいろんなものが耐えられなくなった証だ。なさけない。

とにもかくにも、僕は今までの出来事からどうあがいても変えられないもの。絶対的な何かがこの世には存在している、ということを感じて疑えなくなった。

この日まででは……。

6010年7月13日

洗面所で目が覚めた。

悪臭は漂っているが何回か経験しているので、もう慣れてしまった。この臭いを嗅ぐたび、考えてしまうこと……。これもまた、慣れ過ぎてしまった。

だから、それはいったん脇に置いておいて、手始めに水を使ってまとめて洗い流す。洗面台がきれいになった後は自分の番だ。着ていたものごとシャワーを浴び、着ていたものを洗濯機の中に突っ込むと、自分の体を洗った。洗面台の辺りを風が通るようにもした。リビングに当たる部分に行くと、時計が見えた。午前6時。いつもより早い時間に起きることとなった。これもまたいつものこと。そのまましていると余計なことを考えてしまうので、昨日終わらせることのできなかった課題を片づけにかかる。

一連のことが終わった頃に洗濯機の音が鳴った。今日の間干して

おけば、乾くだろう。

他にすることもなくなったので今日もいつもよりも早く学校に行く。昨日と違うのは身の安全を図るため、屋上ではなく生徒会室に行くことだ。2階にある生徒会室にはまだ誰もいなかったが、レネさんは毎日ここに来て自分の教室に行く。朝一番に謝っておかないと今日一日、自分の身になにが起こるか分かったものではない。

生徒会室にきたレネさんに謝ると、普通に許してもらったが、業務の手伝いを始業時間ぎりぎりまでさせられた。まあ、これぐらいなら甘んじて受け入れるべきだろう。

この後はいつもと変わらない日常だった。いつものところでたまにじっと見られながら昼飯を食べ、授業が全て終わった後で生徒会室に行き、帰って家事をこなし、宿題を済ませ、寝た。

朝以外は何の変わり映えもない日常だった。そう感じた。

目が覚めた。

6010年7月13日

朝起きるとベッドの中、ではなく悪臭の漂う洗面台のある部屋の床だった。何度嗅いでもイヤになる臭い。でも、仕方のないことだ。自分のやってしまったことは自分で片づけなければならない。夢の中でみた行動をそのまま再現するかのように機械的に動き、何もかもをこなし、学校に行き、生徒会室から帰って教室に着いたときのことだった。

教室がいつもよりもざわついていた。予鈴が鳴る。いつもは皆静かになるが、なぜか今日はまだ騒がしかった。隣のイザが僕に話しかけてきた。

「パルよ。今日うちのクラスに転校生が来るらしいぞ?」

「転校生?」

「あ、間違えた。正確に言うと編入生であつた」

「え? それってどういう……」

そんな存在は少なくとも夢の中では見なかった。

「おい。理由は分かるがとりあえず静かにしろ」

唐突に担任が教室に入ってきた。おかげでイザからそれ以上の話を聞けなくなった。しかし、担任が教室に入ってくるのはとても珍しいことだ。それに、この一連の出来事は夢の中ではなかったことだ。教室の中がシンとなった。

「編入生を紹介するぞ。入ってこい」

扉がもう一度開き、女の子が入ってくる。男連中から驚きの声が少し漏れる。女の子は緊張しているのか、右手と右足を同時に出して歩いてきた。

「はにゃ!」

彼女は緊張のし過ぎなのだろうか、壇上にあがる段差のところできけてしまった。

「ううー」

教室から笑いがこぼれる。女の子は耳まで真っ赤になってしまった。

「ほら、とりあえず壇上に立て。紹介ぐらいはしてやるから」

「い、いえ。じ、自分でやりますので」

意外と意志の固そうな声で担任に物言いし、自力でどうにか立ち上がって、壇上に上がり、黒板に名前を書き始めた。

「こ、こほん。は、じめまちて!」

教室に失笑がこぼれた。再度赤くなった。

「わ、わ、わ、わ、」

頑張れーと声がかかる。言いたくなる気持ちは若干理解できた。

「わたし、私の、な、名前は」

すでにみんな黒板に書かれた名前を見て分かっていることだろう。それでも、賢明に言おうとしていた。

「あ、アルカンシエル・ソレイユと言いまふ！よ、よろしく願いしやがれなのです！ ま、間違えた…… よろしくお願いするのです！！」

彼女の紹介らしきものが終わった。

「おい、質問があるやつはしておけ。授業が始まっては聞くことはできないからな」

担任が何か言っていた。教室の中もまた騒がしくなった。

そんな周りの様子も僕には目に入らなくなっていた。僕は彼女が入ってきてから呆然としていた。なぜなら彼女は

僕にとって……とてもまぶしいものに見えたからだ。

学園での日常 1

授業が終わる度、僕の右斜め前は人で埋め尽くされた。そこが、新しく来たアルカンシエルの席となった。元にいた奴は哀れなものだがしょうがない。我が担任の采配だ。従うしかないだろう。

「何で今の時期にきたの？」

「っっていうかそもそもどこから来たの？」

「いきなりこのクラスなのは成績良かったからなのか？」

「好きなものは？」

「なにかセラ持つてるの？」

「僕に癒しをください！！」

などなど。あれ、最後のは質問じゃなかった気がする。とにかくにもごつちやにされ

「あう~~~~」

渦中の本人は目を回していた。

「さすがに今は群がってんなー」

「あ、フレン」

「おう、噂を聞いて駆けつけたはいいものの、見ることにすら出来ねえな……」

「まあ、編入生は最初はこうなると思うよ」

「そんなものか」

「昼に来れば問題ないだろうね」

「そうするよ」

フレンはおそらく昼休憩に来るのだろう。そこに僕はいないから判断はできないけれど。

さて、この編入生の實力？ を見る機会が来た。いや、ただ単に授業で当てられただけなのだけど。

「この問題、アルカンシエル解いてみる」

「わ、わたしですか？」

「そうだ。壇上に上がって黒板にこの式の答えを書いてくれればいい」

式は因数分解の簡単な式だ。前の学年で習うようなことから、このクラスの人たちならほとんどができるだろう。

「うう」

「ん？ どうした、ど忘れしたか？」

「難しくて、分かりません！」

「胸を張って言えることじゃないぞ」

「ご、ごめんなさい」

「ま、いい。イザ、たまには答えろ」

今まで全く黒板を見てなかったはずのイザが黒板を一瞥^{いちべつ}して一言

「 $x \parallel 3、5$ 。バカにしておるのか？ もっとましなものを出すが良い」

「この授業はお前のためにあるのではないが、そう言われては仕方がない」

ニクラス先生も対抗心を示したようだ。黒板に式を書きなぐつて

「おまえら。今日教えること自体はこれで終わりだ。もう昼休みに入っていいぞ」

「よっしゃー」

「やった」

「ただし、鐘が鳴るまで騒ぐな。騒いだ奴は減点な」

とたんに静かになる教室。黒板にチョークで先生の書く音だけが教室の中に響く。

「これでいいか？」

黒板を埋め尽くすかのように書かれた白い文字。それが書かれ終わって数秒後、イザが立ち上がり黒板に短い答えを書いた。

『Nothing』

「のうニクラス。これは私の記憶が確かであれば研究中だったと思うがのう？」

「ああ。手間が省けた」

「普通教え子である我を使うか？　このことを……」

「俺の授業の出席日数は目をつむってやろう」

「うむ。仕方あるまい」

「え！？　それでいいの？」

「パルミラ、点引くぞ」

おもわず突っ込んでしまったが、あわてて口を紡ぐ。そう簡単に引かれては困る。

「それじゃ帰る。今日はじじいどもにおもしろい報告ができそうだから」

HRもなしでいいぞ、と言い残して教室を出ていった。

「さすが我らが担任」

「なんかもうさすがとしか言いようがないね」

堂々としすぎだ。あそこまでくるとたとえ悪いことやっていたとしても認めそうになる勢いだ。

ただ、僕が一番気にかかっていたのは

「あうゝゝ」

席に座るタイミングを逃し黒板の横の方で立っていた、アルカンシエルだった。

昼休みになった。いつも通り、いつもの場所に行く途中、階段を上がってくる漆原が見えた。

「やあ、お疲れ」

「「お疲れさまです」」

「屋上に行くの？」

「よく分かりましたね」

「分かると思うわよ。ここから上は上級生の部屋以外には屋上しかないんだから。私たち下級生が上級生のところで食べるわけにはい

かないでしょ？」

「だったら、上級生の部屋と一緒に食べ……」

「「本当ですかー!!」」

しまった。久しぶりにやってしまった感じがある。

「「じゃあ、今から一緒に行きましょうー!!」」

両手を捕まれる。

その時

情報が流れ込んできた。

あまりにも膨大な情報。

大樹がでてきた。

×××という名の大樹。

1 本の大樹が見えそれが自分に迫って来

「先輩!!!」

「はっ！」

階段の踊り場で僕は少しの間、硬直していたようだ。彼が手を離してくれたことによってどうにか戻れたようだ。

時間はおそらく2、3秒。でも僕にとっては1時間ぐらいに思えた。

「大丈夫ですか？」

「すいません。うかつにやっちゃってしまって」

「あ、ああ。うん。まあ、どうにか」

樹の細部が見える。見えてしまう。危険なほどに。

彼が倒れる俺を支えるのが見える。

彼女が屋上でしょんぼりしながらご飯を食べる姿が見える。

そして、『2人』が……

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「せ、先輩！」

「やっぱり大丈夫じゃないじゃないですか！」

倒れる俺を背中から支える。おかげで僕は倒れませんんだ。

「ありがとう。助かった」

彼女から少し距離をとって、

「ごめん。見えてしまった」

本当に謝らないといけないのは僕の方だったので謝った。

「いえ、こちらこそつかずぎました」

「先輩のそれ、知っていたのに」

彼がやっていたのは単純なことだ。手を握った。それだけ。ほんのそれだけでこうなる自分の能力が恨めしい。

「ごめんな」

「いえ。気にしないでください」

「それでは私はこれで」

「ああ。また、生徒会室でな」

彼女はそのまま階段を上っていった。少しすると屋上について、多少落ち込みながら『2人』で昼食をとるのだろう。

僕的能力——セラは2つある。厳密には同じものなのかもしれない。2つ目と考えているのが先ほど起こったことだ。僕は他の人に手で触れただけで、その人の未来を視ることができる。

発動は強制的。手袋など何かを介したとしても意味がない。人に触れたら発動してその人の数分から数時間後に何が起こるかということ、垣間^{かいま}見ることができる。この時間は人によって変わるようだ。

こちらのセラに関しては、先ほどのようにアクシデントでもない限り使われることはない。基本的に人の体に触れることなどそうないからだ。

よって、僕は人の手を握ることができない。

ただ、範囲が手のひらだけだということが唯一の救いかもしれない。腕をつかまれても何も起こらないし、体がぶつかっても問題ないからだ。

しかし、こんなことを考えてもどうしようもない。あるものはしょうがない。僕もいつものところへ行こう。

いつもの場所に行くと、やはりあの女の子がいた。今日は僕が来るのが遅かったからか、もう食べ終わっているようだ。

「……」

やはり、いつものように無表情で黙っていたのだが、少しの間僕を見た後、森の奥の方に入っていた。

今日見た夢でも、彼女は同じことをしていたが、この奥に何かあるのだろうか。彼女を追ってみようか？

追ってみるとしよう。昼食はその後でも食べることができる。僕もこの森になにがあるのかということには興味がある。フレンから聞いたところによると、ちょっとした伝説も存在することだし。

というわけで少しの好奇心で彼女の後に続く。

「……」

程なくして彼女も僕に気づいたようだ。振り返ったところで声をかけてみた。

「いつもどこに行ってるの？」

「……」

返答は無言。無表情。

「ついて行ってもいい？」

少し止まって、彼女は走り始めた。

「……上等！」

僕も彼女を追った。若干自分のキャラが変わっている気がするけど気にしない。

彼女は足場が悪い中でもかなり早かった。止まる様子もなく木々の間をぬっていく。

「くっ」

ただの好奇心でここまで追うのもどうかと思うが、まあたまにはいいだろう。

「……」

チラッとこっちを見た後、いきなり右に曲がった。今までほとんど真っ直ぐに進んでいたので、とっさに曲がるのは難しいがどうにか対応する。

「なっ！」

曲がった先には……誰もいなかった。

見失ったのだろうか。周囲を見渡しても誰の気配もしない。誰も見えない。

ふと上を見ると、ガサガサッと音がした。

彼女が木の上に座っていた。

「……」

いつものように無表情で僕を見てきた。

木漏れ日が差し込む。いつもよりも明るいところで見た彼女は、

とてもきれいな子だった。

「……」

少しの間、じっと見てきたがやがて立ち上がり、木の上を飛び跳ねながら去っていった。

いや、飛び跳ねながら、という表現は間違っていた。人間であるはずの彼女は、まるで背中に翼が生えているかのように、飛んで、いったのだった。

どうにか森の入り口に戻ってきた僕は、昼食を食べる間もなく授業に臨むことになってしまった。

「どうしたのじゃ？ 疲れておるようじゃが」

「大丈夫だよ。次の授業楽だから」

「なら、良いのじゃが」

次の授業は総合授業。常識を学ぶための授業だ。

普段、暮らしている分に問題はないぐらいの常識はみんな持っているが、知らなくても問題のない常識は知らない。僕の場合は普通の木の葉の色が赤や黄色ではなく緑色だということを知らなかった。写真を見たとき驚いたものだ。アイツの言っていたことは本当だったのだな、と。

「ではあゝ、授業を始めますよゝ」

妙に間延びした声が聞こえてきた。アメリカ先生だ。おっとりのんびりの割に分かりやすい。この科目にテストはないものの、もしもあつたとしたらとても楽に点が取れそうだ。

「でわあゝ前回の復習ですよゝ」

「……」

隣のイザに反応がないと思っていたら、もう寝ていた。

「前回の復習からですよゝ」

間延びしてゆっくりしている授業は今の自分の腹には苦痛だ。

「あゝ、テストがないからといっても大事な授業なので寝ないでくださいよゝ」

クラスのだいたいの奴は寝ている。眠くなる授業なのは変えられないことのようなのだ。

「前は1週間は5日、1月に40日、12ヶ月あることを学びましたよね」

なにか、おかしなことを言い始めた。

「今日はこの世界の成り立ちについて学びましょうね」

「先生。あの」

まだ起きているメンバーの1人である委員長が進言をした。

「なんでしょか？」

「私たち中等部じゃないんですけど……」

「あ、あゝあゝあゝ！ ごめんなさゝい。今あちらも担当しているのでちよつと間違えちゃいました」

「それにその内容、中等部の中でも最初の最初に学ぶことですよ」

「それもそうですね」

「……しっかりしてください」

今のやりとりで起きている人もやる気をなくしたと思う。僕は空腹が続いているので最初からそれどころじゃなかったけど。

「今日は魔法使い様の話でしたね」

「それは高等部1年だったと思います。というか小さな子供でも知っていることですよ」

「ですよ。魔法使い様のことは誰でも知ってることですよね」

魔法使いか。全てのことをかなえてくれる存在。そんなものがあるのなら、僕がこんな思いをする必要もないだろうに。

それと同時に……自称魔法使いを名乗っていた誰かのことを思いだした。むしろ、あんなのだったら信じる気になるかもしれない。あれは誰だったのだろう。

とりあえず、僕は魔法使いのことを信じていない。ただ、世界には信じている人が多くいるそう。このクラスの中にも何人かは信じている人がいるんじゃないだろうか。

「すいません。すいませ〜ん。先生今日やること全部ばっちり思い

出しました」

「なら良いのですが」

僕がぼーっとしていると先生はようやく思いだしたようだ。すでにそれなりに時間は経過しているのだが。

「今日は7年前に起きた9・11事件についてです」

クラス中の空気が変わった。僕は今日の授業がこのことについて扱うことはあらかじめ知っていたので、何でもないふりができたように思う。

「みなさんも知っての通り、7年前の9月11日に起きたことです」

あの日から少しの間、世界は大変だったらしい。ただ僕は自分のことで精一杯だった。

「みなさんは10歳ぐらいですかね」。あの日はそこまで大変なことは起きなかったですけど」

立ち上がりかけた。危なかった。何も起こらなかったと。そんなわけではない。じゃあなんで僕の……

「すいません」

アルカンシエルが立ち上がった。起きている人間がそもそも少ないのでざわめきはほんの少しだった。

「大変なことが起こらなかったとは思わないのですが」

普段発する声とはあまりにも違う音色だった。

「そうですね。すいません。せんせーの周りは何も起こっていませんでしたよ」

「訂正をお願いします」

「分かりました」

アルカンシエルが座った。教室はほんの少しざわついていた。起きている人間がそんなにいなかったものの、今のアルカンシエルの言葉を聞いた人間は驚いているようだ。僕も驚いた。彼女は少ししか見ていないがこんなことを言う人間には見えない。かなり意外な姿を見たと思った。

「でわ…… 7年前の9月11日から世界は大変なことが起こりました」

いつもの喋りかたを止めて真剣そうな口調に切り替えた。

「いろんなところで異常気象が起きましたが、おそらく一番大きかったのはヒカリの消失でしょうか」

ヒカリ。この大陸から南にあるこの世界を照らしているもの。夜は明るさが押さえられ、昼、今は明るいもの。

「世界は暗闇に染まりました。あるのは魔力を使った照明や光の力を使える人、炎の力を使える人による光でしょうか。みなさんも体験されたと思います」

僕はこのときは叔母さんと一緒だったが、照明が一つだけで大変だったことは覚えている。

「このことは4週間ぐらいで終わりましたが、その間やその後も世界ではいろんな異常が発生していました。ここ、西の大陸では地割れが起きました。他の大陸では、森が燃えたり、突風や竜巻により町が破壊されたり、吹雪が発生して極寒の中で暮らさなければならなかったところもあつたといえます」

この王都ラックでは地割れは発生しなかったため、大事には至っていない。

「ここでは、それが解決してない頃に起こった偽王の反乱のほうがある有名ですよ」

あの時、王都は大混乱に陥った。結果、反乱は成功したといってもいいだろう。王政もあの頃とは変わっているし。

「9・11事件は原因は未だに不明なままですが、そういうことがあつたということ覚えておいてくださいね」

最後にアメリカ先生はそう締めくくり、授業を終了させた。

ようやく終わった。長かった。どうにかして休みの時間の間に弁当を片づけなければならぬ。

急いで弁当を広げ食べ始めた。

「昼休憩に食いつぱぐれたのか？」

フレンが出てきた。どうやら休憩時間ごとに来ているというのは本当だったらしい。

「……自分のせいだからしょうがないよ」

どうにかご飯を飲み下した後と言った。

「ふうん。暴走？」

「暴走って言わないでほしい」

まあ、たまにあるのだ。たまに。

「悪いことでもあったのか？」

「なんで悪いこと確定なんだよ」

「そういうことがあったときになったじゃないか」

前はそうだった。あまりにも力ツとなったからなってしまった。こいつにも見られている。

「今日のは違うよ」

「へえ。聞かせろよ」

「アルカンシエルに話し聞きにきたんじゃないの？」

「いい。まだ周囲に人がいて近づきにくいし、こちらの方が面白……

……もとい興味がある」

「撤回してもあまり変わらない気がするよ」

まあ、別にいいのだけど。

『本当よ。何かあったの？』

「うわっ」

唐突に頭の中に声が聞こえた。いつものことではあるのだが、今日はこんなことが起こることもわからなかったせい、少し驚いてしまった。

「ん？ どうし……ああ、生徒会長か？」

『ひどいリアクションね。傷つくわ』

「そんなに柔じゃないでしょ」

僕が会話するのを見ていたフレンがふと僕に聞いてきた。

「生徒会長、何で俺には話しかけないんですか？」

「フレンが何で話しかけないのかって言ってますよ」

『少し待っていて』

少しの間、声が途切れた。

『お待たせ』

と言つて声に戻ってきた頃には

「……………はあ」

目の前に自意識のほとんどないフレンが出来上がっていた。

「ちょ、ちよつと大丈夫！？」

「……………ああ、パルか。俺は大丈夫れふよ」

「なんか、とても大丈夫じゃなさそう！」

「俺は、キジを、撃ちに、行つてくるよ」

「いや、訳分かんないよ！」

『別にいいじゃない。放つておけば？』

「さすがにあの状態はちよつと……………」

ふらふらしているし、今行った方向は自分の教室の方ではない。

『大丈夫よ。強いショックを与えただけだから』

（強いショックといつても、先輩のセラは音しか伝えることができないのに！）

少し好奇心が沸いた。

「あの、どうやったんですか？」

『……………知りたい？』

「遠慮しておきます」

過ぎたる好奇心は身を滅ぼす。これもまた真理だ。

『今日は来るのよね？』

「はい、こちらから行こうと考えていた所存でございます」

『なら、いいわ』

次の瞬間、次の授業の開始を告げる鐘が鳴った。

あまり昼食を食べることはできなかったが、フレンが大丈夫かどうかを心配してしまっていた。

全ての授業が終了した。担任は教室に顔すらのぞかせないままで終わった。どうやら本当にどこかに行ったようだ。

「先生来ないから、とりあえず掃除するわよー」

委員長の号令により、掃除の担当になっている人たちは掃除を始めた。

「ねえ、アルク。一緒に帰らない？」

「私たちが街を案内したいの」

アルカンシエルは女子の何人かから誘いを受けていた。

「ごめんなさい。ちよつと今日はこちらに来たばかりで用事があるから」

「じゃあ、仕方ないわね。またね！」

「うん、ゴメンね！」

そんな彼女たちを後目に教室を出た。

生徒会室に向かう前に隣の教室をのぞいた。こちらはまだHR中のようだ。

何の気なしに教室の中を覗いていた。

「なっ！」

あの森の中で会った女の子がいた。窓側の席で廊下にいる僕とは反対側だから分かりづらいけれど、間違いなく彼女だ。まさか、隣のクラスの所属だとは思わなかった。とりあえず、フレンに用事があるのではらくの間、廊下で待っているとすぐに終わった。

教室の中から廊下とは反対側にいるはずの彼女が真っ先に出てきて

「……」

少しの間、僕を見てきた。

「……」

そして階段の方へ向かっていった。

「すまん、パル。俺に用があるんならちよつと待ってくれ。今日掃除の担当に割り振られているから」

そんな復活したらしいフレンの声も半分ぐらい聞き流していた。

「お待たへ」

フレンが教室から出てきた。

「どした？ 俺に用じゃないのか？」

「ああ。合ってるよ」

ぼーっとしていたようだ。来た目的を思い出した。

「フレンここじゃ何だから」

「OK。屋上でいいか？」

「うん」

フレンと一緒に屋上に向かった。

「依頼？ へえ。やっぱり何かあったんじゃないか」

「いや、昼休み以前から考えていたことだから」

フレンの言った、依頼という言葉はその通りの意味だ。何らかの情報の取集を彼に頼む。彼の情報収集能力を用いて、それを実行に移し結果を教えてもらう。他の頼んだ人は代わりにそれに見合う情報を要求されるそうだけど、僕は要求されたことがない。今までに3回ぐらい頼んだことがあった。

「それでそれで？ 内容は？」

「……うちのクラスの編入生、アルカンシエル・ソレイユの調査」

「……へえ」

面白いものを見るような目で、フレンが俺を見てきた。

「そうかそうか」

「……だめか？」

「いや〜、ついにパルにも春が来たかあ〜」

「痛い、痛い！」

背中を強く叩いてきた。

「分かった。面白いことになりそうだし、引き受けてやるよ」

「そんなんじゃない。それと、学校で分かるようなことは調べなく

「ていいから」

「ありや。なんで？」

「そもそも、何で僕が彼女を調べてほしいって言ったかっていうと……」

僕はフレンに夢の中ではアルカンシエルが出てこなかったことを伝えた。フレンは僕のことを知っている、数少ない人間の中の1人だ。

「おまえ自分の能力嫌いじゃなかったか？」

無言で頷く。この能力がなかったら、今日みたいな毎日を通せることだろう。

「効かない相手がいるのなら、自分の能力をなくすことだってできるはずだから。アルクが他の人とどう違うのかを調べてほしい」

「……これは、難儀な」

「できる？ 無理そうなら断ってもらってもいいよ」

「ん。俺はもう引き受けたから。さすがに時間はかかるけどいいか？」

「うん。頼めるのはフレンぐらいしかいないから」

「うし。それじゃ放課後はこれに取り掛かることに決めた。んじゃ、今から行ってくる」

「頼むね…… ってもう行っただし」

フレンはすぐに屋上から出ていった。

さて、レネさんに怒られる前に生徒会に行かなければ。

「いつもより遅いんじゃないかしら？」

生徒会室の扉を開けると、目の前にレネさんがいた。

「あの、だから僕は生徒会の一員ではないので、本来ここに来る義務はないと何度言えがいいんですか？」

「あ、それも手遅れだから」

「何ですか？」

「あなた生徒会のメンバーに正式決定したわ」

「え？」

「ちなみに副会長」

「そ、そんなもの、通るはずがないでしょう！」

「あきらめなさい」

「いやいやいや、元の副会長がいたでしょう？」

「彼には辞めてもらったわ」

「事実上はそうでしょうけど、名目上はまだ所属しているはずですよ」

「あら？ そうだったかしら？」

ふふふ、と微笑む彼女を見て、まさか本当にそうだったのかと思つた。

「ちなみに、ウソよ」

からかわれたと思つた瞬間、僕は後ろを向いていた。

「僕もう帰りますね」

「いいわよ。帰れるのならね」

「入らせていただきます」

結局、ただ単にからかわれただけだった。どのみち僕は入らなければならぬ運命にあるみたいだ。

「明日、来ないんでしょう？」

「来れないに訂正してくださいよ」

明日はバイトがある。明後日が休みなので多少疲れたとしても問題ないようにするためだ。

「同じことじゃない」

「ニュアンスが違います」

「いいわよ。1人でここに籠もっているわ」

「拗ねなくてもいいじゃないですか」

「誰が拗ねているの？」

レネさんの後ろからオーラがセラが分からないものが溢れている気がした。

「いえ、レネさんいつも通りですよ」

「ふふふ。当たり前じゃない」

だめだ。この人に逆らうのは難しい。というか無理だと思う。
少なくとも今は。

「漆原遅いですねえ」

「あら。彼らを待ち望んでいるの？ 泣いて喜ぶと思っわよ」

「何で待っているだけで彼が喜ぶんですか？」

「「すいませーん。遅れましたー！」」

「噂をすれば、ね」

漆原が来た。ちなみに、なぜ遅れたのかはたぶん……

「何で遅れたの？」

「ちょ、レネ先輩。な、なんか目が怖いんですけど」

「ごめんなさい、先生に捕ってしまつて」

「なにか言われた？」

「いえ。雑用をさせられただけですから」

「何もなかったですよ」

「……まあ、いいわ。座りなさい」

レネさんがほんの少し怒っているような感じだった。

「何かやったんですか？」

「ぼ、僕は何もした覚えがないんだけど」

「どうにかしてくださいよ」

「そんな無茶な」

「3人ともなにしているの？」

思わずびくつとなつてしまった。

「いえ、別に」

「それよりも、何かしましょうよ」

「いいかげん、私たち学園祭の準備とか進めないといけないんじゃないですか？」

前々から気になっていたことを彼女が言った。

「ああ。大丈夫よ。少なくとも今までに必要なことは全部終わっているわ」

「なら、僕たちここに来なくても……」

「さて、紅茶でも淹れましょうか」

そして、やはり今日も他愛のない話に付き合うこととなった。

6時になり生徒会も解散した後、僕は帰らずに教室に向かっていた。まだ明るいこの世界のヒカリは教室を照らしていた。そんな中に一人で席に座っている女の子がいた。

「何してるの？」

僕が声をかけると、彼女は……アルカンシエルは特に驚いた様子でもなく、こちらに振り向いた。

「何もしていないよ」

「じゃあ、なんでここににいるの？ 他の女の子にも誘われていたじゃないか」

「ああゆうこと良く分からないし、今日は1人でいたかったから。」

キミの方こそなんでこの教室に来たの？」

それは、自分でも良く分からなかった。僕はなんで今来る必要もないこの教室にいるのだろうか。

「ごめん。少し考えたけど分からなかった」

僕は窓際に立った。

ヒカリが差し込む。出力の低下している時間なら、直視してもある程度は問題ない。

ああ、きれいだな。

久しぶりにそう思えたのかもしれない。

「ああ、そうか」

「え？」

「分かったよ。なんでこの教室に来てしまったのか」

「どうして？」

「今日はね、楽しかったんだ。とても」

「なんで？」

「君が来てくれたからかな」

言ってから、いろいろと恥ずかしいセリフのように感じたけれど、事実なのだからしょうがない。

そう、今日僕はとても楽しい一日を過ごせた。アルカンシエルが来てから、僕の目に映る光景は今日とかけ離れたものだったから。

「だとしたら、それはいいことなの？」

「きつと、いいことなんだと思うよ。少なくとも僕にとってはそう
だ」

「ふーん」

彼女は椅子に座って振り向いて僕と会話する姿勢から、行儀の悪いことに机に座って僕の方を向いた。

「そつか。いいことだったんだ」

その言葉を噛みしめるように呟いていた。

「明日から」

「ん？」

「明日からもきつとここにいると思うの」

「そうなの？ でも、僕は友達を早く見つけてその人と一緒に遊んだ方がいいんじゃない？」

「なら、キミがその一号だね」

「へえ」

てつきり誰かと仲良くなっていると思ったのだけど、違ったよう
だ。

「それはいいことだね」

「……いいの？」

「逆に訊くけど、何が悪いの？」

「難しいことは分かんないけど、キミが……そういえばキミの名前は？」

今思い出したかのように訊いてきた。

「パルミラ。パルミラ・アガステイア」

「私は言わなくてもいいかな」

「うん。アルカンシエル・ソレイユだったね」

「でもでも、長いからアルクって呼んでほしいな」

「こっちもパルでいいよ」

「分かった！」

彼女は喜色満面の笑みを浮かべた。

やはりきれいだと思う。

「じゃあ、私は帰るね」

「うん。また明日アルク」

「またね、パルくん！」

彼女は教室から出て行った。教室に一人でいた彼女とはかけ離れた元気満点の様子で。

「さて」

ヒカリを見つめて思った。

「僕も帰るか」

さつきよりも綺麗だな。と。

明日から自分がどうなるか分からない。

でも、できるなら。

そう、できるのなら。

こんな日々が続けばいいな。

と、そう思った。

でも、期待は裏切られるために存在しているもので。

でも、たまに应えてくれるものであって。

そんな日々を僕はこれから送ることになっていった。

学園での日常 2

6010年7月14日

7時に目が醒めた。割といつも通りである。寝起きでというよりは、いつものことではつきりしない頭は少しの間ぼーっとし、どうにか動いた。

機能的に動く。洗濯機を回し、朝食を作り、食べ終わったところに洗濯機が止まり、服を干して、家を出た。

空は曇っていた。しかし、今日は雨は降らないことになっている。おそらく降るのは明日の真夜中ぐらいからだろう。

学校に着いた。時刻は始業10分前ぐらい。普段にしては早い方である。

教室の中にはいる。いつも通りこの時間は少しうるさくて、しかし、僕の席の右斜め前には誰もいなかった。

「よう」

「ん？ どしたの？ 珍しいね」

朝からフレンが僕の教室に来ていた。

「なにかあったの？」

「何かあったってお前、昨日お前のクラスに転校生が来ただろう」

「え？ そんな話、聞いてないよ？」

寝耳に水だ。昨日はいつもと変わり映えのない日を送ったはずだ。

「そんなバカな。だいたい……」

ゴォーン、ゴォーン。鐘が鳴った。始業の鐘だ。

「まずい。じゃあな！」

教室にダッシュで帰っていった。

「なんなんだ、一体……」

なにか良く分からないまま、HRもいつの間にか終わっていた。

3時間目。特別棟に行く授業があった。

「今日は実験か……」

「何するんだろうねー」

「授業がないのは楽だよねー」

特別棟とは校舎よりも少し離れたところにある塔のことだ。5階建てで形状は塔そのものだ。何故校舎よりも少し離れたところにあるのかというと……たとえ危険なことが起こっても問題ないように、だそう。危険なことが起こること前提にするのはやめてほしい。

さて、実は校舎を挟んで反対側にも塔が存在する。前に少しふれたことがあるがこちらが部活棟だ。同じく5階建てで、こちらは多少うるさくても問題ないように、だそう。事実、ここは部活をやるというやる気の奴が多く、朝からなかなかにうるさい。この学校には軽音楽部もブラスバンド部も存在しているので、校舎にあつたら文句が続出するだろう。とはいえ、聞こえるときは聞こえるのだが。

「向こうには初めて行くよね。教えてあげよつか？」

何人かの女子が何もないとこに話しかけていた。

実験棟2階。今日は科学の実験をするためにこちらに連れてこられた。

「今日は炎色反応についてだ。適当に始めてくれ。火傷だけには気をつけること」

「適当だな……」

「まあ、こんなものだろう」

なんらかの物質を投入したら火の色が変わるというだけだしな。

特段何が起るわけでもなく授業は終了した。後1時間で昼食の時間になる。もう少し耐えよう。

昼食の時間。今日は誰とも会わなかったがいつもの場所に着いた。そこにも誰もいなかった。

「ん？」

俺が昼食を食べ終わった頃だろうか、あの女の子が僕を見下ろしていた。

「……………」

「な、何かな？」

「……………今日も追ってくるの？」

初めて声を聞いた。分かっていたはずなのに驚いた。

「あ、ああ。この森の奥に何があるのか興味あるしね」

「……………それだけ？」

「そうだね。他の理由としては、君にも興味があるのだけど？」

「……………そう」

女の子は森の中に入っていった。

一体この奥に何があるのか。僕はまたほんの少し興味がわいた。

昼休みが終わり、授業もすべて終了した。

今日もまた生徒会室に行くわけではなく、今日はバイトの日だ。学校から直接店の方に出向くことになっている。他にやることもないし行くでしょう。

「「こんにちは先輩」」

「やあ、お疲れ」

途中で双子と合流した。

「君も手伝うの？」

「はい！」

「まあ、いつものことですから」

僕は漆原と同じ職場になる場所に向かう。

それもそのはずだ。僕が働いているのは漆原の実家に当たる『キ

リハ書店』 町の中にあるこじんまりとした書店だ。

「いらつしゃ……おお、パルミラ君」

「どうもです。店長」

店長は漆原のお父さん。名前は聞いていないので店長と呼んでいる。かれこれ１年半ぐらいここでバイトしているがそつえば知らないなと思った。

「いつもいつもすまないねえ」

「それは言わないお約束ですよ」

「「いつから夫婦になつたんですか」」

「今日ももう来ているからよろしく頼むよ」

「了解です」

「スルーされた」

「そうね。まあ、お父さんはスルーしないとお母さんに殺されるからね」

「しょうがないか」

「しょうがないと思うよ」

僕は君たちの芝居の方がしょうがないと思うよ。だいたい、店長も僕も男じゃないか。まったく。

店の奥へと向かう。毎週この曜日は本が入荷される曜日なので、それをジャンルごとに分けて店に出すのが僕の主な仕事だ。かなりの重労働で男手が必要になる仕事だ。いつもは泪が開けて並べているのだが、この曜日は普段よりも格段に多いので、この曜日にバイトに入るようにしている。次の日は休みなのでちょうどいい。

「さて、今日もやるか」

「手伝います」

泪が入ってきた。

「いつもやっているんだから別にしなくてもいいのに」

「俺は好きでやってるんで」

「そつ。まあ、僕としても助かるけどね」

「いつもいつもすいません」

「……………」

「あれ！？ 無視ですか！」

「バイト代もらってるから気にしなくてもいいよ」

「そ、そうですか」

何故か少し残念そうな顔だった。何故だろう。別に普通のことを言ってるだけなのに。

「さて、片づけるよ」

「はい」

段ボールを開けて必要な分を指定の場所に運ぶ。段ボールそのものを運ぶこともあり、その場合相当重いものを運ぶことになるのでとても大変だ。

「ありがとうございますー」

うるはがレジカウンターで働いていた。どうやら店長は休んでいるようだ。

「お疲れ」

「お疲れさまです。お茶どうぞ」

「ありがとう」

よく冷えた麦茶はおいしかった。

「俺にもちようだいよ」

「必要？」

「あのね、うるはが飲んだからって俺の喉が潤されるわけじゃないんだから」

「はいはい」

泪も飲んだ。さて、もう少しで終わるだろう。

「ふう。これで終わりかな？」

「お疲れさまです」

「とはいえまだ時間はあるね」

いつもだいたい8時くらいまで働いている。

「はたき掛けをお願いしますか」

「ああ。分かったよ」

はたき掛けも本が汚くならないために重要な仕事だ。やっておか
なければならぬ。

「ふう」

店中といつてもそんなに大きくない書店なので、掃除する範囲も
たかが知れている。すぐに終わってしまった。

「終わったよ」

「ご苦労様です。もう少ししたら夕飯が出来ますから」

「ああ。だから途中からあつちはいなかったのか」

「先輩を含めた人数分の料理を作っていますので、ぜひ食べていっ
てください」

「え？ いや、僕はいいよ」

「このまま食べていられないのでしたら、一人分多く作ったものが
無駄になります。ですから、無駄にしないためにも食べていってく
ださいね」

「だから」

「どうしても家で食べなければならぬとおっしゃるのでしたら誘
いませんけど、いけませんか？」

「うっ」

良心を抉^{えく}るような言い方とこの上目遣い。これで何人の男を騙し
てきたのかは分からないけれど、乗らざるをえなかった。決して、
そう決して、僕もまた屈服したわけではない。

「作ってもらったのならしょうがないか。ありがたくいただくよ」

「ほんとですか！」

「ああ」

「よっし！ 楽しみにしておいてくださいね先輩！」

「あくまで作るのはあつちのはずだけだなあ」

御相半に預かることになってしまった。

結論から言おう。さすがに天才と言われているだけあってなのだ

ろつか、料理は美味しかった。

「僕の作るものとはランクが違うなあ」

「いや、そんなことはないですよ」

「でも、ありがとうございます。先輩の舌にあっついてほっとしました」

ちなみに食卓にいるのは、僕と漆原のみ。店長はすでに夕食を食べていたので、現在は店にいる。

「うん。卵焼きも美味しい」

「もっと甘い方がよかったですか？」

「いや、これぐらいがちょうどいいよ」

「ふむふむ」

「あ、でも弁当は作らなくてもいいからね」

「「！！！！」」

「ん？もしかしてそのつもりだった？」

食卓に並んでいるものが、弁当の中によく入っているレポートリ
ーなので冗談のつもりで言ってみたのだが、当たったらしい。

「そうしてもらうと僕がダメ人間になるからね。さすがにそうなるわけにはいかないよ」

「……別にいいのに」

「構わないんですけどねー」

「ダメだ。君の弁当を昼食として食べていたら普通の料理じゃ満足
できなくなる。餌付けされてるみたいじゃないか」

「先輩を餌付け……」

「……ふふ。ふふふふ」

「え？ ええ？ ちょっと？」

今後の自分に不安を抱きながらも夕食を食べ終わり、店長に挨拶
してから店を出た。午後9時。

特にすることもないと感じ、ドアが閉まっている商店街の中を歩
く。当てもなく、少しずつ自分の家に近づいていく方へと。

「やほー、久しぶり？」

ふと気づくと隣を歩いている人がいた。

「おそらくあなたとは会ったことがないと思う。覚えていないから」
「少しだけ残念だねー。まあ、しょうがないか。たったの1日、それも映像だったものねー」

何の話なのか理解が出来ない。

「まあ、いいや。伝えたいことがあったから来たんだ」

「伝えたいこと？」

「ああ」

「特に心当たりはないよ」

「まあまあ。この後ちよつとだけ大変なことがキミに降り懸かりそうだからさ」

「そう」

特に興味を抱かなかった。

「キミの日常が変化する一つの石が投げ込まれたよね」
僕が黙って歩いているとその人は続ける。

「それは良くも悪くもキミの日常を変えていくものだ」
唄うように。囁くように。

「だからこそキミは、キミの石を持ち続けなければならないよ」
「石？」

「そう。石だ。キミの中にある炭素の固まりの原石。それはとても堅いものだけど、炎には弱い」

「……………」

炭素の固まり。ダイヤモンド。決して欠けることのない金剛石。
「もしも形を変えることなく突き進むことが出来たのなら、キミはきつと大丈夫だ」

「ダイヤモンドカットを、自分で行ったら？」

硬度の高いダイヤモンドは、それゆえに削る際に同じダイヤモンドで削らなければ削れない。

「そつえばえそうだね。でもキミは今までもしなかったじゃないか」

「でも、してしまうかもしれない。もうすぐ終わりそうな気がするんだ」

「そうか。それもまた仕方のないことだね。私は手出しが出来ないし」

特に僕を止めるということは考えていないらしい。

「でも、それが一番綺麗な終わり方なのかもね」

「……………」

「否定してほしかったの？」

「いや」

そんなことは誰にも望まない。

「そうでないといけないことだからね」

家が見えてきた。

「終わりか」

「うん。僕の家はそこだから」

「じゃあね。パルが意志を貫き通せることを祈っているよ」

「ありがとう。ニセモノの……………」

穏やかに目覚めた。

6010年7月14日

7時に目が醒めた。割といつも通りであるが、今日は頭がぼーっ

とするようなことはほとんどなかった。夢の中身は特段変わったことはないのだけだ。

機能的に動く。洗濯機を回し、朝食を作り、食べ終わったところに洗濯機が止まり、服を干して、家を出た。

空は曇っていた。しかし、今日は雨は降らないことになっている。おそらく降るのは明日の真夜中ぐらいからだろう。

学校に着いた。時刻は始業10分前ぐらい。普段にしては早い方である。

教室の中にはいる。いつも通りこの時間は少しうるさかった。右隣の席は空いていたのだが、右斜め前の席にはアルクが座っていた。
「……………」

振り返って手を少し振ってきた。僕も少し振り返した。

「よう」

「ん？ どしたの？」

朝からフレンが僕の教室に来ていた。

「何かあったのか？」

「何かって？」

「今の。知らないと言わせないぞ」

「ただ単に向こうが手を振ってきたから何となく返しただけじゃないか」

「へえ。まあ、いいけど」

ゴォーン、ゴォーン。鐘が鳴った。始業の鐘だ。

「おっと、まずい。じゃあな！」

教室にダッシュで帰っていった。

「忙しいんだな」

気づいたらHRもいつの間にか終わっていた。

3時間目。特別棟に行く授業があった。

「今日は実験か……………」

「何するんだろうねー」

「授業がないのは楽だよねー」

「向こうには初めて行くよね。教えてあげよっか？」

「うんうん。どんなところなの？」

興味深そうにアルクが聞いていた。

「今からの授業でもある実験とか、芸術を選択したらこっち側にくることになるよ」

「芸術？ なにするの？」

「人によるけど音楽や美術、書道とか出来るような環境があるよ」

「ほえ……。すごいね……」

感心したような声を上げる。

「他にもいろいろと部屋があつて、中には誰が使っているのか、どんなことに使っているのか分からないものも多いんだよ」

「怖いね……」

「まあ、今日は行かないだろうから安心していいよ」

根も葉もないことを吹き込むのは感心しないけどな。実際にはすべての部屋には管理者として先生がいるから、その人に部屋の用途について質問してみればいいだけの話だ。

実験棟2階。今日は科学の実験をするためにこちらに連れてこられた。

「今日は炎色反応についてだ。適当に始めてくれ。火傷だけには気をつけること」

「適当だな……」

「まあ、こんなものだろう」

なんらかの物質を投入したら火の色が変わるというだけだしな。

「わわわ！」

「ん？ どうした？」

実験の班ではアルクと一緒に班になった。

「ビ、ビツクリした……」

「もしかして火を見たことないの？」

「そんなことないよ。それぐらい見たことあるよ」

「だったら別に驚くことないと思うけど……」

「うう……」

唸っていた。こちらとしては普通のことしか突っ込んでないのに。

「まあ、あれで驚いたのなら今からやるのはすごいぞ」

班の一人の男子が棒の前に物質をつけて火に近づけた。

「キレイ……!!」

「ちよつと目にまぶしいけどな」

赤や紫、青など加える物質によって色が変わる。ある程度教えてもらっていたものの、実際に見るのとは全く違って美しいものだった。

「すごいね……」

「本当はたいしたことないけどな」

「ふうん。でもキレイだよねっ」

「まあ、そうだな」

確かにその通りだった。

「ん？」

そのとき、炎に物質を近づけていたやつが疑問の声を上げた。

「どうかしたの？」

「いや、なんか炎が消えないんだ」

「え？　ちよつと僕にも触らせてもらっていいかい？」

その時だった。炎が燃え盛った。

「うわっ！」

「きゃあ……!!」

おびえた誰かが机を揺らす。そのはずみで台が倒れ

「危ない……!!」

アルクの方に倒れていた。

（間に合わない!）

訳も分からぬように彼女は、とつさに目の前を自分の手でかばった。

誰もが彼女に起こる惨状を目にしたくないかのように目をそらしていた。

だから、きっと僕しか見ていない。

炎が消えてしまったことを。

「へ？」

「おい、アルカンシエル大丈夫か！」

やる気のなさそうだった担当教官はすぐに駆けつけた。

「怪我は、ないのか？」

「あ、はい。問題ないですよ」

「倒れた時にもう止まっていたのか……。念のため、保健室に行つて診察してもらつてくれ」

「分かりました」

先生が辺りを見回す。するとなぜか俺に目が合った。

「お前、付き添いだ。本校の保健室に連れて行ってやれ」

「分かりました」

アルクと連れ添つて教室から出た。

「他のやつも今日はこれで終わりだ。片づけをしたところから戻つてよし」

出る間際、そんな声の中から聞こえた。

「別に付き添いなんてなくてもいいのにね」

「……本当に無事なままなのか」

「うん！ どころも問題ないよ」

「そうか」

確かにほんの少しだけ炎が当たったところで火傷はしないと思うが、細胞が死に、少しでも赤くなるはずだ。

しかし、その痕すらない。なぜだろう。倒れる前に消えたのではなく、確かに彼女に当たつて炎は消えたというのに。

「どうかしたの？」

「え？」

「わたしの手、ずっと見てたよ？」

「あ、ごめん。あまりいい気分じゃないよね」

「ううん。心配してくれてるのかなあって思ったただだよ」

「なかなか直球を投げてきますね」

「どうともなっていないよね」

「うん。熱くもなかったよ」

やはり僕の見間違いなのだろうか。彼女の手に当たる前に火は消えていた。そうでないと彼女が怪我をしていない理由が分からない。彼女は保険医に診断を受けたものの、問題ないと判断された。きつと当たる前に炎が消えていたのだろう。倒れたら消えるようになってるタイプのものも多いようだし。そう考えておこつ。

昼食の時間。今日は誰とも会わなかったがいつもの場所に着いた。そこにも誰もいなかった。

「ん？」

俺が昼食を食べ終わった頃だろうか、あの女の子が僕を見下ろしていた。

「……………」

「な、何かな？」

「……………今日も追ってくるの？」

初めて声を聞いた。分かっていたはずなのに驚いた。

「あ、ああ。この森の奥に何があるのか興味あるしね」

「……………それだけ？」

「後、君にも興味があるのだけど？」

「……………そう」

女の子は森の中に入っていった。

一体この奥に何があるのか。僕はまたほんの少し興味がわいた。

今日も彼女を追ってみよう。この奥に何があるのか。まあ、いろいろな噂はあるのだけど、どれも根も葉もない。

「……………」

「なんで入っちゃダメなの？」

「……教える必要はない」

それだけ言っていると彼女は走り始めた。

「くっ！」

急に、それも最初から全力で走り始めた彼女をどうにか見逃さないように追う。

「……………」

速い。足に羽がついているのではないかと疑いたくなるほどだ。

彼女に追いつけるはずもなく、ほどなくして見失った。

上空をにらんでみるも、彼女の姿はおろか、空さえも見ることはできなかった。

昼休みが終わり、授業もすべて終了した。今日は生徒会室に行かずに、バイトのある日なのでバイト先に向かわなければならない。学校から直接店の方に出向くことになっている。他にやることもないし行くとしてしよう。

「「こんにちは先輩」」

「やあ、お疲れ」

途中で双子と合流した。

「君も手伝うの？」

「はい！」

「まあ、いつものことですから」

僕は漆原と同じ職場になる場所に向かう。

それもそのはずだ。僕が働いているのは漆原の実家に当たる『キリハ書店』 町の中にあるこじんまりとした書店だ。

「いらつしゃ……………おお、パルミラ君」

「どうもです。店長」

店長は漆原のお父さん。名前は聞いていないので店長と呼んでいる。かれこれ1年半ぐらいここでバイトしているがそういえば知らないなと思った。

「いつもいつもすまないねえ」

「それは言わないお約束ですよ」

「いつから夫婦になったんですか」

「今日ももう来ているからよろしく頼むよ」

「了解です」

「スルーされた」

「そうね。まあ、お父さんはスルーしないとお母さんに殺されるからね」

「しょうがないか」

「しょうがないと思うよ」

僕は君たちの芝居の方がしょうがないと思うよ。だいたい、店長も僕も男じゃないか。まったく。

店の奥へと向かう。毎週この曜日は本が入荷される曜日なので、それをジャンルごとに分けて店に出すのが僕の主な仕事だ。かなりの重労働で男手が必要になる仕事だ。いつもは泪が開けて並べているのだが、この曜日は普段よりも格段に多いので、この曜日にバイトに入るようにしている。次の日は休みなのでちょうどいい。

「さて、今日もやるか」

「手伝います」

泪が入ってきた。

「いつもやっているんだから別にしなくてもいいのに」

「俺は好きでやってるんで」

「そう。まあ、僕としても助かるけどね」

「いつもいつもすいません」

「……………」

「あれ！？ 無視ですか！」

「バイト代もらってるから気にしなくてもいいよ」

「そ、そうですか」

何故か少し残念そうな顔だった。何故だろう。別に普通のことを言ってるだけなのに。

「さて、片づけるよ」

「はい」

段ボールを開けて必要な分を指定の場所に運ぶ。段ボールそのものを運ぶこともあり、その場合相当重いものを運ぶことになるのでとても大変だ。

「ありがとうございますー」

うるはがレジカウOUNTERで働いていた。どうやら店長は休んでいるようだ。

「お疲れ」

「お疲れさまです。お茶どうぞ」

「ありがとうございます」

よく冷えた麦茶はおいしかった。

「俺にもちようだいよ」

「必要？」

「あのね、うるはが飲んだからって俺の喉が潤されるわけじゃないんだから」

「はいはい」

泪も飲んだ。さて、もう少しで終わるだろう。

「ふう。これで終わりかな？」

「お疲れさまです」

「とはいえまだ時間はあるね」

いつもだいたい8時くらいまで働いている。

「はたき掛けをお願いしますか」

「ああ。分かったよ」

はたき掛けも本が汚くならないために重要な仕事だ。やっておかなければならない。

「ふう」

店中といつてもそんなに大きくない書店なので、掃除する範囲もたかが知れている。すぐに終わってしまった。

「終わったよ」

「ご苦労様です。もう少ししたら夕飯が出来ますから」

「ああ。だから途中からあつちはいなかったのか」

「先輩を含めた人数分の料理を作っていますので、ぜひ食べてみてください」

「え？ いや、僕はいいよ」

「このまま食べていかれないのでしたら、一人分多く作ったものが無駄になります。ですから、無駄にしないためにも食べてみてくださいね」

「だから」

「どうしても家で食べなければならぬとおっしゃるのでしたら誘いませんけど、いけませんか？」

「うっ」

良心を抉^{えぐ}るような言い方とこの上目遣い。これで何人の男を騙してきたのかは分からないけれど、乗らざるをえなかった。決して、そう決して、僕もまた屈服したわけではない。

「作ってもらったのならしょうがないか。ありがたくいただくよ」

「ほんとですか！！」

「ああ」

「よっし！ 楽しみにしておいてくださいね先輩！」

「あくまで作るのはあつちのはずだけだなあ」

御相半に預かることになってしまった。

結論から言おう。さすがに天才と言われているだけあってなのだろうが、料理は美味しかった。

「僕の作るものとはランクが違うなあ」

「いや、そんなことはないですよ」

「でも、ありがとうございます。先輩の舌にあっついてほっとしました」

ちなみに食卓にいるのは、僕と漆原のみ。店長はすでに夕食を食べていたので、現在は店にいる。

「うん。卵焼きも美味しい」

「もつと甘い方がよかったですか？」

「いや、これぐらいがちょうどいいよ」

「ふむふむ」

「あ、でも弁当は作らなくてもいいからね」

「「！！！！」」

「ん？もしかしてそのつもりだった？」

食卓に並んでいるものが、弁当の中によく入っているレパートリーなので冗談のつもりで言ってみたのだが、当たったらしい。

「そうしてもらつと僕がダメ人間になるからね。さすがにそうなるわけにはいかないよ」

「……別にいいのに」

「構わないんですけどねー」

「ダメだ。君の弁当を昼食として食べていたら普通の料理じゃ満足できなくなる。餌付けされてるみたいじゃないか」

「先輩を餌付け……」

「……ふふ。ふふふふふ」

「え？ ええ？ ちよつと？」

今後の自分に不安を抱きながらも夕食を食べ終わり、店長に挨拶してから店を出た。午後9時。よい子はおねむの時間だ。

「さてと」

僕はよい子でも何でもないので、夜の町を歩く。昼よりは暗いが明るく照らされている世界。暗闇を好むものにとっては明るすぎる世界を歩く。

この世界が暗闇に包まれたのはほんの7年前。あれからたった7

年だ。まあ、正確にはそろそろ7年になる、なのだが。

後2か月後。僕の世界が変質してから7年になる。

目に映る光景が全て変わってしまった日。

僕は、僕には止める力があつたはずだ。でも…………。

止めよう。終わってしまったことだ。考えても無駄だ。

そう解ってはいるのに止められなかった。

泥沼のような体を引きずり家に帰った。予想外に疲れていたらし

い。もう慣れた仕事のはずなのだけれども。

眠い。その単語が僕の体を支配した。どうにかベッドのある部屋まではたどり着き、力尽きた。

暗闇に落ちる最後、考えていたことは

そういえばアルクに新しい友達はできたのだろうか。

ということだった。

休日の一日 1

6010年7月15日

目が覚めた。はつきりと動かない頭で時計を見る。午前8時。あわてて飛び起きた、が、次の瞬間ベッドに逆戻りした。今日は湖曜日。社会的に休日と見なされる曜日である。よって今日は学校はない。

……いや、学校そのものは存在しているよ。

まあ、学校の授業と言い換えようか。授業のある日は平日、すなわち土、火、風、水曜日^{かき}で、その後、休日である湖曜日には授業はない。他の休日は特定の日にある祝日のみだ。

よって、なにが言いたいかというと、暇だ。この一言に尽きる。ぶつちやけると何もやることがない。あるといえばあるのだがすぐに終わるものだし、有意義に過ごすことが出来ない。

のろのろと起き上がり、とりあえずはと、朝食の準備に取りかかる。そして、着替えて洗濯機も回す。

それらをしながら考えた。結論はやはり先ほどと同じだった。朝食を食べて、洗濯物を干す。後の家事と言えば掃除だ。とりあえず家全体をやることに決めた。

しかして、終わったのは午前10時。寝るのにもまだ当分早い時間だ。買い物に出るのはいいことなのだが、すでに冷蔵庫の中に今日の分の食料はある。つまりは出る用事はない。

とある機械のスイッチを押した。リビングの中に音楽が溢れる。ピアノの旋律。綺麗なのだが、どこかもの悲しく、しかし美しい。その間に僕は小説を取り出して読んだ。

すごいね。端から見るととても優雅な人の休日に見えてくるよ。これで紅茶でもあったなら完璧だろうね。

しかし、現実には全く違う。紅茶がないよりも深刻な問題。

「暑い……」

夏は終わったばかりだ。まだ、気温は高い。風が通ってもぬるい風だ。暑い。暑すぎる。

「やってられない……」

疲れてきた。やる気もでない。

「う~~~~あ~~~~」

うなつても変化するものではないのは分かっているが、思わずうならずにはいられない、そんな正午だった。

とりあえず冷麺を作り、暑さもある程度落ち着いたな、と思っただけいつの間にか寝ていた。気づくと時計の表示は午後5時を指していた。

「いつの間に」

と思っただが、まあ、仕方ないことだ。

ついでに言えば、見ていた夢について思い出せないのもまた、しようがないと思う他ないのだろう。

そういえば、未だにリビングの中にピアノの音が溢れていた。ループにしていたのを忘れたままだった。機械のところまで行き、切った。おかげでセラを無駄に使ってしまった。

いろいろなものに流用できるセラはある施設から全ての家に供給され、冷蔵庫を使用すること、CDプレイヤーの再生、家の照明、洗濯機を使ったりなどに使用できる。その代わり、使用した分だけ国にお金を払わなければならない。仕方ないことではあるが、この出費は痛いことだ。

夕食を作った。結局今日は一日も外に出ていない。引きこもりとなってしまった。穏やかな一日を過ごせたのはいいことだが、何もない一日だった。次の日は有意義に過ごそうと考えて、

暗闇の中に

堕ちた。

6010年7月15日

目が覚めた。はつきりと動かない頭で時計を見る。午前8時。あわてて飛び起きた、が、次の瞬間ベッドに逆戻りした。今日は湖曜日。社会的に休日と見なされる曜日である。よって今日は学校はない。

……いや、学校そのものは存在しているのだけでも。

まあ、学校の授業と言い換えようか。授業のある日は平日、すなわち土、火、風、水曜日^{かさ}で、その後、休日である湖曜日には授業はない。他の休日は特定の日にある祝日のみだ。

よって、なにが言いたいかというと、暇だ。この一言に尽きる。

ぶっちゃけると何もやることはない。あるといえはあるのだがすぐに終わるものだし、有意義に過ごすことが出来ない。

しかし、休みの日は多少なりとも有意義に過ごすそうと決めたはずだ。

特に予定はないが、家事を済ませた後で外に出るとしよう。ずっと家にこもるよりはましになるだろう。

家の家事を済ませた後、家を出た。

出た瞬間、熱気に包まれる。出る気が失せてしまふような暑さだったが、とりあえず商店の方に出た。

「聞いたか」

「ええ、ええ。昨日はちよつとした騒ぎになりましたもの」

「小火ホヤですんだから良かったですわねえ」

「ホントだよ。もしもあれがもっとひどかったらどうなっていたとか」

ここにいる人たちの話からするに、どうやらどこかでちょっとした火事があったようだ。まだ暑いからなのかどうかは、聞き流しながら歩いている僕には判断がつかなかったけれども。

何も考えずにただぶらぶらと歩く。するとある地点に向かって歩いていることに気づいた。図書館だ。

学校にも図書館はあるのだが、国が運営しているのでその規模の桁が違う。蔵書も多い。気づいたところでたまには行ってもいいかという気分になった。

さて、問題が一つ。遠いのだ。この国で2番目に大きい通りを横切り、そこからまた少し歩かなければたどり着くことはできない。

「遠い……」

行く気が萎えてきた。とはいえそれなりに近くには来ているので、惰性で足を前に出す。

「……………」

大通りまで後もう少しだ。どうにか行き着くでしょう。

着いた。

「……疲れた」

外は暑く、ただ歩いただけなのにかなり疲れた。図書館の扉を開ける。すると、別世界が広がった。

「ふう。涼しい」

ここが図書館でなければ喜びの声の一つでも上げたかもしれない。外とは比べものにならないくらい涼しかった。

汗が引いていくのを感じながら、書架の方へ向かう。借りるものは決めていたが、借りてすぐに出る気にはならない。少しここで休んでいくことにしよう。

ある推理小説を読んだ。少しだけ、と考えていたのについてい2時間も居座ってしまった。原因はトリックこそたいしたものではなかったのだが、複線の回収が見事すぎたことに驚いたことだろう。次巻を借りよう。なかったら買って帰ろう。

外に出た。冷膜のなくなった体に容赦なく熱線が突き刺さる。出たときよりもましにはなっているのかもしれないが、冷たいところから暑いところに出たため、気分的にはすごく暑い。止めてほしい。少し歩いたところで自分の腹が鳴る音を聞いた。そういえば腹が減った。近くで何か食べよう。幸い、ここは大通りだ。飲食店はそれなりにそろっている。

近くにあった外に席がないタイプの飲食店に駆け込んだ。図書館と同じくこの飲食店の中もまた、冷気で包まれていた。涼しい。ガラス張りの向こう側とは大違いだ。

テーブルに案内されガラス張りの壁の近くに座ることになった。注文をする。店頭をみるとパスタに定評があるようなので、梅じそパスタを頼んでみた。

料理が来るまでにぼーっと外を見ながら待っていると、外ではなにやら不穏な声が聞こえてきた。

「……………けん……………」

「なん……………と!」

通りの反対側にいるにも関わらず、声が少し聞こえてきた。

「ケンカかな」

「あそこのおっさん喧嘩っ早いからな」

店の中でもウェイターの人と客がひそひそと話すのが聞こえた。
この辺りではよくあることのようにだ。

「おま……………」

「……………だろ……………って」

今は口げんかで終わっていたが、どうやら殴り合いに発展しそうな勢いだっただ。

窓ガラスに手が当たる。

次の瞬間、映像が流れ込んできて

僕は机の下に潜り込んだ。

ドン！！バリバリバリガッシャーーン！！！！

「きゃあああ！！」

「うわああああ！！！！」

直後、窓ガラスが割れた。

店内は騒然となった。店から出ていく人もいる。

ガラスの音がなくなった後、ぬるい風が入り込んできた。寒いくらいだった店内の気温が上がっていく。

とりあえず、机の下から這い出た。

「人間ごときが俺に逆らうからだ」

窓の外から見下しているかのような声が聞こえた。

「ん？」

机の下から這い出てきた僕と男の目があった。いかつい顔でなか

なか恐ろしい形相だ。

「お前どうして机の下にいたんだ？」

と訊ねてきた。

「机の下にスプーン落しちゃったので……」

「ほお」

とつさに嘘をついた。問題としては僕のところ料理が届いていなかったのだが、幸いなことに机の上はぐちゃぐちゃな上、改めて机の上を見るとそこで男がのびていたことで、机の上には何があったかなんて分からなくなっていたことだ。

「なかなか強者だな？」

「え？」

「何でもない。食事を邪魔して悪かった」

男は去っていった。

……………助かった。

ただの力バカではなく頭も切れる男のようだ。もしかしたら……いや、間違いなく僕の嘘ぐらい見抜かれていただろう。相手にしたくはない人だった。

「うう」

机の上で寝ていた人が気付いたようだ。

「動かない方がいいですよ。周りがガラスだらけですから」

「痛タタタ」

立とうとしたようだが腹を押さえていた。

「とりあえずもう少ししたら医師が来ると思うのでそれまで大人しくしておいてください」

「んなことができるか！」

大声を出したからまたおなかを押さえていた。

「暴れないでください。他の者が医師を呼びに行っています」

ガラスを踏む音がする。店の人もこちらに來たようだ。

「でもよお、あいつ魔力持ちだぜ！ あのやろう俺が値引きなんぞ出来ねえって言ったら、波みたいなのぶつけてきやがった！！」

「そうだったんですか。それは腹立ちますね」

「……………」

僕は何も発言できなくなってしまった。

『魔力持ち』。一般的にセラというものは魔力と呼ばれ、主に持つていない人から魔力持ちとも言われ恐れられることが多い。ところによつては、迫害され殺されることすらあったと学んだ。

そして、一般教養のない人たちは今でも恐れ of 感情を抱き、人によつては極端に嫌っている人だっている。例えば、目の前の人のように。

「くそつ！ あんなやつ次来たら……いててて」

「あ、まだ動かないで。もう少ししたら医者が来ますので」
そんな声を聴きながら僕はそつと店から抜け出した。

「あ」

しまった。結局、昼食を食べ逃した。仕方ないから家で作ろう。

自分の家に戻ってきた。午後2時。今から作るしかないのので少し遅い昼食になる。

先ほどの出来事に考えを馳せながら準備した。

先ほどの出来事、一方的な喧嘩のことだ。先ほどの人がただの力ではなく、セラを使ってあの男の人を吹き飛ばした。でないとその人が本当にセラを持っているかなんて分かるはずもない。あの人なら使わなくても力がありそうな上に、見た目と違い頭も回りそうな人間だというのに、どうしてセラを使ったのだろう。見かけ倒し、には少し見えなかったしなあ。

それに、吹き飛ばされたあの人。魔力持ちだなんて久しぶりに聞いた。学園はそういうことを考える人はいないだろうし、いないようにするために教育をしている。だからこそ最近は全く聞かなかったのだが……。

まあいい。ここで僕が考えていてもあの人の考えは変わらないだろうし、今後も変えていくことはできないだろうから。

しかし、どうにか致命傷こそ回避できたからよかった。全く、この力から外れたことをするとロクなことが起きたためしがない。これもまた僕が未来を変えようと思いつらい一端となっているので、厄介なことだ。

結局のところ、嫌っていながらもこれに頼らなければ、今の状態の僕では生きていくことすら難しいのだ。

だからこそ。

だからこそ、この力をなくすために、僕はあの学園に入ったのだから。

手がかりの一端は薄らとだが掴めた。

僕の夢の中で、アルクという存在はない。いや、正確に言うところのだろうが、少なくとも僕は彼女の存在そのものを認識することが出来ていない。

けれども、初日のことだ。

僕は彼女の編入の未来を見なかった。

その後の夢、昨日のことだが彼女という存在はいるけど認識できていないという状況のようだった。

『向こうには初めて行くよね。教えてあげよつか？』
何人かの女子が何もなかったところに話しかけていた。

おそらく彼女たちはアルクに話しかけていたはずだ。明日からも確かめることができる。夢の中でそうとは認識できないだろうけれども、起きて考えることはできるはずだ。

と、喧嘩からアルクのことにまで考えが発展した結果、みごとに黒こげになった物体が目の前にできてしまった。

「これは……買いに行かないと」

また熱い世界に出ないといけない事にうんざりしながらも、靴をひっかけて外に出て行った。

学園での日常 3

6010年7月16日

朝はいつも通り少しぼーとした後で動き始めた。

機械的に動き、いつもと同じように他の人よりも遅めに校門をくぐる。

校門から本校まではそれなりに距離がある。そこまでの道は石畳の道で舗装されているわけだが、その右側にグラウンドがある。そこから、黄色い悲鳴が上がった。

「今日もかつこいいー!!!」

「凛々しいお姉さま……素敵ですわ!!!」

「はぁ~~~~、いいですね~~~~」

中心にいるのはおそらく最も有名な1年生、カタリナだった。

そんな彼女が観衆に向かって少し手を振る。

「きゃ~~~~~!!!」

まるで、というよりもアイドルの追っかけそのものだった。彼女たちにとってカタリナはアイドルとさほど変わらない存在なのだろう。

それらを後目に、僕は本校の中に入っていった。

僕の席の右隣の席とその手前の席は両方とも空いていた。イザは今日もまた休みのようだ。もしかしたら遅れてくるかもしれないが、たぶん今日は来ないだろう。そんな気がする。

「いよう」

話しかけてきたのはこのクラスでもないはずのフレンだった。

「朝からテンション高そうだね」

「応ともよ」

「無駄に男らしいし」

「…………やめやめ。テンション高いのは本当だけど男らしすぎるつても勘弁だわ」

「うん。正直言つと似合わないよりもキモいっていう感想をつけたい」

「ぐはっ」

「ほら苦しんでる場合じゃないよ。始業の鐘が鳴るまで時間余りないんだから」

「誰のせいでしょうかねえ！」

「？」

「もう、ええわ」

「ゴォーン、ゴォーン。無情にも鐘は鳴る。」

「ちつくしよー、また後でくるわ」

「分かったよ」

おかしいぐらい短い朝のHRも終わり、1時間目が終了してすぐのことだった。

「おらぁ！」

大声を上げてフレンが僕の方に詰め寄ってきた。

「行くぞ」

「え？」

「とりあえず着いてきなつて」

「え？…………え？？」

腕を捕まれ強制的に連行された。

「ちよ、ちよつとどこに行くんだよ！」

「カタリナのところ」

「は？何で？」

「そろそろインタビューしようと思った」

「唐突だね」

「いつものことだし。それと、あっちの方はちゃんとやってるからそれはいいけど何で僕も連れていくの？」

「何となく」

「何となくで連れて行かされてたまるかああ!!!」
しかし、抵抗できずに僕は1年生の教室に連れて行かれた。

「何だ？何の用だ」

「インタビューです」

廊下に彼女を呼びだした。

「そこで息切らせている奴は何だ」

「あ、これは気にしなくてもいいよ」

「じゃあ……連れて……来るな」

「ほんでいろいろと聞きたいことがあるんだけど？」

「お断りだ。答える義理もない。そもそもおまえたち誰だ」

「ああ。俺はフレン。新聞部部长だ。そこで息切らしてるのがパル
ミラ」

「私はカタリナ。カタリナ・ノルティモだ」

「うん。知ってる。有名人だからね」

「ふん。なりたくなつた訳じゃないさ」

「ほんじゃ、まずは恋人は？」

「い、いるわけじゃないか。というか何でそんな質問するんだ」

「へえ。んじゃ何で不良を叩きのめしてるの？」

「……許せないじゃないか」

「ほうほう」

「当たり前のことだ。悪いことは許せないじゃないか」

「にやるほどねえ」

「もういいか。これから授業があるのだが」

「最後にいいかな」

ひとつだけ僕も聞きたいことがあったので、口を挟んだ。

「最後だぞ」

「君は9・11の被害者かい？」

空気が変わった。同時にゴォーンと鐘が鳴った。

「……………失礼する」

そのまま教室の中に消えていった。

「なんで分かったん？セラのおかげか？」

「いや。ただの勘だ」

「そうかい」

「とりあえずは、だ」

「ん？どうした」

「ここから移動しないか？」

こちらに向かって教師が移動してきた。

「ああ。逃げるか」

「逃げるの！？教室に戻るんじゃない？！」

教師が出てきた階段とは反対側の階段から上の階に上った結果、どうにか気づかれる前に教室にたどり着くことができた。

昼休みの前の授業が長引いてしまった。気弱な教師の割になぜか長引かせた。きっと、あの教師の悪口が教室で飛び交っていることだろう。

「さて」

いつもの森に着いた。弁当の包みを開き、一人寂しく食べ始めた。……いや、いつも一人で食べてるからね！別に友達いない寂しいやつとかじゃないから！

まあ、一応ちゃんとした理由があるわけですが。いつも考えながら食事するため、他の人と食べていたら、話を聞かないだろうと考えたので一人で食べている。

なので、今日はこの森について考えていた。

通称、赤い森と呼ばれるこれは学内の敷地の半分以上を占めていて、果てが見えない。そしてこの森はいろいろな噂が絶えないところでもある。

曰く、この森で一年に一度消えてなくなる人がいる、とか。

曰く、この森の奥地まで行くと二度と歸つては来られない、とか
曰く、夜になると獣のうなり声が聞こえる、とか。

曰く、首を吊った人が何人もいる、とか。

ありそうなことから絶対になさそうなことまで。まあ、本当にいろいろあるのだが1つだけ僕の興味を引いたものがあった。

曰く、この森の中心部には、劣化コピー版のオルティウス湖が存在する、ということだ。

オルティウス湖とはこの世界の中心にあると考えられている湖のことだ。しかし現実には、世界の真ん中部分は海に当たるので、そんなところに湖が存在できるわけがないことから、伝説だと言われている。

この湖に対してはたった一つの伝説が残されている。それは、訪れた者の願いを叶えるということだ。それ以外の伝承はないのもオルティウス湖の謎だ。

さて、こちら側の湖の話に移ろう。こちらと同じように願いを叶える力があるされている。実際、そこにたどり着いて願いをかなえてもらった人がいる、ということをつレンから聞いたのだ。あいつの情報は割と信憑性が高いため、もしかしたらあるかもしれない。

僕には叶えたい願いがある。たとえ――

例え、どんなことをしたとしても。

ふと気づくと、いつもここにいる彼女がそこに立っていた。

彼女の目線は僕と膝の上に置かれた僕の弁当の間を行き交っていた。

.....

⌋
⋮
⌋

「……どしたの？」

「……別にどうも——」

グウ。

気のせいかな僕の前から聞こえた気がした。

「……………」

「……………」

「……………私じゃない」

「……………僕は何も言っていないんだけど」

「……………」

僕の指摘に口を閉じた。

「……………」

「……………」

「……………食べる？」

「……………いや。お金もらってきた」

「でも、今から購買に行っても多分買えないよね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………やっぱり食べ——」

「つ——」

無言の後、口を開きかけた矢先に彼女はダッシュで逃げ出した。

「あ、ちよつと！」

立ち上がって追おうと思ったが、いかんせん弁当が邪魔だった。

彼女はいつの間にか見えないうらいのところまでに行っていた。

「ま、いいか」

仕方ないので、また昼食を食べ始めた。食べ終わる頃には昼休み

終了5分前になる鐘の音が聞こえた。

放課後。半ば諦めながらもいつものように生徒会前のドアに立っ

ていた。ノックを3回し

「失礼します」

と奥の方に向かって声を投げかける。

「ノックは3回じゃなくて4回でしょう」

「そんなに親しいものでしたっけ」

「あら。パルは私とそんなに親しくないと思っているのかしら」

「個人的にはそうだと思っています。けど、この部屋に入ることは事務的な事柄なので」

いつもの席に腰かけると（深い意味はない。ただ、たまたま毎回毎回座っているだけであって、僕に決まった席なんてものは存在しない！）目の前につきさつき煎れられたばかりの紅茶があった。

「あれ、僕が来るのがいつなのか分かっていたんですか？」

「うふふふ」

「……………」

特に何も突っ込まずにいることにした。
恐ろしいしね。

「おいしいです」

「ありがとう」

「それはこちらのセリフですよ」

「ふふふ。さて、本当にそうかしら？」

「どういう意味ですか」

「例えば、実験台になってくれてありがとう、とか
背中に冷や汗が伝う。

「と、特に変なものとか入ってませんよね？」

「多分入れてないわよ」

「多分って何ですか！入れている可能性もあるということですか！」

「まあ、昨日あるところから白い粉が手に入ったから間違えてそれを入れちゃった、なんてことはあるかもしれないわね」

「白い粉！何の白い粉ですか！？もしかしてそれってやばい奴じゃないんですか！？」

「やあねえ。ただの風邪薬よ」

「……………」

ぐうの音も出ない。からかわれただけ、そう考えて半分ほど残っ

ていたそれを飲み干した。

「おかわりはいるかしら？」

「変な薬が入っていないのなら」

僕の目の前に1つのカップが置かれ、その後で2つのカップをテーブルの上に……

「何で2つ置くんですか？レネさんが飲むにしても1つだけでいいでしょう」

「何でって。ああ。多分もうそこに……」

「「どうもです。先輩方」」

「はい。よく来てくれたわね」

「あれ、先輩。どうして汗かいてるんですか？」

「ここの部屋、冷房が効いていて寒いくらいですよ？」

「何も問題ないさ」

冷房よりも冷たくなったのは間違いない。

体ではなく心のどこかが。

「あ、そうそう。明日はここに来なくてもいいからね」

「そうなんですか？」

「ええ。来てもらってもいいけど明日は私がいらないから」

「何の用事があるんですか？」

「こらっ。レネ先輩に失礼でしょう」

「いえ。いいのよ。ただ単に私用があるだけなんだから」

そう言って、少し微笑んだ。

「まあ、分かりました。明日は休みということで」

「了解です」

「じゃあ、さっさと帰っていいですね」

「ええ。そうしてちょうだい」

そこからは談笑が続いた。穏やかな時間だった。と思っておく。白い粉なんてなかったと思っておく。カップの底にはなにもなかった、そう思っておく。

「レネ先輩、これなんですか？」

「ええ、それは――」

そんな会話は僕たちはしていない。していないんだ。

夕方。何のことはない。今日必要か必要でないか微妙な物が教室にあっただけの話だ。取りに帰ってもいいしそうでなくともいい。考えた結果、ないよりある方がいいと思い取りに行った。

机の中にあるそれを取って、帰った。もちろんこんな遅い時間には誰もいなかった。

闇の中から、光の中へ。

目が覚めた。

6010年7月16日

覚醒。というほどはつきりしているものではないのだけど。

ベッドから抜け出さないと寝てしまう気がするので、どうにか這い出た。

機械的に動き、いつもと同じように他の人よりも遅めに校門をくぐる。

校門から本校まではそれなりに距離がある。そこまでの道は石畳

の道で舗装されているわけだが、その右側にグラウンドがある。そこから、黄色い悲鳴が上がった。

「今日もかつこいいー!!!!!!」

「凜々しいお姉さま……………素敵ですわ!!!!!!」

「はぁ~~~~~、いいですわね~~~~~」

中心にいるのはおそらく最も有名な1年生、カタリナだった。そんな彼女が観衆に向かって少し手を振る。

「きゃ~~~~~!!!!!!」

まるで、というよりもアイドルの追っかけそのものだった。彼女たちにとってカタリナはアイドルとさほど変わらない存在なのだろう。

それらを後目に、僕は本校の中に入ってしまった。

僕の席の右隣の席は空いていた。イザは今日もまた休みのようだ。もしかしたら遅れてくるかもしれないが、たぶん今日は来ないだろう。そんな気がする。

「いよう」

話しかけてきたのはこのクラスでもないはずのフレンだった。

「朝からテンション高そうだね」

「応ともよ」

「無駄に男らしいし」

「……………やめやめ。テンション高いのは本当だけど男らしすぎるつてのも勘弁だわ」

「うん。正直言つと似合わないよりもキモいっていう感想をつけたい」

「ぐはっ」

「ほら苦しんでる場合じゃないよ。始業の鐘が鳴るまで時間余りないんだから」

「誰のせいでしょうかねえ!」

「?」

「もう、ええわ」

ゴォーン、ゴォーン。無情にも鐘は鳴る。

「ちつくしょー、また後でくるわ」

「分かったよ」

僕たちのやりとりを見ていたアルクが、なぜか笑っていた。

おかしいぐらい短い朝のHRも終わり、1時間目が終了してすぐのことだった。

「おらあ！」

大声を上げてフレンが僕の方に詰め寄ってきた。

「行くぞ」

「え？」

「とりあえず着いてきなつて」

「え？……え？？」

腕を捕まれ強制的に連行された。

「ちょ、ちよつとどこに行くんだよ！」

「カタリナのところ」

「は？何で？」

「そろそろインタビューしようと思つてた」

「唐突だね」

「いつものことだし。それと、あっちの方はちゃんとやってるからそれを聞いて安心した。一応ちゃんとやってくれているようだ。」

「それはいいけど何で僕も連れていくの？」

「何となく」

「何となくで連れて行かされてたまるかああ！！！！」

しかし、僕より強い力のフレンに抵抗できる訳もなく、僕は1年生の教室に連れて行かれた。

「何だ？何の用だ」

「インタビューです」

フレンが後輩の子に頼んで、廊下に彼女を呼びだした。

「そこで息切らせている奴は何だ」

「あ、これは気にしなくてもいいよ」

「じゃあ……連れて……来るな」

「ほんでいろいろと聞きたいことがあるんだけど？」

「お断りだ。答える義理もない。そもそもおまえたち誰だ」

「ああ。俺はフレン。新聞部部長だ。そこで息切らしてるのがパルミラ」

「私はカタリナ。カタリナ・ノルティモだ」

「うん。知ってる。有名人だからね」

「ふん。なりたくてなった訳じゃない」

「ほんじゃ、まずは恋人は？」

「い、いるわけじゃないか。何でそんな質問するんだ」

「へえ。んじゃ何で不良を叩きのめしてるの？」

「……許せないじゃないか」

「ほうほう」

「当たり前のことだ。悪いことは許せないじゃないか」

「にやるほどねえ」

「もういいか。これから授業があるのだが」

彼女はそう言ったが、僕には彼女に聞きたいことが一つだけある。その質問をぶつけてみるか？

「最後にいいかな」

ひとつだけ僕も聞きたいことがあったので、口を挟んだ。

「最後だぞ」

「君は9・11の被害者かい？」

空気が変わった。同時にゴォーンと鐘が鳴った。

「……失礼する」

そのまま教室の中に消えていった。

「なんで分かったん？セラのおかげか？」

「いや。ただの勘だ」

「そうかい」

「とりあえずは、だ」

「ん？どうした」

「ここから移動しないか？」

こちらに向かって教師が移動してきた。

「ああ。逃げるか」

「逃げるの！？教室に戻るんじゃない？！」

教師が出てきた階段とは反対側の階段から上の階に上った結果、どうにか気づかれる前に教室にたどり着くことができた。

昼休みの前の授業が長引いてしまった。気弱な教師の割になぜか長引かせた。きっと、あの教師の悪口が教室で飛び交っていることだろう。

「さて」

何となくパンを買いたい気分なのだが、お金を使ってもパンを買うか？

「買ってしまった……」

買った後に結構、後悔した。今月は若干消費を押さえないといけないことになってしまった。でもいいや。しょうがない。食べたくなくなってしまったんだから。

森に着いた。パンを買いに行っていたことと、授業が遅くなったことから、いつもここにいる彼女はいないと思っていた。しかし、

向こうが森の中から出てきた。彼女の目は僕と僕の手に持っている弁当の間を行き交っていた。

「……………」

「……………」

「……どしたの？」

「……別にどうも——」

グウ。

気のせいかな僕の前から聞こえた気がした。

「……………」

「……………」

「……私じゃない」

「……僕は何も言っていないんだけど」

「……………」

僕の指摘に口を閉じた。頬が赤くなっていないけれど。

「……………」

「……………」

「……食べる？」

「……いや。お金もらってきた」

「でも、今から購買に行っても多分買えないよね」

「……………」

「……………」

「……………」

「今日の僕は弁当じゃなくてパンが食べたい気分なんだ」

「……………」

「でね、このままじゃ弁当が余っちゃうんだけど」

「……………」

「あゝあ。誰か食べてくれないかな」

少しあざとすぎるかなあと思いつつ、言ってみた。

彼女の目線はパンと僕の間を行き交っている。

「…………… 食べないなら」

「ん？」

「食べないなら…………… もらう」

「どうぞ」

「……………」

無言で受け取り

「あ」

森の奥へ消えていった。止める間もなかった。

「弁当箱どうやって返してもらおう………」

まあ、隣のクラスということを考えればどうにでもなる気がする。僕はカバンからパンを取り出し食べ始めた。

放課後。どうやら、明日は生徒会室に行かなくても良いようなので、明日文句は言われることはないと思われるが、今日はどうする？

明後日ぐらいに文句を言われそうな気がしたので、半ば諦めながらもいつものように生徒会前のドアに立っていた。ノックを3回し「失礼します」

と奥の方に向かって声を投げかける。

「ノックは3回じゃなくて4回でしょう」

「そんなに親しいものでしたっけ」

「あら。パルは私とそんなに親しくないと思っているのかしら」

「個人的にはそうだと思っています。けど、この部屋に入ることには事務的な事柄なので」

腰かけると目の前についさっき煎れられたばかりの紅茶があった。

「あれ、僕が来るのがいつなのか分かっていたんですか？」

「うふふふ」

「……………」

特に何も突っ込まずにいることにした。

恐ろしいしね。

「おいしいです」

「ありがとう」

「それはこちらのセリフですよ」

「ふふふ。さて、本当にそうかしら？」

「どういう意味ですか」

「例えば、実験台になってくれてありがとう、とか」
背中に冷や汗が伝う。

「と、特に変なものとか入ってませんよね？」

「多分入れてないわよ」

「多分って何ですか！入れている可能性もあるということですか！」

「まあ、昨日あるところから白い粉が手に入ったから間違えてそれを入れちゃった、なんてことはあるかもしれないわね」

「白い粉！何の白い粉ですか！？もしかしてそれってやばい奴じゃないんですか！？」

「やあねえ。ただの風邪薬よ」

「……………」

ぐうの音も出ない。からかわれただけ、そう考えて半分ほど残っていたそれを飲み干した。

「おかわりはいるかしら？」

「変な薬が入っていないのなら」

僕の目の前に1つのカップが置かれ、その後で2つのカップをテーブルの上に……………

「何で2つ置くんですか？レネさんが飲むにしても1つだけでいいでしょう」

「何でって。ああ。多分もうそこに……………」

「……………どうもです。先輩方」

「はい。よく来てくれたわね」

「あれ、先輩。どうして汗かいてるんですか？」

「この部屋、冷房が効いていて寒いくらいですよね？」

「何も問題ないさ」

冷房よりも冷たくなったのは間違いない。
体ではなく心のどこかが。

「あ、そうそう。明日はここに来なくてもいいからね」
「そうなんですか？」

「ええ。来てもらってもいいけど明日は私がないから」
「何の用事があるんですか？」

「こらっ。レネ先輩に失礼でしょう」

「いえ。いいのよ。ただ単に私用があるだけなんだから」
そう言つて、少し微笑んだ。

「まあ、分かりました。明日は休みということで」
「了解です」

「じゃあ、さつさと帰っていいですね」

「ええ。そうしてちょうだい」
そこからは談笑が続いた。穏やかな時間だった。

夕方。教室に入る。

「毎日来る訳じゃないんだね」

「水曜日はバイトがあるんだ」

教室に入るとアルクがいた。

「ふうん。だから、一昨日は来なかったんだ」

「忘れていたわけじゃなかったんだけどね。でも、バイトの方をさぼると命に関わるから」

「小遣い稼ぎじゃないんだ」

「いや、店主の人に怒られるっていう意味なんだけどね」

あの人は怒らせると怖い。

「それはご苦勞様です」

笑顔で返された。

「うん」

生返事しか返すこともないので、とりあえず外を見た。

「今日は楽しかったの？」

何の脈絡もないが、前回僕がそう言ったからだろう。

「今日はあまり楽しくなかったよ」

「一昨日は？」

「一昨日も同じ」

アルクが来たあの日以降は、そんなに変わったこともなく世界は回り続けていた。

「じゃあ、私がいる意味はあまりなかったのかな」

誰にもわかるぐらいに目に見えて落ち込んだ。

そんな彼女を見て言おうか言うつまいかほんの少しだけ迷った。

「少なくとも今は」

「？」

でも、言うことにした。

「少なくとも今は楽しい」

「ほんとに？」

「うん。ほんとのことだよ」

今は未来で見たことではないから。

「なら、いいこと……なんだよね？」

「うん。そうだよアルク」

特に悪いことも起こらない。今の時間にここに来ると落ち着ける。

「どうやったら、パルがいつも楽しくなれるのかな」

眉間にしわが入って、うーってうなってる。

「とりあえずその顔止めたら？」

「うーんと、整形した方がいいよってこと？」

いきなり突拍子もないことを言ってきてびっくりした。

「違う違う。表情の方」

「どうして？」

「女の子がしわ寄せていたら後後で大変なことになるってこと」

「まだ若いからきつと大丈夫だよ」

おばさんという年齢に当たる人に聞かれたら、怒られそうな一言だった。

「そういうことあまり言わない方がいいよ」

「難しいよ。そんなこと言われても分かんない」

「そうかな？」

言わないことが分かんないのか、言ってることそのものが分かん

ないのかは僕にも判らない。

「そうだよ」

また、うーってうなっていた。

「後、僕が楽しくなるっていうことは別に考えなくてもいいと思うよ」

「おお」

「ん？」

「そういえばそんな話だったね」

どうやら忘れていたようだ。その間もずっと眉間にしわが入っていたけど。

「うーん。パルが楽しいっていう話かあ」

「なんか唸っているの見たら、壊れかけの機械みたいだね……」

うんうん唸っている。少し見ていられない気分になった。

「僕が楽しくなるってことを考えなくてもいいと思うよ」

「なんでそういうこと言うかなあ」

「どうしようもないことだからね」

うん。どうしようもないことだ。そりゃあ、まったく楽しくない人生だったかと言われればそんなわけではない。でも、この力のおかげで半減以下になったのは事実だ。けれど、

「それに、今は楽しいから問題ないよ」

「うーん。だったらいいか！」

ようやくこの前も見たきれいな笑顔を見せてくれた。

「じゃあ、僕は帰るけど、アルクは」

「え」

言いづらくなったな。そんなに落ち込まれたら。仕方ない。別の言葉を使うとしよう。

「一緒に帰る？」

「ううん。いい」

振られてしまった。

「そっか」

「うん」

「それじゃ」

扉を開ける。

「明日は」

「うん？」

彼女の方に振り返った。

「明日は会えるよね」

「うん」

それは絶対とは言わないけれど。

「じゃあ、また明日」

「うん。また明日」

彼女に背を向けて歩き出した。

下校中、考えていたことは振られた時に見せた彼女の表情だ。

悲しみやさみしさやいろんなものがないまぜになっている表情。

それが少し気にかかっていた。

学園での日常 3（後書き）

今回はまだ、必要なので未来の夢と現実に起こることの両方を書いていますが、しつこいと思われる方はいらっしやいますでしょうか。しつこいと思われた方はこの感想もしくは下記のメールアドレスにその旨を書いてくだされば作者が幸せになります。

leonhardt0724あつとまーくyahoo.co.jp
(あつとまーく@)

そついうのでなくても、たとえ厳しい意見でももらえれば励みになると思いますのでよろしくお願いします。

学園での日常 - 4

6010年7月17日

起床。時計の表示は7時30分。頭を整理すると今日は帰る時間頃に雨が降り始めるらしい。やっかいなことだ。折り畳みの傘を持つていくことにしよう。

校門をくぐる。そういえば口が動いているはずだが今日は動いていない。生徒会のある日はレネさんが話しかけてくるのだが、今日はないからだろうか。

しかし、そういえば昨日もなかった。なぜだろうか。

教室の中はいつもよりほんの少しうるさかった。原因は強いて言うのなら隣の席にイザが来ていることだろうか。

「ずっと抱きついていてもいいよね！」

「いいわけないわい！は～～～な～～～せ～～～！！！」

今日も好き勝手にいじられているようだ。対処方法でも考えればいいのに。

ゴォーン、ゴォーン

「じゃ、また後でね」

「おおっう」

目を回していた。机の上でぐったりしている。

「だ、大丈夫？」

「も、もんだいないぞ」

もう少ししたら立ち直っていることを祈ろう。

ニクラス先生が入ってきてHRの後に、授業が始まった。
「暇じゃ」

静かな教室に割と大きめの声を通る。

「イザ！自ら地雷を踏まない！」

「イザ、パルミラ。この問題解くか？」

槍が飛んできた。僕の方にもだ。

「任せろっ！」

「はあ。仕方ないか」

黒板に立たされて問題を解かされた。イザはもちろんのこと、僕でも何とか解くことができた。

「うし。戻ってよし」

「はあ。どうにかなった」

「ぬるい。ぬるいぞ」

僕にはどうにかできるレベルだったからなあ。彼女にとっては簡単すぎたのだろう。

「このくらいのレベルが限度だ。終わったら戻れ」

「むう。しょうがないのう」

僕はふつうに、イザは未だ不満げに戻った。彼女にとってはこの授業は暇なままなのだろう。

「研究所でやってる研究のことでも考えたら？」

「ここに来ている意味がなくなるわい」

研究のことを考えたくないからではなく、ここを出ておけば箔がつくから通っていると思うのだけど。

「むううう」

教科書に何か書いては消す、ということを繰り返していた。

「先に終わらせるべきかのう。いや。でも……………」

何かに悩んでいるようだ。結局、研究のことで悩んでいるように見える。何の事情も知らない人が見たら独り言をいう変な女の子にしか思えないだろう。

ただ、この教室では止める人はいないだろう。まあ、止める間もなく終了を告げるチャイムが鳴ったのだが。

特別棟での授業が多かった。芸術の音楽は防音のため、美術は専

用道具が置いてあるためそちらに移動する。他にも設備があることから家庭科の調理実習などもこちらでやる。

「だから、なんでそんなに上手いのじゃ？」

「慣れたよ。やってれば出来るさ」

調理実習の時間、イザに訊かれそう答えながらジャガイモの皮をむく。今回はカレーだ。

「そんなにするとキレイにむけんぞ」

「包丁使つてると危なっかしいから、イザはピーラーを使いなさい」
手つきがたどたどしい。手を滑らしたら指を切りそうだ。見ているこっちが怖い。

「なぜにパルに出来て私には出来ないのじゃ」

「ずっとやってれば出来るようになるって」

「むう」

ピーラーを使つてたどたどしく人参を剥いていた。

カレーが昼食となった。今日は弁当を預けたままなのである意味では助かったのだが、今日中に返していただかないと明日から困る。

「お」

食べるわけでもないのに森に入ると、いつものところに弁当が置いてあった。

「ん？」

拾うと紙が落ちた。一言だけ

『ありがとう』

と書かれた紙だった。

何となく彼女らしいな、と感じた。

彼女はいなかったので校舎に戻る。自分の教室に戻るのには1年の使っているフロアを通らなければならない。

さて、これは運が良かったのだろうか、悪かったのだろうか。

「ちよっと、お前」

呼び止められた。

「来い。話したい」

カタリナだった。下級生から呼び止められるのは漆原以外では初めてだ。それもあまり好ましくなさそうなことで。

「いいけど」

「……………」

僕が返事をする黙って校舎を出た。森が見えてきた。校舎裏に回るようだ。

「生意気な下級生。呼び出し。校舎裏とくると」

「普通ならカツアゲだ」

「お、ノリがいいね」

「だが、今回は立場が逆だ」

立ち止まって向かい合った。

「なぜ分かった。お前はどこまで知っている」

「ふむ」

どうやら後暗いこともあるのだろうか。だが、僕が彼女を脅してもしょうがない。正直に言うとうしよう。

「勘」

「勘って、お前」

「もしかしたらって思っていたから訊いてみただけだよ」

「そ、そんなことで……………」

割とショックを受けているようだった。

「まあ、そんなに気にしてもしょうがないと思うよ」

「私は気にするんだ！」

立ち直った。

「仕方ないだろうこんな能力なんだから！」

「どんなセラなの？」

しまった、という顔をした。

「まあいいさ。とりあえず私が言いたいのは」

「黙っておいてくれ？」

カタリナが頷いた。

「……………条件は」

「何も要らないよ。僕にとっては損も得もないから」

話は終わったので校舎に戻った。

戻ったところで、5時限目の予鈴が鳴ったので、慌てて教室まで走った。

放課後。今日は生徒会がないので、早めに帰ることが出来る。ちようど夕方のタイムサービスがあるのでそれを狙うとしよう。ただ、雨には気をつけるとしよう。

6010年7月17日

起床。時計の表示は7時30分。頭を整理すると今日は帰る時間頃に雨が降り始めるらしい。やっかいなことだ。折り畳みの傘を持つていくことにしよう。

「間違えた……………」

大した間違いではない。ただ、傘を普通のも持ってきてしまったというだけだ。

校門をくぐる。そういえば今日はレネさんが話しかけてこない。生徒会のある日はレネさんが話しかけてくるのだが、今日はないからというのが理由だろうか。

しかし、そういえば昨日もなかった。なぜだろうか。

教室の中はいつもよりほんの少しうるさかった。原因は強いて言うのなら隣の席にイザが来ていることだろうか。

「ずっと抱きついていてもいいよね！」

「いいわけないわい！は～～な～～せ～～～！！！」

今日も好き勝手にいじられているようだ。対処方法は……………彼女の力ではちよつと無理かもしれない。

ゴォーン、ゴォーン

「じゃ、また後でね」

「おおーう」

目を回していた。机の上でぐったりしている。

「だ、大丈夫？」

「も、もんだいないぞ」

もう少ししたら立ち直っていることを祈ろう。

ニクラス先生が入ってきてH Rの後に、授業が始まった。

「暇じゃ」

静かな教室に割と大きめの声が通る。

「イザ！自ら地雷を踏まない！」

「イザ、パルミラ。この問題解くか？」

槍が飛んできた。僕の方にもだ。

「任せろっ！」

「はあ。仕方ないか」

黒板に立たされて問題を解かされた。イザはもちろんのこと、僕でも何とか解くことができた。

「正解だ。戻ってよし」

「はあ。どうにかなった」

「ぬるい。ぬるいぞニクラス」

僕にはどうにかできるレベルだったからなあ。彼女にとっては簡単すぎたのだろう。

「このくらいのレベルが限度だ。終わったら戻れ」

「むう。しょうがないのう」

僕は何もすることはなく、イザは未だ不満げに戻った。

戻るときに小さく拍手をしているアルクが見えた。彼女にとってはそんなにすごいことだったのだろうか。

「研究所でやってる研究のことでも考えたら？」

「ここに来ている意味がなくなるわい」

研究のことを考えたくないからではなく、ここを出ておけば研究者として箔がつくから通っていると思っていたのだけど。

「むううう」

教科書に何か書いては消す、ということを繰り返していた。

「先に終わらせるべきかのう。いや。でも……」

何かに悩んでいるようだ。結局、研究のことで悩んでいるように見える。何の事情も知らない人が見たら独り言をいう変な女の子にしか思えないだろう。

ただ、この教室では止める人はいない。まあ、止める間もなく終了を告げるチャイムが鳴ったのだが。

今日は特別棟での授業が多かった。芸術の音楽は防音のため、美術は専用道具が置いてあるためそちらに移動する。他にも設備があることから家庭科の調理実習などもこちらでやる。

「だから、なんでそんなに上手いのじゃ？」

「慣れだよ。やってれば出来るさ」

「うわっ！すごい！」

調理実習の時間、イザ応答しながらジャガイモの皮をむく。今回はカレーを作ることだった。

「そんなにするとキレイにむけんぞ」

「わわっ！イザちゃんはピーラーを使って！」

「いやじゃ！アルクにだって出来るんじゃない！我にだって出来る！」

「包丁使つてると危ないから、イザはおとなしくピーラーを使った方がいいよ」

「パルまでそのようなことを……。我は認めん。認めんぞ！」

僕とアルクが止めに入るも拒否するイザ。包丁を握ったまま反論

するので、説得は諦めざるを得なかった。

こちらが説得をやめると、イザが作業の続きをし始めた。イザの手つきはたどたどしい。手を滑らしたら指を切りそうだ。見ているこっちが怖い。

「なぜにパルに出来て私には出来ないのじゃ」

「ずっとやってれば出来るようになるって」

「むっ」

自分でもいずれ指を切ると思ったのだろうか。結局、ピーラーを使ってたどたどしく人参を剥いていた。少しほっとした。

「アルクは普通に上手いね」

「そうかなあ。たまに、お母さんの手伝いはするけど」

彼女はぜんぜん危なっかしくない。他の人と比べても問題なくタマネギをみじん切りにしていた。

「それにパルの方が上手だよ。どうしていたら男の子がそんなになるかなあ」

どうやら僕はそれなりに料理が出来る人間らしい。自炊してるから当たり前だと思ってるけど。

「慣れじゃないかな。やっていれば自然と身に付くと思うよ」

「そっかー。じゃあ、私はもっとお母さんを手伝えればいいんだね」

「うん。多分、もっと上手くなるよ」

握り拳をつくってやる気をみなぎらせている。

「よおーし！ やっっちゃうぞー」

「ストップストップ！ まだ、具材を鍋に入れちゃだめだつて！」

…………… やっぱり危なっかしいかもしれない。

カレーが昼食となった。今日は弁当を預けたままなので助かったのだが、今日中に返してもらわないと明日から困る。

「お」

食べるわけでもないのに森に入ると、いつものところに弁当が置いてあった。

「ん？」

拾うと紙が落ちた。一言だけ

『ありがとう』

と書かれた紙だった。

何となく彼女らしいな、と思った。

「彼女は……いないな」

周りを見てみても見あたらなかった。これを置いたのは結構前のことだったようだ。

森の奥に踏み行ってみようか。今日は授業時間に昼食を取ったよなものだから、時間にも余裕がある。

森の中は薄暗い。前後不覚に陥りそうだ。

鳥らしきものの鳴き声はするのだが、姿は見えない。

特に目印らしき物もないので戻るのには少し大変かもしれないが、きつとどうにかなると思って森の奥に進んだ。

森の中は涼しい。どこから風が吹いている。さっきから歩いているとどうもある方向から吹いているようだ。

「何かあるかもしれない」

行くあてもないのでその方向に向かう。

今日は休むこともほんの少し覚悟した。

やがて『そこ』にたどり着いた。

『そこ』を形容する言葉は無い。

素晴らしく。例えようもなく。

美しかった。

いや、そんな言葉すら陳腐だ。

単純な言葉ですら陳腐な『そこ』は

『湖』だった。

澄んでいて、底が見えるほどに透明なのだが、底がどれだけ深いのかも分からない。

果てがあるのだろうか、その果てが本当に果てなのか分からない。この学校の敷地はもしかしたらこの湖に半分以上は費やされてるようなそんな気がした。

そして、湖の水面に一つ影があった。その影は湖に写り、その体を映していた。

病的なまでに白い足。

何をどうすればこんな芸術品が作れるのだろうかと思うような体。掴んだ瞬間、バラバラになって碎けてしまいそうな腕。

そして、完璧というのはこのためにあるのだろうかという顔。

その人間離れた美しい少女は

湖面に

立っていた。

「……………」

僕はあまりの事態に言葉も失い、思考も停止した。

「来たんだ」

だから、鈴の音のようなその声がその少女から聞こえたということに思い当たるのに時間を要した。

「おめでとう。君には資格があったんだね」

「……………資格って？」

どうにかその一言だけは絞り出した。

「願いを叶える資格」

彼女はその湖面の中心から僕の方へ歩いてきた。波紋が湖面に広がり、円を作る。その度にリーン、リーンと不思議な音色が空間に響いた。

「ワタシはアオイ」

西の地方の名前の雰囲気をする名前だった。ちなみに、西の地方とは『漆原』のように少し違う名を持っている。

「キミの名前は？」

「……………パルミラ。パルミラ・アガスティア」

「そう」

次に飛び出した彼女の言葉はとんでもないものだった。

「名前からして不幸だったんだ。可哀想」

「……………な！」

「そして、残念ながらキミの願いは叶えることはできないって——」

「そんなことはどうでもいい！」

この場雰囲気とか考えることなど出来なかった。

「ふざけるなよ——！俺を馬鹿にするのは結構だが、俺の親を穢すんじゃないえ——！」

名前を馬鹿にされるとはそういうことだ。

「そう」

「言うことはそれだけか」

「じゃあ、どうすれば？」

「訂正しろ。少なくとも馬鹿にされる謂^{いわ}れはない」

「そう。なら、あなたの名前は特に可哀想なんかではないということ」

「……………」

無感動な声でそう言われた。もういい。ここに用はない。

「失礼する」

「…………… お弁当は、ありがとう」

その声にまで色がなかったとしたならば、俺は——僕は2度とこの子に会おうなどと考えなかっただろう。

森を通り校舎に戻る過程でどうにか落ち着いてきた。

なぜ、僕の名を聞いただけで可哀想と彼女は言ったのだろうか。

『名前からして不幸だった』とはどういうことだろうか。

「自分の名前の意味、か」

僕には一切わからなかった。少なくとも現代語にて当てはまる言葉が存在しないことは確かだ。

「少し調べてみようか」

彼女の最後の一言はそう考えるだけの余裕を僕にもたらしてくれた。

余談だが、僕は5時限目に間に合わなかったのだが、アオイと名乗った彼女は遅れてなく、隣のクラスを見るとちゃんと座っていた。もしかしたら今日会ったのは双子のもう一方だったんじゃないかと思える出来事だった。

「雨が降ってきたな」

授業が全て終わり、少しすると雨が降ってきた。もしもすぐに帰っていたとしたならば、スーパーに立ち寄っていた頃だろう。

「そうだね」

独り言に返事があるとは思わなかった。

僕しかいなかった教室にアルクが入ってきた。

「今日は楽しかった？」

「なんかそれいつも訊くね」

「そうかな」

「うん」

「忘れちゃった。私バカだからかな？」

「せめて昨日のことは覚えておこうよ。鶏じゃないんだから」

「にわとり？」

「鶏は3歩、歩いたら物事を忘れるって言うじゃない」

「ああ。………そこはかとなく失礼な気がするよ」

「気のせいじゃないかな」

「ふうん。それでそれで、質問の答えは？」

結局、なんだかんだでそれを聞きたがる。仕方ないから正直に答えた。

「………そんなに楽しくはなかったかな。面白いものは見れたけどね。そういえば、あの湖に関しては良く分からないまま引き返すことになってしまった。」

「何を見たの？」

「湖だよ」

僕は今日見た光景について、アオイのことは省いて説明した。

「ほええ。そんなものがこの学校に」

「うん。………って、信じるの？」

「え？嘘じゃないんでしょ？」

「もしかしたらそうかもしれないでしょ」

「大丈夫だよ。パルはきつと嘘ついてないから」

「ま、いいけれど」

正直信じてもらえろと思わなかった。我ながら突拍子もない話の部類に入ると考えていたから。

「ありがとう」

「え？なんでお礼なんて言うの？」

「なんでもないよ。あ、そうだ。傘は持ってる？」

話題転換のために無理やりひねり出した言葉だった。

「濡れて帰るよ。ええーっと、バカは風邪を引かないって言うみたいだから」

「アルクはバカに見えないけどね」

「私は何も考えてないもん。よくバカって言われるよ？」

「だれから？」

「お父さんから……。うー、そういえば今日もバカにされた気がする……」

「そうなの？」

「うん」

少し意外な感じを受けた。なぜだろう。

「ふうん。僕には頭がいいように思えるけどね」

「そうかな。えへへ」

なんかにやけてた。

「今のアルク見てたら前言撤回したくなった」

「……ひどいよ」

途端に涙顔になった。

「持ち上げて落とすなんて……」

「ごめんごめん」

「うう……」

なんか恨めしそうな目で見られた。

「なんか悪いことしてる気分になるから」

「責任とってください」

「……どうすればいいのですか、お嬢様？」

「お、お嬢様なんて。そんなのじゃないよ……」

なんか照れていた。

「さてと、帰るとしますか」

「……………あれ？ごまかされた？」

「帰らないの？」

「あ、うん。今日は帰る……………あれ？」

「どうしたの？」

「何か違和感があるんだけど……………あれ？」

「あ、傘は貸すよ。2本あるから」

「あ、うん。ありがとう……………あれ？」

「傘もあるから濡れなくても済むよね？」

「うん。そうだね……………あれ？」

「それじゃ、お先に」

「うん。また明日」

「また明日」

「……………あれ？」

途中からボーっとしてたみたいだが、間違えて持ってきた傘も渡せたことだし結果オーライといっておこう。

今日は散々だった気もするが、最後は楽しかった。

道を外れることはしたくないとは思っけれど、そうじゃないと得られないことがあるのは確かだ。

また、湖に行くかどうかは分からないけれど。

今度はあんな『素』の自分を出すことだけは勘弁したい。

学園での日常・5

6010年7月18日

「おはようございます!」

「おはよう。遅刻魔さん」

「そこまで遅れてないですよ〜」

目の前には校門に立っている先生とそれに捕まっている生徒がいた。

察しの良い方はここまでで気づく、というか誰でも気づくと思うが僕は遅刻した。

「さてと」

「待てい」

「うつ」

捕まっている少女の隣を当然のように通り過ぎようとしたが捕まった。

「クラス出席番号名前」

「21C22番パルミラ・アガスティア」

「初めてか？」

「少なくとも今年はそうだと思います」

「まあ、通ってよし。次回から気をつける」

「はい」

ちよつとおとがめを食らったぐらいですんだ。

「何である人はよくて私はだめなんですか〜」

「お前が遅刻常習犯だからだ!!」

「い〜〜〜〜や〜〜〜〜!!!!」

騒がしい声をBGMとし、校舎までの道を歩く。すると、目の前に小等部の生徒が紛れ込んでいるのが見えた。

……間違えた。イザだ。

「おはよ、イザ」

「はあ、はあ。おお、パル、か」

「い、息切れしてるけど大丈夫？」

「も、もんだい、ないわい。ちよっと、はしったら、つかれた、だけじゃ」

「問題大ありの回答だよな」

足だつてふらふらしてるし。

しょうがない。耐えるか。

「ほら、イザ」

僕は彼女と手をつないだ。

「ど、どうものじゃ、パル」

「お礼は言わないでいいよ」

こちらは謝らなければならぬというのに。

「パル？お主も大丈夫か？」

「僕？別に体は悪くないし、イザほど体力がないわけでもないからね」

体は悪くない。むしろ問題ない。

「むっ」

「ほら、行つて怒られよう」

「う、うむ」

精神が病みそうだ。まあ、校舎までの距離なら問題ないだろう。

「イザはいつものことだが、お前は珍しいな」

「すいません」

「まあ、いい。おら、とつとと教室に行け。途中だが2人とも問題ないだろ」

「うむ。我もパルもそこまで頭は悪うない」

僕はともかく、イザが授業に付いていけなくなるというのは考えにくいからね。

「分かっているさ。次あつたら指導しないといけないから遅れるな

よ」

「はい、努力します」

「では、失礼したぞ」

「失礼しました」

職員室にいた我らが担任に遅刻の旨を伝え、教室に入った。

「皆の衆！おはよう！」

言っただのはイザだ。僕にそんな度胸はない。

「お、おはようございます」

「おはようございます。それじゃ2人とも席について」

「うむ！」

「すいません」

僕たちは席に着いた。時間を見る限り、授業もそんなに進んでないようだ。

「では、続きを。ここでこの人物が思ったことは………」

とりあえず板書すれば授業に追いつけそうだ。隣の方は板書することもなく、机に突っ伏して寝ているけれども。

「イザ、遅れてきたんだから少しは授業を受ける意思表示とかした方がよいと思うけど」

「でもな、つかれた」

「まあ、イザは咎められないとは思っただけだね」

自分の心構えの問題で、自己満足ではあるのだけど。

「でも、一応ここは勉強する場なんだから」

「とは言ってもものう。我は現代語が苦手だしのう」

「え？」

なんとオールパーフェクトは当たり前、ミスしたとしても彼女のケアレスミス程度のイザさんにも苦手な勉強はあったらしい。

「人物の心情というのかの。我には理解できぬ場合が多いのじゃ」

「ああ〜」

なんか妙に納得してしまった。

「試験となると試験を作った者がなにを求めているのか分かるから

かの、どうにかなるのじゃが……それを話が理解できたとは言わぬじゃろう?」

「確かにそうだね」

「じゃから、我はこの科目が苦手じゃ」

「ふむ」

頭の中でいろいろと考えてみた。

「イザ」

「ん? なんじゃ」

「人と人が完全にお互いの考えていることが分かるようになることがあると思う?」

「ありえぬのう」

実は一つだけその例を知ってはいるのだけど。

「でさ、その話は誰が書いたものなの?」

「む、それは……なるほどのう」

さすが、というべきかこの時点で僕の言いたいことは分かったようだ。それでも続けた。

「だから、理解しようだなんて考えなくていいと思うよ。相手の心は想像することでは分からないんだから」

「解った」

と言つて。

「……………」

寝た。

「やる気はないんだな」

もしくは非常に眠かったのか。それは人の心が読めるわけではない僕には解らなかった。

「ちよつと、お前」

昼休み。昼食を食べ終わつた後だった。

何の前触れもなく呼び止められた。

「来い。話したい」

カタリナだった。下級生から呼び止められるのは漆原以外では初めてだ。それもあまり好ましくなさそうなことで。

「いいけど」

「……………」

僕が返事をする黙って校舎を出た。森が見えてきた。校舎裏に回るようだ。

「生意気な下級生。呼び出し。校舎裏とくると」

「普通ならカツアゲだ」

「お、ノリがいいね」

このやりとりには覚えがある。

「だが、今回は立場が逆だ」

立ち止まって向かい合った。

「なぜ分かった。お前はどこまで知っている」

「ふむ」

どうやら後暗いことでもあるのだろうか。だが、僕が彼女を脅してもしょうがない。正直に言うとうしよう。

「勘」

「勘って、お前」

「もしかしたらって思っていたから訊いてみただけだよ」

「そ、そんなことで……………」

割とショックを受けているようだった。

「まあ、そんなに気にしてもしようがないと思うよ」

「私は気にするんだ！」

立ち直った。

「仕方ないだろうこんな能力なんだから！」

「どんなセラなの？」

しまった、という顔をした。

「まあいいさ。とりあえず私が言いたいのは」

「黙っておいてくれ？」

カタリナが頷いた。

「……………条件は」

「何も要らないよ。僕にとっては損も得もないから」

話は終わったのでその場から立ち去った。

いや、校舎を曲がって彼女から僕が見えなくなったであろうと思

える場所から

走り始めた。

そして、トイレに駆け込んだ。

個室に入る。

昼食べた物がせり上がってきた。

酸っぱい味が舌の中を支配する。

しかし。

耐えた。

どうにか、耐えれた。

さて。

授業を受けるとしよう。

5時限目。

「イザ！」

扉が開いて白衣を纏った人が入ってきた。

「げ！」

名を呼ばれたイザが明らかにイヤな顔をする。

「ここだったか。帰るぞ」

「ちよつと、、すみせんが、、」

「学校側の許可は取った」

「なら、、いいですよ、、」

「なぬ！裏切ったなアメリカー！！」

別にアメリカ先生は裏切ったわけではないと思うのだけど。
は学園が我が認めたということには逆らえないものだから。 教師

「セラの研究がまだだ。戻るぞ」

何度聞いたとしてもやはり驚く。

イザの研究がセラに関するものだということは。

どうにか上手くやろう。

「ちょっとすみませんが」

男の腕をつかむ。

少しふらつとしたが、どうにか耐える。

「彼女もここで勉強したいと言っているのですが」

「誰だお前」

「彼女の隣の席にいるものです」

「ふうん。帰るぞ」

無視された。

「イヤじゃ」

「彼女と一緒に帰ったとしても、これからの研究は捗りませんよ」

「若造になにが解る」

「さあ。でも、あなたよりはこれから起こることが解っているつもりです」

「そうかい」

僕の手を離し、イザの腕をつかんだ。

「さ、帰るぞ」

「良いがの。何もせんぞ」

「そうはいかないがな」

ずるずると引きずられ、イザは連行されていった。

次は上手くやろう。

と、そう考えた。

イザのいなくなった教室は、勢いがなくなったのか静かな教室になった。そしてそのまま放課後になった。

「失礼しまーす」

ある扉の前に立ち、ノックを3回。返事も聞かずに扉を開けた。

「……………だれもいない」

のくせして鍵はかかっていたいなかった。どれだけ不用心なのだろう。

とられて困る物もあるはずなのに。

「まったく」

調理台（といっても携帯コンロと本来手を洗うための洗面台が置いてあるところ）に立ち、紅茶を淹れる。

とりあえず自分の物だけ用意した後、机に腰掛けるとレネさんが入ってきた。

「お疲れさまです」

「お疲れさま」

ずいぶんと疲れているようだ。昨日休むと言ったことについて何か関係がありそうな気がする。

「紅茶いります？」

「いただくわ」

残して置いた紅茶を淹れる。

「あなたのほどおいしくはありませんが」

「ありがとうございます」

いつもの勢いというか気力がないように思える。

「今日は業務を休みにしますか？」

「いいえ。それだけはできないわ」

そう答える声にも覇気がない。

「いいえ。休んでください」

「でも」

「休んでください」

「やらないといけな」

「休みなさい」

「……………分かりました」

押し切るように言うとか何とか了承をとれた。

「もう。まったく強引なんだから」

「当然です。……………何があつたのかは知りませんが、明日もその様子ではまた休ませますからね」

「明日は元から休みよ」

「ああ。そういえばそうでした」

僕たちがバイトに行く曜日だった。

「でも、そうね。直せるかどうかかわからないけど、来週までには元に戻しておくわ」

「お願いしますよ」

「ええ。お願いされました」

レネさんが紅茶を飲み干した。

「もう一杯淹れてもらえるかしら？」

「はいはい。分かりました」

「できればもう少し鍛えてほしいけれど、十分おいしいわよ」

「できれば最初に言った言葉をなくしていつてもらいたいですね」

「それは無理よ」

「なぜですか？」

「追い越されたら困るもの」

「そうですか」

もう一度淹れなおした。

「ありがとう」

「誰かにならった方がいいんですかね」

「それなら、私が教えてあげるわよ。どうかしら？」

「レネさんはスパルタそうなのでやめておきます」

「ふふふ。残念ね」

まったくもって残念そうでないその笑みが怖いから止めたんです
けれどね。

「では、レネさん。また来週」

「ええ。また来週」

少なくとも今はいつも通りに見えた。

ただ、おそらくいつも通りに見えるようにふるまっているだけで、
やっぱり無理をしているんじゃないかと思う。

来週会ってもこの様子ならば、少し口を出すことも考えなくては

ならないだろう。

辺りが少し暗くなってきた。ヒカリの出力が時間とともに徐々に落ちていつている証拠だ。真っ暗になるわけではないけれど、どこにもよらずに帰るとしよう。

夕食も食べて、なすべきこともすべて終えて、ベッドに入る。

終わりに考えたことは、

上手くやろう。

後から打算的となんだと罵られることになったとしても。

自分の目的のために。

次は上手くやろう。

そう思って、眠りについた。

6010年7月18日

「おはようございます!」

「おはよう。遅刻魔さん」

「そこまで遅れてないですよ〜」

目の前には校門に立っている先生とそれに捕まっている生徒がいた。

察しの良い方はここまでで気づく、というか誰でも気づくと思うが僕は遅刻した。

「さてと」

「待てい」

「うつ」

捕まっている少女の隣を当然のように通り過ぎようとしたが捕まった。

「クラス出席番号名前」

「21C22番パルミラ・アガスティア」

「初めてか？」

「少なくとも今年はそうだと思います」

「まあ、通つてよし。次回から気をつけろ」

「はい」

ちよつとおとがめを食らったぐらいですんだ。

「何である人はよくて私はだめなんですか〜」

「お前が遅刻常習犯だからだ!!」

「い〜〜〜〜や〜〜〜〜!!!!!!」

騒がしい声をBGMとし、校舎までの道を歩く。すると、目の前に小等部の生徒が紛れ込んでいるのが見えた。

……間違えた。イザだ。

「おはよ、イザ」

「はあ、はあ。おお、パル、か」

「い、息切れしてるけど大丈夫？」

「も、もんだい、ないわい。ちよつと、はしったら、つかれた、だけじゃ」

「問題大ありの回答だよね」

足だってふらふらしてるし。

しょうがない。耐えるか。

「ほら、イザ」

僕は彼女と手をつないだ。

当たり前のことなのだが、僕が他人と手をつなぐということは。

その人の未来が見えるということだ。

誰しも例外でなく、強制的に起こる。

見えることの嫌悪感と、相手に対する申し訳なさ、自分に対する鬱屈とした感情。

それらも、後のためだと思い、押し殺した。

「ど、どうもなのじゃ、パル」

「お礼は言わないでいいよ」

こちらは謝らなければならないというのに。

「パル？お主も大丈夫か？」

「僕？別に体は悪くないし、イザほど体力がないわけでもないからね」

体は悪くない。むしろ問題ない。他の部分は問題だらけだけれども。

「むっ」

「ほら、行つて怒られよう」

「うっ、うむ」

手を握つたまま校舎まで歩く。つまり、その間もずっと彼女の未来に起こり得る光景を見続けるということだ。

現実の世界も見えないといけない。精神が病みそうだ。

しかし、今は自分の目的のため、総てを押し殺してでも足を前に踏み出した。

遅刻連絡をするため職員室に行った。さすがにもう手は放している。

「イザはいつものことだが、お前は珍しいな」

「すいません」

「まあ、いい。おら、とつとと教室に行け。途中だが2人とも問題ないだろ」

「うむ。我もパルもそこまで頭は悪うない」

僕はともかく、イザが授業に付いていけなくなるというのは考えにくいからね。

「分かつているさ。次あつたら指導しないといけないから遅れるなよ」

「はい、努力します」

「では、失礼したぞ」

「失礼しました」

職員室にいた我らが担任に遅刻の旨を伝え、教室に入った。

「皆の衆！おはよう！」

言つたのはイザだ。僕にそんな度胸はない。

「お、おはようございます」

「おはようございます。それじゃ2人とも席について」

「うむ！」

「すみません」

僕たちは席に着いた。時間を見る限り、授業もそんなに進んでないようだ。

「では、続きを。ここでこの人物が思ったことは……」

とりあえず板書すれば授業に追いつけそうだ。隣のお方は板書することもなく、机に突っ伏して寝ているけれども。

「イザ、遅れてきたんだから少しは授業を受ける意思表示とかした方がよいと思うけど」

「でもな、つかれた」

「まあ、イザは咎められないとは思っただけだね」

自分の心構えの問題で、自己満足ではあるのだけど。

「でも、一応ここは勉強する場なんだから」

「とは言つてもものう。我は現代語が苦手だし」

「え？」

「なんでなんで？」

なんとオールパーフェクトは当たり前、ミスしたとしても彼女のケアレスミス程度のイザさんにも苦手な勉強はあったらしい。どうやらこれにはアルクも興味があるらしく、口を挟んできた。

「人物の心情というのかの。我には理解できぬ場合が多いのじゃ」

「ああ〜」

「ほええ。にやるほど」

なんか妙に納得してしまった。

「試験となると試験を作った者がなにを求めているのか分かるからかの、どうにかなるのじゃが……それを話が理解できたとは言わぬじゃろう？」

「確かにそうだね」

「じゃから、我はこの科目が苦手じゃ」

「ふむ」

「イザちゃんでも苦手なものはあるんだねえ」

「あたりまえじゃ。我は人間だから」

頭の中でいろいろと考えてみた。

「イザ」

「ん？なんじゃ」

「人と人が完全にお互いの考えていることが分かるようになることがあると思う？」

「ありえぬのう」

実は一つだけその例を知ってはいるのだけど。

「でさ、その話は誰が書いたものなの？」

「む、それは……………なるほどのう」

「え？え？どういうこと？」

さすが、というべきかイザはこの時点で僕の言いたいことは分かったようだ。アルクが分からなかったようなので説明は続ける。

「話っているのは人が書いたものだよね」

「あ、そっか。結局は人が対象になっちゃうんだ」

「だから、理解しようだなんて考えなくていいと思うよ。相手の心は想像することではしか分からないんだから」

「解った」

と言つて。

「……………」

寝た。

「……………やる気はないんだな」

「眠かったのかもね」

それは人の心が読めるわけではない僕には解らなかった。

しかし、こんな僕は未来を見ることが出来る。

そこから得た情報を整理して――

「ねえ、パル」

「……………」

「パルってば」

「……………アルク。今は授業中だよ」

「そうなんだけどね、イザちゃん起きてたら訊きにくいことだか

「らちよつと」

「それで、なに？」

「ええとね。イザちゃんっていつもこうなの？」

「授業中に寝てること？遅れてきても堂々としてること？」

「両方………かな」

「大体はこんな感じだよ。これから見ていればわかるさ」

「そっか。ふうん」

「遅れてきたのに授業中におしゃべりですか」

「いえいえ、ちゃんと聞いていましたよ」

「そうですか。なら今の続きを」

「はい。その部分は主人公がその人を大切だと思っているからこそ生じた矛盾であり………」

「つらつらと答えてやった。」

「………正解です。パルミラ君が言ったようにここはですね………」

「うん。苦虫を噛み潰したようなその顔は、少しすつとした。」

「ほえええ。私が当てられなくてよかった………」

「今からはまじめに受けなよ」

「は……い」

「小声でやり取り。」

「いや………」

「………どうにか答えれてホントに良かった。なかなか危ないところだった。」

「さて。今は昼休憩。」

「いつもの場所ですいつものように弁当を食べていた。」

「そして、今し方食べ終えたところだ。」

「今から校舎に戻るということは、彼女と鉢合わせてしまうということだ。」

今は今日の5限のためにいろいろと考えたいことがある。
時間を取られるわけにはいかないが、彼女と会わなければ

今後も同じことが起き続けるだろう。

とはいえ、5限の出来事は上手くすれば今後の自分を大きく変えることができるかもしれないことだ。

どっちを取るか。

「仕方ない。考えるでしょう」

寝っころがり、どうにかしてイザを連れて行かない方法を思案する。

少し考えて一つの方法を思いついた。

「これなら……いや、もっと多くのパターンを考えないと」

彼女がしているのはセラの研究だ。そして、今日は研究をあまりしたくなさそうだった。

「……………よし」

同時に鐘が鳴る。昼休憩終了間際の予鈴の鐘だ。

まるで、ゴングの音だなとか考えながら教室に戻った。

5時限目。

「イザ！」

扉が開いて白衣を纏った人が入ってきた。

「げ！」

名を呼ばれたイザが明らかにイヤな顔をする。

「ここだったか。帰るぞ」

「ちよつと……すみませんが……」

「学校側の許可は取った」

「なら……、いいですよ……」

「なぬ！裏切ったなアメリカー！！」

別にアメリカ先生は裏切ったわけではないと思うのだけど。教師は学園が我が認めたということには逆らえないものだから。

「セラの研究がまだだ。戻るぞ」

何度聞いたとしてもやはり驚く。

イザの研究がセラに関するものだということに。

いろいろと考えた。どうにか上手くやろう。

「ちよつとすみませんが」

男の腕をつかむ。

もちろん、僕の手からいろいろな情報が流れ込んできた。

心の底では申し訳なく思うものの、今はそれを押し殺す。

そして、どうにか耐える。

「彼女もここで勉強したいと言っているのですが」

「誰だお前」

さて、なんて答えようかね。

「僕は彼女のクラスメイトですが、あなたこそ誰ですか。唐突に入ってきて不審者以外の何物でもありませんよ」

「見ればわかるだろ。研究者だよ」

「いいえ。偽装でないという証拠を出してください。できれば許可証とやらも」

「ほらよ。これで満足か」

名刺と許可証を無造作に渡してきた。一応目を通す。………まあ、

ぶつちゃけどうでもいいのだが。

要は会話できれば良かった。

「ほら、イザ。帰るぞ」

「いやじゃ。我は帰らぬぞ」

「彼女は休息を必要としています。さつきまでもずっと寝ていました。このままでは効率が落ちるのではないですか？」

「一理あるな。それで？」

意外とすんなりと話を聞いてもらえた。

「このまま研究をさせ続けていたら、倒れるかもしれません。それはあなたにとっても本意ではないでしょう？」

「ふむ」

「だから、今日はせめてこのままでいさせてあげませんか？」

「だが、学校とは勉強するところだ。休むところではない。休ませるのならこちら側にもそれ相応の施設ぐらいはある」

「そうですねその通りです」

「ちょ、ちよつとパル？」

あつさり折れたことに不信感を示した。

「それにイザには学校の勉強なぞ必要ないだろう」

その言葉が向こうから出てくるのがベストだった。

「いえ。必要なですよ」

「ほお。では聞こうか。何が必要だと？」

「今やっている授業です」

「ちよつとすみませんがそこにいる先生。この授業は何の授業なのでしょうか」

「は〜い。常識の授業を担当させてもらっている、アメリカと申しますか〜」

「……………成程。必要なことだ」

「ちよつと待つがいい2人とも！それは我が常識が足りておらぬということか！〜」

「まあ、この時間は起きておくようにしておきますので、そちらに

は少なくとも放課後までは我慢してもらうつといつことぞとぞじょうか」

「ふん。いいだろう」

「無視をするでな〜〜い!!!!」

扉を開けて振り返った。

「お前、名は？」

「パルミラ。パルミラ・アガスティアです」

「カギか。何のカギになるんだろうな、お前は」

「え？」

今の言葉は意味が分からない。カギ？普通に考えれば鍵のことだろうが…………。

「いや、なんでもない。イザ、今日はフリーだ。明日からは出てもらうからそのつもりで」

「ああ。学校には二度と来るでないぞ」

「善処しよう」

そう言つて、出て行つた。

ふう。

上手くいった、かな。

研究所側に憶えてもらつことぐらいは。

まあ。

「助かったぞ。ありがとうパル」

「どういたしまして」

自由な時間を奪われるイザが不憫に思えたからっていうこともあるけどね。

しかし、その不機嫌そうな顔は……………あつ。

「イザ、先ほどのやり取りは必要だったから言っただけで、僕は全然そんなこと思ってもいないからね」

「何を思っていないのじゃ？」

「え、イザに常……………いえ、一般人の言葉は理解できないだろうなとは思ってないということだけど？」

「遠まわしに我に常識がないと言っでな……………い！！！！！！」

完全に拗ねてしまった。今日はもうこれ以上の話を聞いてもらうのは無理だろう。

果たしてこれはプラスになったのだろうか。少し怪しい気もする。

放課後になった。イザの方の顛末が気になるっていうのもあったけど、とりあえずイザが話を聞いてもくれないだろうから置いておく。

「失礼しまーす」

ある扉の前に立ち、ノックを3回。返事も聞かずに扉を開けた。

「……………だれもいない」

のくせして鍵はかかっていた。どれだけ不用心なのだろう。とられて困る物もあるはずなのに。

「まったく」

調理台（といっても携帯コンロと本来手を洗うための洗面台が置いてあるところ）に立ち、紅茶を淹れる。

とりあえず自分の物だけ用意した後、机に腰掛けるとレネさんが入ってきた。

「お疲れさまです」

「お疲れさま」

ずいぶんと疲れているようだ。昨日休むと言ったことについて何か関係がありそうな気がする。

「紅茶いります?」

「いただくわ」

残して置いた紅茶を淹れる。

「あなたのほどおいしくはありませんが」

「ありがとう」

いつもの勢いというか気力がないように思える。

「今日は業務を休みにしますか?」

「いいえ。それだけはできないわ」

そう答える声にも覇気がない。

「いいえ。休んでください」

「でも」

「休んでください」

「やらないといけな——」

「休みなさい」

「……分かりました」

押し切るように言うとか何とか了承をとれた。

「もう。まったく強引なんだから」

「当然です。……何があつたのかは知りませんが、明日もその様子ではまた休ませますからね」

「明日は元から休みよ」

「ああ。そういえばそうでした」

僕たちがバイトに行く曜日だった。

「でも、そうね。持ち直せるかどうかわからないけど、来週までには元に戻しておくわ」

「お願いしますよ」

「ええ。お願いされました」

レネさんが紅茶を飲み干した。

「もう一杯淹れてもらえるかしら?」

「はいはい。分かりました」

「できればもう少し鍛えてほしいけれど、十分おいしいわよ」

「できれば最初に言った言葉をなくしていつてもらいたいですね」

「それは無理よ」

「なぜですか？」

「追い越されたら困るもの」

「そうですか」

もう一度淹れなおした。

「ありがとう」

「誰かに習った方がいいんですかね」

「それなら、私が教えてあげるわよ。どうかしら？」

「レネさんはスパルタそうなのでやめておきます」

「ふふふ。残念ね」

まったくもって残念そうでないその笑みが怖いから止めたんですけれどね。

「では、レネさん。また来週」

「ええ。また来週」

少なくとも今はいつも通りに見えた。

ただ、おそらくいつも通りに見えるようにふるまっているだけで、やっぱり無理をしているんじゃないかと思う。

来週会ってもこの様子ならば、少し口を出すことも考えなくてはならないだろう。

彼女に元の鞘に納まってもらうというのも今更な話だからね。

さて。いつから習慣になったのかはよく分からない。

「今日はどうだったの？」

「まあ、いつもよりはスリルはあったのかな」

夕方。今日も彼女はそこにいた。

「5時限目は面白かったねえ。私は何も言うことができなかったのがほんの少し悔しいけど」

「まあ、言えなくて当然だとは思うよ。なかなかの強面のおっさんだったし」

「そうかな？」

「大体言えたとして、アルクは何を言いたかったのさ」

「イザちゃんを連れていかないでください、かな。小さくて可愛いしい子だもんね」

「いい子かどうかは首を傾げるところだけだね」

まあ、根はいい女の子だとは思っただけだね。

「転校したての私にいろいろと教えてくれたよ？いい子じゃないかな」

「たまたま——いや、半ばあの教師の決定だったけど、アルクの後ろの席になったからじゃないかな」

「そうかな」

「後は、隣の2人がしゃべらないからかな」

「うん。教科書がないときに見せてもらっただけど、会話がないんだよね」

まあ、俺の前の席はヘッドフォン族の男子でとても話しかけづらいし、その反対側は一見シャイな女の子だ。

「2人ともいい奴……ごめん。清音さんはとくにいい人ではなかった」

清音さんは女の子の方だ。

「ええ！？普段喋らないからわかんないけど、とんでもない人なの！？」

「まあ、いずれわかる日が来ると思うけどある方向に極端な子だから」

「う、うん。分かった。何とか驚かないようにするね」

無理だと思うなあ。本性があんなのだとは初対面では考えられないから。

「じゃあ、ええと私の左側の男子……………」

「昴のこと？」

「うん！そう、そういう名前だった。あの人は？」

「あいつは必要以上のことは全く話さないけど、いろんな曲を聞いていて音楽の知識が異常に深いし、自分で音楽を作曲することもしてるみたいだ」

「ほええええ。すごいんだねえ」

「うん。彼はなかなかすごい人だね」

「…が…そう」

「え？なんていったの？」

「ううん！な、何も言っていないよ！」

言ったってことがバレバレな言い訳を使われてもなあ。
まあ、聞いてなかったことにしておこうか。

「そ、それよりも他のクラスメイトさんはどうなの？」

誤魔化しに入るか。別に追求する気はないのだけど。

「そうだね。面白い人が結構多くて、今年は恵まれたなと思ってるよ」

「たとえばたとえば？」

「アルクとか」

「へえ……………私！？」

「うん」

「そんなに褒められても何も出ないよ〜」

頬を染めて赤くしない。褒めてないから。

面白いからこのままにしておくけど。

「へえ。じゃあ、どうやって褒めたら何か出るのかな？」

「え？そ、そういう意味で言ったんじゃないんだけど……………で、でもどうしょ〜」

「アルクは何か褒めてほしいことでもあるの？」

「べ、別に褒められることは何もしてないけど」

「じゃあ、何かしてほしいの？」

「ううん。一つだけ誰かにしてほしいことがないわけじゃないのだよ」

「訊いて、いいのかな」

「……………てほしい」

「ごめん。もう一回言ってくれる？」

「あたま撫でてほしい」

そう言われた瞬間、無意識に彼女の頭に手が伸びていた。

次の瞬間、自分は何をしているのだと思った。

触れる前の瞬間、自分が苦痛を味わうと解っているのに何でこんなことをしたと2秒前の自分を呪った。

そして、多分。

今後僕は。

3秒前の自分に感謝することになるのだろう。

「えへへへへ」

アルクが僕の腕の下でだらしなくにやけている。

何か、彼女に言葉の1つでもかけてやれと考えるのだが、脳味噌は別の事柄に支配されていた。

僕は今も彼女の頭を撫でている。

それだけだ。

そう。何も起こらなかった。

何も起こらなかった、ということつまり

『樹』が。『未来』が見えなかったということだ。

まず、自分を疑った。本当に僕は彼女に触れているのかどうか。

次に、彼女を疑った。本当に目の前にいる女の子には実体があるのかと。

最後に、力を疑った。本当に何も起きていないのかどうかを。

答えは肯。僕は彼女に触れているのに、何も起きていない。

「パル？どうしたの？」

まさか、セラが枯渴したわけではないだろう。そうしたら僕はこ

の場に立つてはいられないだろうから。

「パル？お～～い」

ちゃんと僕の右手で彼女に触れている。手のひらは柔らかな髪の毛の感触が伝わってくる。

つまり――

「こら！パル！」

「うわっ！」

「何度読んでも返事ないから大声で叫んじゃったよ……。どうかしたの？」

「い、いや。何でもないよ」

「何でもある返事だと思うな～。怪しい！」

「え！？そ、そんなこと言われても」

指を指されても困る。

「ほら！何かあったんでしょ！言ってみなさい！」

「え！？……い、いや何もなかったけど」

「ホントに？この年でもう頭の上の方の髪が少ないとか、髪の毛がごわごわしていたとか……あれ？もしも何かあったら私の髪に何か問題があったっていうこと！？」

いや、僕の心情的な問題で何かあったっていう可能性もあると思

うし、実際今回はそうだったんだけど。

「あわわわわ。どうしよどうしよ。いやでもここはいさぎよく自分の不備を認めることで、若いからまだどうにかなるって考えて……でもでも若い時からそんなのだったらとってもとっても問題なわけでー！」

目の前で七面相をやっているアルクを見て、僕は心が落ち着くのを感じた。

「さ、さあパル正直に言っ！私の頭がどうなっているかというところをー！」

「どうもなつてないよ」

「え？ホントに？嘘じゃない？」

「本当のことだよ。ごわごわしてなくて、むしろサラサラで綺麗な髪だったと思うよ」

「ホントに？よかつた……」

へなへなと崩れ落ちた。そんなに心配だったのか。

「髪は女の子の命だっ！言うからかな」

「そうだよ……」

「まあ、地べたに座ってるのもあんまり良くないと思うから、立つて」

手を差し伸べる。

「ありがとー」

彼女が僕の手を掴んだ。

やはり何も起きなかった。

「ふっ」

彼女がスカートをはたく。

「安心しちゃったからお腹すいちゃった。パル、私帰るね」

「ああ。うん。それじゃ、また明日」

「うん！また明日ね〜」

曇りのない笑顔で教室から出て行った。

僕は少しの間、そこから動けなかった。

最後にゴォーン、ゴォーンと鐘が鳴る。気づけばいつもなら家に帰っている時間だった。

生徒に下校を促す放送も入る。

それを聞いて、ようやく僕は教室から足を踏み出せた。

帰り道も夕飯を作っている間も、アルクのことを考えた。

今日何も起こらなかったのは偶然のことか、必然的だったのか。

必然だと思いたい。

もしも偶然だとしたら、また一人ぼっちの砂漠に投げ込まれる気分だ。

今日のことが本当にあったことで、必然的な出来事であったことを何かに願いながら

意識が暗闇に落ちた。

学園での日常 6

6010年7月19日

起きた。

『夢』の中ではない。

今日の夢の中では教室の僕の席の隣とその前には誰もおらず、昼休みにカタリナに呼び出しを食らい、授業が終わった後はバイトに行く、という一部を除けばあまりにも普通の水曜日の光景だった。

で、今は朝である。

「学校に行きたくないな」

現実でカタリナと決着をつけてないため、彼女に捕まるのだ。すでに3回体験した。

同じことしか言わないのはかなり気持ち悪い。まるで人ではない何かを相手にしているようで。

でも、向き合わなければ。そうでないとこんなことが繰り返されるだけの結果を生むことだろう。

「しかたない。行くしかないか」

気分は乗らなくても行かなければならない。
行こう。

『おはよう』

「あれ？今日は生徒会はないですよね」

『何？なかったら話しかけちゃだめってことかしら？』

「いえいえ。久しぶりに感じたので、驚いただけですよ」
レネさんのセラだ。

「あ、おはようございます」

『今更言うかしら』

「言ってなかったの。言わない方が失礼だと思いませんか？」

『まあ、そうね』

「ところで今日は暇なんですか？」

『え！ええ、今日は暇よ。何かあるのかしら？』

「なんだか焦っているかのような早口だ。どうかしたのだろうか。」

「いや、こうして話しかけてくるってことは暇なのかなあと思っただけです」

『……………』

「レネさん？」

『……………』

駄目だ。向こうからの反応がなくなった。

「おかしいな……………。僕が何か言ったかな」

特に心当たりがないので、独り言に見える行為をやめて教室に入
った。

「おっはよー！」

「う、うん。おはよう」

なぜだかすごくテンションの高いアルクだった。

「おおーす」

そして僕の席にはなぜか分からないけどフレンが居座っていた。

「そこ、僕の席だね。退いてくれるかな」

「ええー、い・や・だ」

「退いてくれるかな」

「イヤだね。別にいいじゃないか」

「いやよくないから。僕何の準備もできないから」

「却下」

「ど・い・て・く・れ・る・か・な」

「断固拒否する」

「フレンくん、別に退いてあげてもいいんじゃないかな」

「いいや、アルクさん。男には引けないときがあるんだ」
「別にそんな状況じゃないよねえ!？」

ああ、もう、面倒くさくなってきた。

「仕方ない」

「ほえ?」

「ん?」

「ねえフレンってさ、中等部にいたころ」

「おわああああ!!!」

慌ててフレンが僕の口をふさぎにきた。

「なーに言い出すんだよ!」

「えーと、」

「あーあーあーあー!!!すまん!それ以上言うな!」

席から立ってくれたので、僕が座ることができた。

「それでそれで、中等部のころ何したの?」

「ああ。フレンの奴ね」

「だから言うなああ!!!」

まあ、今だと恥ずかしいことって人生いろいろあるよね。

「はあ、はあ、はあ、はあ、つつつかれた」

「別に運動してないでしょ」

「もういい。もう何も言わないぞ」

「むう」。せつかくだから何してたのか聞きたかったのになあ」

「で、なんでフレンは朝からこの教室に来てるのさ」

もうすぐ予鈴が鳴りそうだけどね。

「ああ。いや、ゴシツ臭いバカ話をするためかな」

「ふうん」

「……………つれない返事だな。ま、いいけど」

「どんな話なの?」

「お、アルクさんも興味あるか」

「さつさと話さないと時間ないよ」
「おお。ほんとだ。ええつとな、あの森についての噂なんだが」
「またか」
「私もいろいろと聞いてるけど、ほんとに多いよね」
「あそこに住んでる人がいるらしい」
「へえ」
「い、今までのよりすぶらったーじゃなかった」
「反応薄いな！」
「だって、ふうんとしか思わなかったから」
「ええい、続きだ。でだなそこに住んでいる人が森の中の湖を守っているらしい」
「……………」
「湖があるって言うのは聞いたことあるけどほんとにあるのかな」
「で、湖じゃなくてその人が願いを叶えてくれるとか何とか」
「ほえええ」
「というわけだ」
「HRを告げる鐘が鳴った。」
「おっと、んじゃあな」
「フレンが出ていった。」
「特になし。以上」
「先生が一瞬だけ現れて消えた。」
「最初はびっくりしたけどもう慣れちゃったなあ」
「……………」
「おゝい、パルゝゝ」
「……………」
「HR終わったよゝゝゝ」
「……………」
「はんのうがない。ただのパルミラのようだ」
「はっ」
「あ、元に戻った」

「あれ、ええと。今は何の時間？」

「HRが終わったところだよ。次の授業の準備しなきゃ」

「うん。そうだね」

口ではそう言っているのだが、頭の中では別のことを考えていた。

2限。地理の授業。背がかなり高い、割とイケメンな先生、神崎先生の授業である。

「私、この授業好き」

「なんでまた」

「知らないところを知れるような気がするから」

「それって他の授業にも言えることじゃないの？」

「うん。そうなんだけど、なんて言えばいいのかな……………」

「向こう側を旅できる？」

「そう、それ！」

「でも、地理を知っただけで旅できるとは言えないと思うけど」

「ま、まあそうだけでもさ。何となくそう感じるんだよ」

「ふうん。そんなものかなあ」

「いつか行ってみたいなあ……………」

アルクが見ているのは東大陸の写真が写っている資料集だった。

「アルクがこの授業好きなのは資料集があるから何じゃ……………」

「……………そうかも」

「あまり授業では使わないと思うよ」

「そ、そんなあ……………。前は使っていたのに」

「たまに使っぐらいだから」

「うう……………」

「そんなに見たいなら授業中見てればいいと思うよ。夢中になって先生に当てられたことも気づかないくらいに」

「いいよ！じゃあ、休憩時間中に見るから！」

休憩時間中に資料集を眺める、でも、本人は勉強をしていない…

……。なかなかシユールな絵面だ。

「まあ、僕としてはもうちょっと実のある休憩時間を過ごすべきだ
と思うよ」

「でも私、休憩時間に特にやることないもん。みんなとお話するぐ
らいだよ」

「そっちの方がよっぽど実のある休憩時間の過ごし方だと思うよ」
「そっか」。じゃあ、そうするよ」

ガラツ。地理の先生が入ってきた。

「おっと」

「わわわ」

「遅れてスマンなあ。授業始めるぞ」

「起立」

一斉に立つ。

「礼」

授業が始まった。

昼休憩になった。いつものところへ行き昼食を食べる。

その後で、守人の話が気になっていたので森の奥へ行ってみた。

一回行ったのでだいたいの行き方は分かる。少し森の奥に入ると、
すぐに見つかった。

「綺麗だ」

以前はアオイと名乗った少女が湖にはいたが、今日はいない。湖
ではなくあちらが目的であったのだが。

「仕方ない。帰るか」

と振り返って帰ろうとしたときだった。

「ちょっと待ちなよ」

突然、誰もいないはずの後ろから声がかかった。

「誰ですか？」

振り返ったけれど、誰もいなかった。

「訳あって姿は見せれないのだよ、すまないねえ」

「へえ。それじゃ」

きびすを返す。

「ちよ、ちよつとちよつと」

「姿も見せずに話そうとする人は嫌いだ」

「ま、まーまーそう言わずに」

「じゃあ」

森に帰ることにした。

あれ、おかしいな。足が勝手に湖の方に

「え、うわ！うわわわわ！！」

「ちよつと話を聞いていつてよ。きつと悪い話じゃないから」

「この足が操られている状態でそんなこと言われても信用できないよ」

「それもそうだね。じゃあ、話を聞いていつてくれる」

「仕方ないからそうするよ」

お、元に戻った。

「それで、あなたはいったい誰なんですか」

「よくぞ訊いてくれた！我は湖の守人と呼ばれている者だ！」

「ふうん」

「え、リアクションそれだけ？」

「うん」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………帰っていい？」

「……………い、いやいや。話はここからが本題なのだよ」

「じゃあ、さっさとしてほしい」

「こ、こほん」

わざとらしい咳払いを一つ。そして

「ええとだねえ、君の望みを叶えるべきかどうかを考えたんだけど、どうでしょうか？」

「……………」

あまりにも唐突な言葉だった。今までに無理だと思いながらも夢見ていた未来^{こゝろ}。

「本当……………なのか？」

「ウソ言ってどうするのさ。本当のことだよ」
信じられることではない。

「……………対価は」

「そのセラそのものだからねえ。そんなものないよ」
「もしも本当に出来るのなら破格の条件だ。」

「ただねえ」

やはりなにかあるか。当たり前のことであるけれど。

「君が今、本当にその望みを叶えたいと考えているのかい？」

「当たり前だろ！」

「どれだけ今までこの力がなかったらと思ったことか！
だってこの能力がなかったら」

もしかしたら、俺の両親は死なずに済んだかもしれないのに！！

「ふざけるなよ！どういうことだ！」

目の前に本人がいないのが憎い。食って掛かりたい。掴んで投げ飛ばしたい。

「そのままの意味だよ。本当に君はその力が要らないのかい？」

「要らないに決まってるだろ！こんなセ^モラ！」

「でも、君は今までその力を使ってやってきたことがあるだろう？」

「そこだけは事実だ。もしもこれがなかったらなし得ることなど出来なかったこともある。」

「これからも君のその力が必要になることがあるかもしれない。それでも君はこの力が嫌いだからという理由でこれを手放すかい？」

「っ！ー！！」

確かに僕はこの力が嫌いだ、大っ嫌いだ。でも、迷ってしまった。本当に『今』手放してもいいのか。

「迷えるようになったか。うん。成長したね」

「え？」

「とはいえ、答えはここで出してもらおうよ。どうする？」

「僕は……」

駄目だ。あの程度の言葉で迷ってしまう。もしも、『今』僕がこの力をなくしたとしたら、アルクが何で僕の実力が効かないのなんて絶対に分からなくなってしまうだろう。

僕があの子に興味を持つきっかけになったこともなくなってしまう。

「僕は……」

「ん。分かった」

「え？」

「これから君は大変な目にあうだろう。もしかしたらここでの出来事を後悔したりするかもしれない」

「……………」

「それでも今ここで迷ったことを忘れないで。要らなくはないかもしれないと思ったことを覚えておいてね」

「どういう」

「それじゃあ、もう二度と会うことはないと思うけど頑張ってね」

アガステイア バルミラ
預言者の力ギ

そう言っつて、声は消えた。

「……………」

戻ろう。ここには二度と用はない。

「ちょっと、お前」

何の前触れもなく呼び止められた。

「来い。話したい」

カタリナだった。下級生から呼び止められるのは漆原以外では初めてだ。それもあまり好ましくなさそうなことで。

「いいけど」

「……………」

僕が返事をする黙って校舎を出た。森が見えてきた。校舎裏に回るようだ。

しかし、反吐が出るな。

似てるなんて物じゃない。同じなのだ。彼女のしゃべり方、その拳動、総てが。

最悪だ。なんでこうも繰り返し繰り返し見なければならぬのか。敵意に似たものをぶつけられなければならないのか。今回で終わらせなければ。

「生意気な下級生。呼び出し。校舎裏。カツアゲ？」

「違う」

「じゃあ、告白？」

「そんな訳があるか！」

立ち止まって向かい合った。

「なぜ分かった。お前はどこまで知っている」

「何のこと？」

「しらばつくれるな！」

顔の横を拳が通る。まったく反応がでなかった。

「言え。なぜ私がセラ持ちだとわかった。なぜ9・11による人間だとわかった！」

どうやら後暗いことでもあるのだろうか。この状況でウソを言ったら殺されそうな勢いだ。正直に言おうとしよう。

「勘」

「勘って、お前」

「もしかしたらって思っていたから訊いてみただけだよ」

「そ、そんなことで……………」

割とシヨックを受けているようだった。膝をついている。

「まあ、そんなに気にしてもしょうがないと思うよ」

「私は気にするんだ！」

立ち直った。

「仕方ないだろうこんな能力なんだから！」

「どんなセラなの？」

しまった、という顔をした。

「まあいいさ。とりあえず私が言いたいのは」

「黙っておいてくれ？」

カタリナが頷いた。

「……………条件は」

「そうだね。君が僕に近づこうとしなければいいんじゃないかな？」
言いたいことは言った。もう繰り返しなんか見たくない。

先ほどの出来事を後悔する前に戻ろう。授業が始まる。

そつえば、気分は悪くなったが吐くほどではなかった。ほんの少し対応を変えれたからかな。

放課後。本来ならバイトに行かなければならないのだが、今日は少し学校に残りたかったので、漆原にその旨を伝えるために1年の教室に行った。

「……………」

隣をカタリナが通り過ぎた。互いに目も合わせない。

1. Cの表示が見えた。扉を開ける。

「うるはー。いる？」

「あ、はい。あれ！先輩じゃないですか！」

僕のいるのがそんなに珍しいか。確かに普通は来ないけどね。

「バイトに行くなら少し待ってください。泪の方が今日は掃除当番なので」

「ああ。それが、すまないけど今日休んで良い？」

「え！な、何かあるんですか？」

「ちよつと、今日は用事があるんだ」

「はあ。ちよつと待ってくださいね」

「やっぱりだめだろうか。」

「あ、いいですよ。泪が今日は頑張るそうです」

「すまない。埋め合わせはちゃんとするから」

「じゃあ、明日出れますか？午前か午後のどちらでもいいので」

「ん。分かった。明日の午後に出るよ。それでいいかい？」

「ええ。お願いします。お父さんは『説得』しておきますので安心してください」

説得というところに妙に力が入ってた気がする。

「わ、分かった。それじゃ、また明日」

「ふふふ。ええ。また明日です」

明日が少し怖い。何が怖いのかもわからないけど、とにかく怖い。まあいいや。今は別のことを考えておこう。

ヒカリの弱まっている教室に行った。

「あれ？水曜日はバイトじゃないの？」

「今日は休んだ」

「え？そんなことしてもいいの？」

「他のところはどうか知らないけど僕のところは頼んだらOK貰えたから」

「ああ。良かったんだ。ほえ」

なんでバイト休んだかは聞かないんですね。理由言えないからその方がありがたいけど。

「それで、今日は何か楽しいことあった？」

特に僕がいなくても教室に残っていたアルクが、いつものようにいつもと同じ質問をしてきた。

「今日は面白いというよりか、そうだね……」

というわけで、湖の噂がホントっぽいことを守り人に言われたこと以外を伝えると、彼女がすごい興味を持ったみたいだ。

「それでそれで？」

「え、別に何も願わなかったよ。胡散臭かったしね」

「ふうん。本当にいたんだねえ。行ってみようかなあ」

「多分、期待が裏切られるだけだから止めておいたら？」

「そうかなあ」。湖がキレイだって言うんなら一回ぐらい見てみたいなあ、って思ったんだけど」

「うーん。確かに湖はきれいなんだけどね」

「一回ぐらい見に行こうよ」

「いや、一人で行きなよ」

「ええ……。つまんないじゃない」

「でも、僕は2度と行かないことに決めてるから」

さすがにあんなに腹立つことを言われたからね。

「うう」。それじゃあ行きたくても行けない」

「なんでさ」

「だってだってあんな森、一回入ったら出られないよ〜」
なぜに実際に入ったわけでもないのに涙目になる。

「大丈夫だって。僕は何回か入って、出てこれているから」

「それはきつとパルだからどうにかなっただけだよ。私には無理だよ」

だからなぜに泣く。

「まあ、じゃあ行くことは諦めるということだ」

「うう〜仕方ないか」

すぐに直って今度はむくれ始めた。

「むう、なんで一緒に行ってくれないかなあ」

「自分が行けないからって僕に当たらないでよ」

「む、パルがなんだか意地悪だ」

「意地悪してるわけじゃないんだけどね。ただ単に僕の個人的な理由で行きたくないだけだから」

「で、その個人的な理由って何？」

「しまった。もしかしなくとも墓穴掘ったか。」

「ええとさ。僕もアルクに訊きたいことがあったんだけど」

「あ！誤魔化すな！」

ええい。横槍なんか気にしないぞ。

「なんで今日もアルクは教室にいたの？」

僕が今日来ることはないとかわかっていと思うんだけど。

「……………」

「え？アルク？」

まさか、地雷踏んだか？

「そーいえば、なんでだろうね」

他人事みたいな口調。窓に目を向けた彼女の顔は、僕の位置からは分からなかった。

「それじゃ、帰るね。バイバイ」

「あ、ああ。また来週」

少し経った後、彼女は帰った。

「いつも教室に残っている理由、か」

僕も彼女に次いで帰る支度をしたけど、どうしてもものろのろとした動きになったのは、彼女に追いつきたくはなかったからなのだろうか。

「そういえば、今日は接触の機会がなかったな」

ただの自分の不調なら、今日は見ることになり、もしも不調でないのだとしたら、彼女に原因があると考えてもいいだろう。

「この能力を消すことができる、ねえ。うさんくさいけれど……」
それでもやはりこれからあそこで行った選択を悔やみそうだ。

でも。

残してしまったのだから。

今までと同じ様に。

「向き合っていくしかない」

教室を出た。

明日の自分がどうなることか、明日の僕は知っているだろう。

でも、明後日の自分は、きっと明後日の自分がどうなるかなんて分からないだろう。

今はそれを糧として進んでいこう。

とにもかくにも、今の自分が迷うことに、悔やむことになってしまった原因は、彼女アルクにあるのだから。

休日の一日 2

6010年7月20日

起床。午前6時。ずいぶん早い時間帯に起きてしまった。今日は学校がないけど、バイトには行かないといけない。

「え？」

自分の脳味噌を整理していて

「最悪だ………」

思わず頭を抱えたくなった。

今日はとても面倒な一日になるらしい。

「行きたくないなあ」

とは言うものの足は商店街の方に向かわざるを得ない。昨日バイトに出ていない報いだ。仕方ない。

まあ。

もつとも。

今から行くのはバイトじゃないんだけど。

でも、未来を知っているから行かない、という理由ではもしも未来が変わったときに、とても面倒なことになる。だからこそ行かないという選択肢が消える。

結局。

「はあ」

行くしかないのだ。

大体なにが起こるか分かっていたとしても。

「せんぱーい」

「来てくれたんですね」

店の前には漆原が立っていた。

「来ないわけにもいかないでしょ。昨日バイトさぼっちゃったんだから」

「それじゃ先輩」

「え？」

腕を両脇から組まれた。

「行きましょう！」

「え？ちよ、ちよっと！？」

どこか別のところに連行される。

「ちよっと待つてよ！今日僕はバイトをするために来たんだよ！？」

「ああ。それでしたら」

「昨日、父を説得したので」

「お父さんも仕方ないと言っていたので」

「問題ありませんよ」

「問題あるでしょ！」

「「ええ〜」」

「ええ〜、じゃない！今日は手伝わなくていいの？」

「休日は手伝わていないので。いつも通りです」

「とりあえず今バイトに行っても先輩はすることがなくなりました。暇ですよ？」

「それはそうだけど……」

「というわけで、一緒に買い物ですよ」

「今日は私たちも暇なのでお願いします！」

「はあ。やつぱりこうなったか。まあいいや。たまには後輩に付き合うのもいいだろう。」

「いいよ。行こうか」

「「やった〜！！！」」

「行きたいところとかあるの？」

「先輩こつちです！」

「ちよっと買いたい物がありました」

「荷物持てるでしょう。全く」

「まあ、そう言わずに」

「ほら、行きましょう」

「はいはい」

まあ、ここまでならいいんだけどね。

本当に面倒くさくなるのはこれからなんだよ。

「えっと、次はですね」

都市の中心部にある通りの西通り。図書館やカフェがあったりするここは店も多い。中には5階建てで、その中にいろんな店が入っている場所もある。

「あら。あなた達。奇遇ね」

「か、会長！」

「ど、どうしてここに！」

「まるでここにいてはいけないみたいな口振りね」

「い、いえ！そういうわけではないんですが」

「な、何の用があったのかなあと思っただけです」

「ふうん。そう」

「レネさんもこんなところに来るんですね」

「あなたもよ。こんなところで会うなんて思ってもなかったわよ」

『で、なんで漆原と一緒になのかしら』

「え？」

「どうかしましたか？」

「い、いや。どうもしない」

『理由を教えてもらえるのかしら？』

頭の中に響く声。レネさんのもののようにだ。

何で目の前にいるのにと思いいレネさんを見ると、ものすごく良い笑顔で笑っておられた。……怖い。

『バイトに行ったんですよ。そしたら』

こちらでも小声で返す。

「一緒に着いていつてもいいかしら。一人で回るにしても飽きてきたところだから」

「まあ、いいですけど」

「いきなり予定が狂っちゃったね」

『そしたら?』

「何か言ったかしら?」

「いえいえ。何も言っていないですよ」

「あら、私はうるはに言ったのになんで涙が返すのかしら」

「え!？」

「今度はうるはね。2人して何企んだのかしら」

『バイトはしなくていいから買物に付き合ってくれって』

漆原はレネさんに気を取られてる。だから小声で話せるのだけど、
「というかレネさん。いくら能力を使っているとはいえ、良く2人と会話ができますよね。」

「へえ。なるほど」

「か、会長?何がなるほどなんですか」

会長が漆原に何か言ったのだろう。

「!」

ものすごく動揺している顔になった。

「ごめんなさいね。邪魔することになっちゃって」

ん?邪魔?

「邪魔ってどういうことです?」

「せ、先輩は気にしなくて良いです!」

「そうです!何でもありませんから!」

レネさんに言ったのにどうしてか漆原から返事が返ってきた。どうしてだろう。

「それじゃ、行きましょうか」

そしてレネさんはとても楽しそうな顔をしていた。

「ふう。これ持っていてもらえる？」

本屋の袋を渡された。

「分かりました、って重い！何冊買ったんですか！」

「男の子でしょう。頑張りなさい」

「まあ、持ちますけど」

言われては仕方ない。持つしかないだろう。

「仕方ないとは思っているんだけど」

「まだ機会はあるから。頑張ろう」

「ええ。そうね」

漆原が変なことを言っていた。そんな時だった。

「あれ？パル？」

「お、アルクにイザ。珍しいね」

「おお、ほんとじゃ。パルじゃ。奇遇じゃのう」

なんとアルクとイザがいた。

「どうしたのさ。アルクとイザが一緒って」

「こっちも偶然会ったんだよ」

「我も驚いたぞ。たまたま入ったらアルクが居るとはのう」

「へえ。そういうこともあるか」

こっちもレネさんに会ったからね。

「で、この子達誰なの？」

レネさんがなぜか怒っているかのような口調。何故に？

「ええと、クラスメイトのアルカンシエルとイザです。こっちはレ

ネ生徒会長と漆原な」

「ほお、せいとかいちよーは始めて見たぞ」

「私もこんなちっちゃい子は始めて見たわ。よろしくね」

「我はちつくくなんてないぞ！ううう、その手を離せ！」

レネさんがイザの頭をなでている一方で。

「パル君の後輩なのかな。よろしくね！」

「まあ、よろしく願います」

「で、早速聞きたいのだけど君たちは双子かな？」

「ええ。そうですよ」

「ほえ〜。初めて見たよ。生まれた時から一緒ってなんかいいね」

「そうですかね？本人としてはあんまり良いものではないですよ」

「あつ、その言い方はヒドイ！……勉強とか見てあげてたのはどこの誰でしたっけ？」

「うつ！……うるはさんです。はい」

「仲もいいんだね〜。うらやましいなあ。私は一人っ子だったから」

結構盛り上がっているようであり、自分に親しい人が仲良くしているという光景はなぜかホッとできるものだ。

「で、なんで私はこんなところにいるの」

「私初めてだよ」

「我もじゃ。しかし、うるさいのう」

「僕達はたまに来ることはありますが」

「私は見てるだけのことが多いけどね」

「みんな暇なんだからいいんじゃないかな」

ということで、何故だかゲームコーナーの一角に6人が居ることになった。

「ま、せっかく来たんだし楽しまないとね」

「あ、もぐら叩きがある！懐かしい〜」

「え、なんでそのチョイスなの！？」

漆原が勝手にモグラ叩きの方へと向かっていった。

「私たちも何かしましょうか、ねえ？」

「おぬしには負けぬぞ！」

レネさんとイザも連れだって行く。……あまりかわらない方がよさそうな雰囲気醸し出しているようだ。

「アルクはどうす——あれ？」

いつの間にかアルクは消えていた。

「……………探してみるか」

迷子になったりしたら面倒だしね。

アルクはすぐに見つかった。

「よし！あと、もうちょっと……………あー！」

ゲームコーナーの方に居たのでほっとした。しかし、何をやって
いるのかと思えば。

「クレイゲーム？何かとりたいの？」

「あ、パル。うん。あれ」

アルクの指差す先には……………

「ちよつと。何これ」

「え？どさゑもんだよ。もしかしてパルは知らないの？」
そんな。こんなものが常識だなんて思いたくないよ。

「なんで、この人形手と足がだらんとしてるの。無表情だし」

「可愛いよね！」

「ちよつと待てい！——！」

いやいやいやいや。こんな不気味な人形が可愛いわけないでしょ
うが。どうやったらこんな水死体のようなものが可愛いと思えるの
だろう。

「というわけだよ。パルにもあげないよ」

「いやいや！僕はいらないから——！」

例えプレゼントとして贈られたとしても捨てる自信があるよ。

「そなの？」

「うん。僕は取ろうとか思わないから」

「なら、私が頑張つて取るね」

「うん。そうしてくれたら店の人も喜ぶだろうから」

多分そんな人形誰も取ろうとか思わないだろうからね。

「うう……。とうりやあー！」

アルクが取るわけじゃないんだから別に掛け声はいらないよね、
とは僕は突っ込めなかった。

「うう……。また駄目だったよ……。」

半泣き状態になりながら100ナヴィ硬化を投入。またクレーン
が動き始める。

「そこおー！」

狙いはいいのだけどちょっと逸れていたのだろう。

「よしっ！あ、ああ……。！！」

クレーンがちょっとつかんだと思ったが、すぐに落ちてしまった。
「店員さんに位置を変えてもらうのは？」

「だめっ！これは私の戦いの……！」

彼女は誰と戦ってるのだろう。クレーンなのか、人形なのか、は
たまたはこのゲームコーナーのオーナーなのか。

「うう……。いいところまでは行くのに……」

実際惜しいのだけど、見ていると少しタイミングが遅いのだ。

「むむむ……」

ふむ。

「わっ！」

「のわあぎゃあ……。！！」

僕が驚かしたことによってアルクがボタンを押すことになった。
というか彼女の驚き方には僕の方が驚く羽目になったけど。

「もう！これでまた駄目だったらパルのせいだよっ！！」

「まあ、そうなるよねえ」

でもクレーンは順調に人形をつかみ

「おお……。！……！……！……！……！……！」

「人形は熊や魚じゃないんだけどね」

「獲った……。」

「まあ、それでいいのならいいけどさ」

あと、そんな見てくれの悪い人形を掴んで持ち上げてるのってど

うなんだろう。

「よしっ！！次はこれを獲るぞ！！！！」

「なんでそんな呪われそうな人形ばかり選ぶかなあ」

「可愛いよねっ！！」

「ええ！！！！？」

とりあえず、今日分かったことは彼女の人形選びのセンスはどうかと思うぐらいひどいということだ。

「ふい〜〜。楽しかったあ〜〜」

「そりゃあ、あれだけ遊べば楽しかったでしょうねえ！こっちは着いていくのに疲れたよ……………」

「ふふふ。あなたにもお疲れ様、と言った方がいいのかしら」

「ええい！敗者に慰めをかけるでないわ！！」

なぜだかとても分かり易い。ゲームコーナーで何があったのか。

「えへへへ〜〜」

アルクは戦利品を紙袋に持ってずっとこんな調子。きっと、昨日のことも頭にはないだろう。

「それでは、また明日。今日は楽しかったわ」

「次こそリベンジしてやるからの。顔洗って待っておれよ！」

「はいはい」

「それでは、レネさん。また明日」

「ええ。明日はちよつと働いてもらうからちゃんと顔を出すようにしてね」

「また明日です、会長」

「ええ」

レネさんは大通りの中心の方に行くので、僕たちとは方向が違つ。よつて、この建物の前で別れることになった。

「あれが、会長さんなんだよね。なんだかっこいい人だったねえ」

「かつこいい、ねえ」

少し話しているとそんな印象は消えると思うけど。

「いや、アルクよ。騙されてはいかんぞ。あやつはそんなやつではないわ。もっと恐ろしい。あの悪魔のよーな……………」

「「イザ先輩！！それ以上は言わない方が……………」」

「うつ！！！」

イザも悪寒を感じたようだ。

「ごほん。我も帰る」

「あれ？イザちゃんのおうちって私の家の近くじゃなかったの？」

「確かにそうなのじゃが、今日は研究所に泊まる予定じゃからの。」

おそらくじゃが、明日は学校に出れまい」

「えっ！それは問題なんじゃ……………」

「いや。イザ、気をつけなよ」

「大丈夫じゃ。ここから研究所はそれなりに近いしのう」

では、またの。そう言い残して、イザはレネさんの行った方向とは反対側に歩いて行った。

「問題ないってどういうことですか」

「一つ上の学年にとんでもない天才がいるって話聞いたことあるかい？」

「ああ。その話なら、ってあの先輩が！？」

「うん。どんな噂が流れているか分からないけど、おそらくその噂はイザについてのものだろうね」

「イザちゃんってそんなにすごいの？」

「うん。って、アルク。君はクラスメイトでしょ」

「だって、イザちゃんが頭がいい子だっていうのは分かるんだけど、でも自分ではそんなこと言ってくれなかったし」

「まあ、普通なら言わないとは思っけど」

「そんなものかなあ」

「それにしても驚きました。そんな風な人には全然思えなかったの
で」

「人は見かけによらない、ってことですかね」

「さあ？どうなんだろうね」

「？」

「先輩？」

なぜか、漆原がいぶかしげな反応をした。

「それじゃ、僕たちも帰ろう」

「え、ええ」

「アルクも同じ方向？」

「うん。私の家、学校の近くだから」

「それじゃ行こうか」

「はい」

ヒカリのまぶしい方に進む。目が悪くなるかもしれない。

「では、私たちはここで失礼します」

「へえ〜。本屋さんだったんだねえ。今度寄らせてもらうね」

「はい。いつでも歓迎します」

「アルクって何か本読むの？」

「あ、ひどいなー。もしかして私が何も読まないおバカな子だって思ってたの？」

「いや、思っていないけど、少し意外だったのは事実かな」

「ぶう」

「あ、ちよつと、アルク！」

頬をふくらましたままアルクが歩いて行ってしまった。

「じゃあ、また明日な！」

「「では、また明日」」

「ああ！」

急いでアルクの後を追った。

「そこまで怒ることじゃないじゃないか。意外だっただけで他意はないよ」

「むう」

「いや、聞いた時に思ってもみなかったと言うか」

「……さつきからパルは私を慰めたいの？ 貶めたいの？」

「あれ。もしかして僕墓穴掘ってた？」

「うん」

おかしいな。そのまんまのことを言ってるのだけど。

「ともかく、パルの言葉によって私はふかく傷つきました」

「はい」

口調からしたらそんなに傷ついているように聞こえないけど。

「責任を取ってください」

「まあ、僕にできる範囲のことならいいけど」

「では……うーん」

「アルク？」

「何してもらお」

「考えてなかったんだ」

とてもアルクらしいけど。

「うーん。ええとこういう時は……貸し1つ？ で合ってるのかな」

「貸し1つ、ね。絶対に何か違うと思うけど、分かったよ」

本を読むアルクより、貸しという言葉を使うアルクの方がよっぽど想像できなかったけどね。

「よーし、じゃあ決定！ パルに貸し1つ」

「いつ返せばいいのやら」

「それじゃあ、いつか返してね。いつでもいいよ」

「分かった」

「それじゃあね。私の家ここだから」

「ああ。そうなんだ」

この都市では普通のレンガ造りの一軒家。商店街から少し離れた

ところにある建物だった。

「今日は楽しかったよ！また明日ね！」

「僕も楽しかった。また明日」

そう言葉を返すと、アルクは笑顔で門をくぐり家の中に入っていた。

「僕も帰るか」

一人。ほんの少し暗くなった明るい世界を歩いた。確かに、大変な一日だったけど、楽しかったなと。

休日的一天 2 (後書き)

HPはじめました。よろしければそちらも見ていただけると幸いです。

すとりーの住処 <http://www.geocities.jp/leonhardt0724/>

インターラード（前書き）

アルクのバルミラへの呼び方をバルくんに変えました。
その方がそれっぽいきがしましたので。

インターロード

「ただいま〜」

玄関の戸を開けて、家の中に入る。

外よりは少し涼しい。

「おかえりなさい。もう少ししたら夕御飯だからね〜」

「分かった〜」

この口調は遺伝なのかな。

…………… そうならいいな。

「おう、お帰り」

「お父さん！今日はいたんだ」

いつもはいないお父さんが帰ってきていた。驚きだ。

「おつかさーん！アルクが反抗期だ！！」

と思ったらお父さん、いきなり叫びだした。はんこうき？

「はんこーきって何？」

「なにになに？なんて言われたの？」

「アルクが『お父さん、いたんだ』って。まるで俺がいない方がいみたいない言い方じゃないか！！！」

「お母さん、はんこうきって何？」

「よしよし。あの子はそんな風に思っていますから」

「本当か？本当にそうなのか？」

「お父さん！ハンコウキって何なんだよお！」

「うおおお！！アルクが俺に怒っているううう！！許せアルク！！！！こんなお父さんでごめんなさい！！！！！！」

「お父さん近所迷惑ですよ。もうちょっと静かにしましょうね」

「ちつくしよおお！！！」

「あ、お父さん！」

お父さんが自分の部屋にこもっちゃった。

「あらあら。しょうがないわね。アルクご飯ができたら呼ぶからそ

れまで自分の部屋でゆっくりしてなさいな」

「は〜い」

私は2階へあがって、自分の部屋の扉を開けた。

「ふう」

後ろ手で扉を閉める。鞆を置いてベッドに横になった。

「楽しかったな」

今日は楽しかった。学校に行くことになってからはいつも楽しい。

「パルくん」

私の左後ろに座っている男の子。こっちにきて初めてお友達になった男の子。

「うん。楽しかった」

学校にいたくて夕方まで残っていたら、話しかけてくれた。

「……………」

そういえば、彼には頭を撫でてもらったこともあった。

「えへへへへ」

あのときのことをおもいだすとなぜだか顔がにやけてくる。

「ご飯よ〜」

「は〜〜〜い」

いけないいけない。こんな顔で下に行ったらお父さんにからかわれちゃう。

しっかりしないと。

「あれ、お父さんは？」

「それがねえ……………」

「そ、それが……………」

「部屋にこもって出てこないの」

「……………しょうがないなあ」

「お願いね」

「は〜い」

いつものように私はお父さんの部屋から少し離れて立った。

「おとうさん、ご飯だよ」

「は～～い」

少し離れてるのは扉を勢いよく開けて出て来るから痛い目に遭わないためだ。何回もぶつけられた。

「アルク、もう怒ってないのか？」

「最初からなにも怒ってないよ。ほら、早くご飯食べよ」

「魔法使い様感謝しますっ！！！」

「祈ってないで早くきなさい」

「は～～い」

私は魔法使い様に祈ってもないし、信じてもないけど、ご飯は食べたいから返事をした。

「いただきます」

「いただきます」

いつもは一つの返事だけど今日は2つの返事。

「うむ。久々に母さんの料理を食べると旨いなあ」

「あらあら。それはいつも食べてるとおいしくなさそうってことかしら？」

「断じて、断じてそんなことはないっ！！」

「あらあらあら。本当かしら？」

「本当だ、母さん！この瞳を見ても疑うことができ」

「出来るわね」

「ぐはっ！！」

「お父さん。お母さんの料理はいつでも美味しいよ？」

「そうよねえ。いつも食べていないお父さんには分からないかもしれないけどねえ」

「いや、いつもは食べれないからこそ食べれると美味しいということだったのだが」

「あらあらあら。そうだったんですか。じゃあ、もっとたくさん食べれますよね？」

「一時間ぐらいしたら降りてくるね」

「うおーーーーーい!!」

1時間ぐらい宿題していよつと。

私は自分の部屋のある2階に上がっていった。

大体1時間ぐらい経った後、私は下の階のリビングに降りた。そこにはソファで横になっているお父さんがいた。

「もう、もうだめじゃ〜」

「お父さん、お腹大きいね。太った?」

「もしかしたら太ったかもしれん……………」

「ええと、この歳でいっぱい太っちゃうとなんて言うんだっけ」

「はっ!言うな、言うんじゃないアルク」

「えーと、確か、メタボリック?」

「正確にはメタボリックシンドロームよね」

「あ、お母さん」

洗い物をしていたお母さんが戻ってきた。

「俺はそこまで太ってない、太ってないぞぉ〜!!」

「まあ、現実から目を背けたくなるのは分かりますけど」

「か、母さん!?なにを言い出すんだね!」

「夢を追うのも結構ですけど、現実生きてくださいね」

「げ、現実生きてらい!ふ、太ってなんかないもんね!」

「お父さん、大丈夫だよ。お父さん太ってないもん。お母さんもそう思うでしょ?」

「ほ、本当か!」

「それでも、歳のことを考えるともうちょっと気をつけて欲しいところではあるわね。あれだけ食べたのだし」

「母さんが食べさせたんだと思うけど、分かりました」

お父さんが起き上がった。

「それで、アルク。今日は楽しいことあったか?」

「うん。ええとね、今日は」

お父さんがいるときはいつも私にしてくる質問。今日学校であったことをいろいろと話した。

「それでね、パルくんがね」

「母さん、母さん。アルクがさつきからそのパルとやらについてよく言っているが何者かね？」

「アルクに優しくしてくれているお友達のようにですよ。何でも学校で初めてお友達になってくれたとかで」

「そういうことじゃない。男なのか？」

「話を聴く限りでは男の子のようですよ。最近良く話してくれます」

「アルクに男だとおーーーーー！！！！！！許さん、許さんぞーーーーー！！！！」

「お父さん、何で叫んでるの？」

「娘を盗られると思っっているんじゃないのかしら」

「アルク、そいつと会っちゃいかんぞ」

「なんでだよ……。と言うかそもそも同じ学校なんだから会つに決まってるじゃないのさ」

「くそおーーーー！！！！魔法使い様！どうか、アルクに悪い虫がつかませんように！！」

「話を聴いている限り悪い子には聞こえませんでしたよ。むしろとってもいい子のようですけど？」

「なんでだよ……。お父さん！！」

「いや、そういう奴ほど信用ならんぞ。裏で何をやっているか分かつたもんじゃない」

「それは同じ男としてかしら？」

「その通りだ、母さん」

「もういい！！私、部屋に戻るね！」

「アルク？おーい、アルクやーい」

後ろでお父さんが何か言っていたけど、自分の部屋に帰った。

「ふう」

自分の部屋に戻ってきた。ここが一番、落ち着く……………のかな。

「よいしょと」

ベットになつころがった。ゲームセンターで取ってもらった人形が跳ねる。

「わたしはここにいてもいいのかな？」

最近良く思うことだ。

特にお父さんや、お母さんと一緒にいると考えてしまう。

私は別の人がお父さんやお母さんだったんじゃないかって。

今のお父さんもお母さんのことも大好きなんだけど、どうしてもそんなことを考えちゃう。

私には昔の記憶がない。

お父さんやお母さんから昔のことを言われることもないし、学校に通い始めてからもそんなこと聞かれなかったから考えなかったけれど。

私の記憶は7年前の真白いベッドからだ。

それより前の記憶は全然ない。

それを当然のことだと思ってる。今でも、そう思ってる。だから、聞かない。

「怖いのかも」

それ以前の自分のことを、例えばお父さんに訊いたとして。今の

自分と全然違っていたとしたら。

「考えてもしようがないのにね」

人形の手を触ってみる。中に綿が入ってる分の反発が返ってきた。

「お風呂沸いたわよーい」

「はーいーい」

お母さんの声だ。我が家では私が最初に入ることになっている。

「お風呂入んなきゃ」

着替えを持って部屋を出るとき、私の勉強机に目がとまった。

「パルくん」

4つの音を口で言ってみた。なぜだろう。今、唐突にそうしたくなっただ。

「うんっ。よしっ」

何に納得したのかは自分でも解らないけど。

お風呂に入るために、扉を閉めた。

アルク1

ガチャ。鍵を開け、扉を開けた。ギギギギ。いつの間に鉄錆の音がするようになったのだろうか。ボタン。扉を閉めた。

「おかえんなさい」

「……………ただいま」

普段は家の中から返事がある訳がないので、その声に対応するのが遅れてしまった。

「あの、一応ここ僕の家なんですが」

「別に良いじゃない。減るもんじゃないでしょ」

「減りますよ。今あなたの胃の中に煎餅が吸い込まれていつてますよ」

「まあ、一仕事終わった後なんだから細かいこと気にしないでよ」

「いつものことだから諦めています」

僕は普段通り荷物を2階に置きに行こうとした。

「お客にお茶も出さないの!!」

「全部終わったら出します」

「なってないわね!!」

「いつもは客なんて来ないので」

「ふーん。友達少ないのね」

グサツ。

「……………ちゃんといいますよ」

「ふうん。本当にや?」

「本当ですよ」

「証明は?」

「面倒なのでしません」

これ以上対応するのは面倒なので自分の部屋に行った。

「あ、ちょ、こら、待ちなさいよ!!--」

ええい。普段のやることにあんたへの対応つてのが増えたんだ。
他のことを早く終えないと面倒だろ。

「茶」

「それぐらい自分でしてくださいよ冷蔵庫の位置知ってるでしょう」
「いやだー、うごきたくないー」

「社会人なのにそんなのでちゃんとやっていけるんですか？」

「失礼ねえ、ちゃんとやってるわよ」

「そうですか。どうぞ」

「おーおー、ありがとうね」

目の前にコップを置くと一気に呷った。わざわざ熱いお茶にしてあげたというのに。

「ぶはあ！！この一杯のために生きてるぜえ！！！」

「どこかのおっさんですか。仮にも女性なんですからそれっぽい態度をとってください」

「仮にもってなんだよー！！あたしには色気がないとでも言うのかー！！！！」

「別にそういうわけではないですけど、そんなのだから貰い手もないですよ」

「何か言った？」

「気のせいだと思いますよ」

怒らせても得はない。そして、暴力という名の愛のムチという名の損は存在するわけだが。

「そんな態度で良いのかにやゝゝ。ちっちゃい頃に世話してあげたのはどこの誰でしたっけゝゝ？」

「へえ。地震があつたわけでもないのに荒れている家を毎日きれいにして、カビの生えかけていた洗濯物をどうにかして、新しい生命体が生まれていそうだった台所をきれいにしたのはどこの誰でしたっけ？」

「すみませんでした」

「弱いですね。社会人が学生に頭下げていいんですか」

「だって仕方ないもん。そうしなきゃこれから来てもらえそうになりもん」

「だたっ子ですか。大体さっきのネタで脅すことがどうにかできた気がしますけど」

「それもそうよね。あつたことなかったことを………そうね。誰に言ってもしょうがないよね。パルには友達いないもんね」

「ひどく哀れみに満ちた目で見ないでください。ちゃんといまさらアーシャ姉さん」

一瞬、叔母さんと言いかけたが習慣とは怖い。口からは自然とお姉さんとでていた。危ない、危ない。

「ああ！お姉ちゃん心配だわ！！」

「自分の生活力のなさの心配をしてください。いい加減誰か雇った方がいいんじゃないんですか？」

「タダの労働力は使うべきよ。お金は節約しなきゃ」

「そう思うなら自炊してください。そこら辺で弁当買った外食したりするよりよっぽど節約できます」

「考えておくわ。で、今日は来てくれるの？」

「学校から帰ってきたばかりな上に、明日も平日なので学校に行く義務があるんですけど」

「いいじゃないそんなこと」

「良くないですよ。なにがそんなことですか。姉さんが書いている学園物とかの主人公は学業を何だと思ってるんですか」

「え？ああ。『そんなもん必要ねえ』」

「思っても言うな！！現実そんな甘いもんじゃねえ！！！」

こんな人間が書いた小説を買う物好きがいるのか。世も末だ。

「だってあたしが学歴なんて無に等しい人間だもの」

「そうでしたね。家庭教師ですましていたんです」

「というわけで、パル、今週末までうちに泊まんない」

「何で僕が自宅通いにしてるか忘れたんですか？」

「一日ぐらいいさばっちゃいなよ」

「んなことできるか……！」

「もう、真面目だなー、ほんとに全く」

「反面教師がいたから真面目になろうとか考えたんじゃないんですかねえ」

「ま、悪いけど一日ぐらい何とかしなさい……！」

埒が明かん。最もいいのは大人しく帰ってくれることだが、まず望めまい。未来なんか見なくても分かる。よって、妥協策の打診。

「えっと、それじゃあ姉さんが2日間ここに泊まってください。湖曜日になったら行きますから」

「あ、確かに。いやー、あたしも良い甥っ子をもったわね。姉さんに感謝感謝」

「はあ。僕も良い姉さんを生んでくれた祖父母に感謝するとしますよ」

「それじゃあ世話になるわね」

「ええ。そのせいでもう一度外に出ないといけなくなりましたけどね」

食料が一人分しかないのだ。ついでに明日の分も買っておかなければならないだろう。

「それじゃあ、あたしも一緒に行きますかね」

「え？動きたくないって言ってたのはどの人ですか」

「まあいいじゃない。荷物は任せなさい」

「お荷物になることを任されたと言ってるわけではないですよね？」

「ヒネた甥っ子ね……。彼女出来ないわよ？」

「別に欲しいとも思いませんので」

「うわ、言い切ったよ。勉強が学生の本分じゃないんだからね……！」

「学校では勉強のためにあると言われますけどね」

「信じてないけど、とか思いながら靴をひっかけた。

「待ちなさいよ」

「一人で行きますから。そっちこそ家で大人しく待っていてください」

「冷たい子。姉さんそんな子に育てた覚えは……」

背後で何か聞こえたが、扉を閉めた。

さて。今までの会話で大体理解してもらえたとは思っけれど一応言っておこう。

アナスタシア叔母さん。母さんの妹に当たる人で、僕は両親を亡くした後この人のお世話になっていた。ちなみに叔母さんと言うと絶対に叩かれた。アーシャ姉さんと呼べ、と厳命されている。

学校に通わせてもらえるのはこの人のおかげだ。反面、実際の生活においてはどちらが世話になっていたのかは分からないけれど。僕の生活能力スキルはこの時、身につけておかないと身の危険にさらされる、ということから身に付いたものが多い。

母さんは勘当同然の身で、僕も祖父母とは会ったことはないのだが、姉さんは一緒にちよつとした屋敷で暮らしていたそうだ。しかし、2人が相次ぐように亡くなり、その後、僕の両親も亡くなったので5年前までは一緒にその屋敷で過ごしていた。

学校に入学する時、屋敷の方では遠く登校に時間がかかってしまうので、実家の方に住むことになった。それから、1月に2回は行くようにしていたのだけだ。

小説家で不定期に活動する人間なので、唐突に僕を訪ねることも考えてはいたけれども。本当にそれを実行するとは。やれやれ。これから3日間あの生活力0どころかマイナスの人間の世話をしないといけないと考えるだけで、あれ？お腹と頭から何か聞こえるな。

「じゃあ、学校行きますけど」

「行つてらっしゃいな。あたしは一人でのんびりしてるからさ」

「……………荒らさないでいてくれることを祈っておきます」

「あら。そんなことしないわよ」

「昨日、買い物から帰ったらリビングに大量のものが散らかってたのは誰のせいなんでしょうねえ？他にも——」

「忘れ物はないわよね。服装も乱れてないし」

「気のせいですか？とつと送りだそうとしてません？」

「うん。外見に問題はないわね」

「あつたら非常に嫌ですね。それ」

顔が悪いみたいだ。あ、体調不良という意味合いではなく。

「よし！！いつてらっしゃい。気をつけるのよ」

はあ。まったく。

「行つてきます」

「いつてらっしゃい」

この言葉に返事があるのはとても久しぶりな感じがした。

「なんかやつれてるわよ。大丈夫？」

「ええ。ちょっと、昨日大変な目にあつたもので」

「まあ、熱はなさそうだけれど。今日バイトのある日でしょう？もつとしゃんとしないと心配されるわよ」

「ご忠告ありがとうございます」

顔を二回、痛くない程度に叩く。

「では、私は上にあがるけど、無理はしない方がいいと思うわよ」

「分かりました。じゃあ、今日は極力簡単なことをしてもらえらうにしてもらおうとします」

「それじゃあ、またね」

「はい。また」

『声』ではなく、珍しくレネさんに会って、話をして、忠告もしてもらって、別れた。ありがたいことだ。

扉を開いた瞬間、鐘が鳴る。慌てて飛び込んで席に着いた。

「パルくん、顔が引きつってるよ。大丈夫？」

それで大丈夫と返しても、大丈夫じゃないことは明白じゃないのか。

「大丈夫、これで最後だから」

そう返した僕に、労わるような笑顔をくれる。大抵の男はこれを与えてやるだけで頑張れるんじゃないかなろうか、と思ったのはきつと主観ではなく客観的な評価だっただろう。

かなり疲労した体に、授業中に睡眠することで癒しを与え、だましましなんとか6限目になった。嗚呼。まだ眠い。

「さて、今日は授業はやらんぞ。代わりに学園祭実行委員を決めて、その後クラスの出し物を決める」

「よっしゃ！！授業なし！！！」

「そっか、もう学園祭の時期なんだね」

「私、やりたいこといっぱいあるなあ」

教室がうるさい。週末の最後の授業だからだろうか。耳に何か入ってはくるのだけれど、脳味噌が理解してくれない。あ、でも最初の言葉は理解できた。授業やらないらしい。よし、スリープモードオン。

「ただし、やるからには売り上げ1位だ。実行委員と出展内容は慎重に決めるよ」

「まずいぞ、みんな。ニクラス先生本気だ」

「ねね、イザちゃん、イザちゃん。学園祭実行委員ってなんなんだよ〜」

「それは疑問なんじゃよな？というかアルク、学校のポスター見ておらんかったのか？」

「学園祭って書いてあったやつ？」

「そっじゃ。なんじゃ、見ておったのではないか」

「え、でも。学園祭ってなに？」

「……………祭りはわかるか？」

「うん。……………あ、もしかして」

「分かったようじゃな。学園でも生徒が主催でやるんじゃよ」

「生徒が、やるんだ。それで実行委員っていうのは？」

「……………一応先に言うておくが、アルクも我も生徒じゃからな。ま、それはおいておいてじゃな。クラスや部活で何かやることを決めるのじゃが、実行委員っていうのはその中でもクラスで何をやるのか決めたり、実際の作業の指揮をしたりする役割のことじゃな。運営のこととかで責任をかぶったりすることもある役割じゃから結構大変で、しかも自分たちは忙しいから祭の当日はあまり楽しめれないうなかなか損な役回りじゃな」

長い。ああ。雑音に眠気が増長される。対抗する気もないけど。

「なるほど……。分かったよイザちゃん。綿アメを食べればいいんだね〜」

「何も分かっておらん。というか聞いておらんかったのか！」

「だって、さっきのセリフ長いよ？」

「ちよつと、そんな感じはしたのじゃが、うむむ」

「コンパクトに言いましよう。はい、イザちゃん」

「祭で何をしたいのか決める人じゃな」

「お、さすがイザちゃん。きれいにまとめたよ」

「ええい。頭をなでるでない！！我とアルクは同じ年じゃぞ！！」

隣でイザとアルクがしゃべってる。へえ。雰囲気だけを見れば全然信じることの出来ないことを、何故かイザの方が言ってるよ。アルクが言うところだと思うけどなあ。

「とりあえず実行委員決めましようか」

あれ。壇上に担任じゃなく委員長が立ってる。どうしたんだろう。

「さてと。実行委員やりたい人いる？」

「手なんて挙がないでしょう。さっき先生がプレッシャーかけたから」

「今の一言で更にみんな挙げたくなかったと思うわ。試しにほら伸びをしろよ」

「ここで伸びをしたらそのまま手が挙げたことと見なされるんじゃないんですかねえ!？」

「いいじゃない。ほら挙げちゃいなさいよ。楽になるわよ」

「そりゃあ、体は楽になるでしょうけど、その後の精神が保ちそうにないでしょうねえ。大体元から俺は無理だぞ。部活の方で手いっぱいだ」

「あ、そっか。そういう人もいるのよね」

「そうじゃない人ってクラスにいるのか? いや、一人ぐらいはいるとは思うんだが」

「ふむ。ちよつと待ってる」

おや。先生が出ていった。ふむ。ちようどいい。すりーぷもーど全開。

おやすみなさい。

「それじゃパルミラとアルカンシエルに決定」

「おー、2人ともガンバレー」

「ちと早いが今日はここまでだ。学生共。帰って休みを謳歌しろ」

「じゃ、2人ともお疲れ」

「うん、じゃあね〜」

教室がうるさい。と思ったら静かになった。

「パルくん。起きてよ〜、下校時間だよ〜」

下校時間？そうか。6時限目が終わったのか。現実逃避の時間もこれまでか。

「あ、起きた。おはよ〜パルくん」

「えっと、僕の意識がもしもちゃんとしてるのなら、今の時間はここにちはだと思っただよ」

「じゃあ、こんにちはだよ」

起きたら隣にアルクがいた。何故。

「ふああ~~~~」

あくびを一つ。天井に向かって伸びをして、正面を向いた。
「ん？」

黒板に僕とアルクの名前が書いてある。

その更に右側の文字は………ええい、頭がはつきりしないな。
ためしに読んでみよう。

「学園祭実行委員」

目を剥いた。瞬かせた。擦ってみた。ついでだから頬もつねってみた。痛かった。

「あ、うん。そうそうそれはね——」

「なんじやいこら——————!!!!!!」

「わ、びっくりした」

え？え？ナニコレ？What's?Why?

「なんじやこら——————!!!!!!」

重要なことなので2回吼えた。ワンワン。

「え？だつて、パルクんだつてうんうん言ってたよね？」

「言つてないから、ナニコレ？」

再度確認。縦文字の羅列は右から左に向かって読むと読むことが出来ます。うむ。常識だね！

それを踏まえまして、黒板の文字を順に追っていくとしましょう。
重要なのは順番ですよ。え、まず、一番右の文字、学園祭実行委員。次の行の文字、パルミラ・アガスティア。でその次の行の文字はアルカンシエル・ソレイユ。

ふう。

「さて、アルク」

「な〜に、パルクん」

「これなに」

黒板を指さしてみた。

「なにつて、黒板だよ」

「知ってらい！内容だよ、内容」

「あゝ。実行委員に私たち2人が選ばれました。拍手！」
「え」

「え、つて。パルクんもうんうん言っていたよ」

「え、僕うなされてたの？」

まあ、夢の記憶はないからどんなの見たかは分からないけど。

「あ、そつか」。うなされてたのか。起こした方が良かった？」

「いや、起こさない方が良かった」

普段なら。と思えるぐらいには僕の脳味噌も動き始めてくれた証拠だ。

「で、僕が寝てるのをいいことに、こんなことになったと」

「パルクんと私だけみたいだよ、何の部活動や委員会もしてないの」

「あ、はい。そんな理由なのね」

今から逆らつても……無駄だ。数という絶対的な暴力には僕は太刀打ち出来やしないだろう。というか何もしていないに等しい連中なんて掃いて捨てるほどいるだろ！！何て言ってもなあ。

「あ、うん。はい」

分かりました。受け入れるしかないんですね。寝てた僕が悪いのですね。

「はあ~~~~~」

なんてこったい。

「ちよつと、パルクん、寝てて良いの？水曜日バイトじゃないの？」
もういい。アルク。悪いけど、ちよつとの間くらい現実逃避させて……。

後生ですから。

アルク2

「はぁ~~~~~」

「黙れ若者。口を動かすより手を動かせ」

「へい」

「おや、反論がない。全く。いじりがいないな」

「そうですか」

「おい、親代わりの人間をなめすぎてないか？」

「そんなことないですよ」

「ふむ。本当にダメっぽい」

いんざあんつはうす。掃除をしにやってきました。いつものこと
だけどひどいもんだ。と頭は認識する。のだけど。

「うにやああああ」

「動作はいつも通りなのに言動が壊れた！」

言われたことも頭に入っではいるのだけど、ダメだ。

やっぱり学校が始まってからのこと考えると、憂鬱だ。

「で、なにがあったん？」

「ほいほい」

「あ、こら！何でそれまで捨てようとしているのよ！」

「あれ、いたの。仕事してても良いのに」

「ちようど今はなにもないのよ！！少しぐらい休ませなさいよ！！」

「なにもない、はないでしょう」

「そ、そんなことないわよ」

「えと、何だっけ。担当？の人に訊いてみようか」

「それだけはやめて！！！！」

そんな残酷な仕打ちはー！とかなんとか言っているのが聞こえる。そんなことするつもりなんか無いのにね。

今はこの作業に集中しよう。学校でのことはもはやどうにもならな――

「はあ~~~~~」

「人生の全てに絶望したかのような見事なため息ね」
「見事じゃないため息とかあるらしい。」

「まあ、ちよつと休みなさいよ」

「これで休んだら僕が帰る前に作業が終わらないんだけど」

「いいからお姉ちゃんの言うことを聞きなさい」

「はあ」

こちらとしてはそれでも良いけれどね。困る人が1人、いや担当の人も困るのかな？

「昨日自分の家に帰ってきてからもずー~~~~~っと上の空だったじゃない。なにがあつたのか吐きなさいよ」

「吐くて。汚い」

「そつちじゃないわよ！！分かつてて言ってるわよね？」

「うん。まあ」

自分の様子がおかしいことぐらい自覚している。

「何があつたのか知らないけど、明日には私はいないのだから全部言いなさい」

「……………」

隠すことではないし、他の人に言いふらすわけでもないだろう。

「昨日学校でかくかくしかじかとそういう訳なのですよ」

「へえ。学園祭の実行委員ねえ。名誉なことじゃないの？」

「嘘！！通じた！！！！」

かくかくしかじかしか言っていないのに！！！！

「ふふん。愛のなせる術^{わざ}ね」

「そんな愛は要らねえ」

対面している相手が人かどうかも疑わしくなってきた。

「それで、何が嫌だったのかにやあ？」

「言っておくけど似合っていないから」

そうだ。嫌だった。すごく。

決められていることを変えられなかったこと。

そうだ。昨日も、もちろん今日も。もちろんこの会話の内容の細部に至るまで。相手の細かい動作や仕草まで変えることができない。

僕は昨日、突如として訪れた睡魔によって寝ざるを得なくなった。

確かにいつもより睡眠時間は短かった。起き抜けも眠気が残ってはいた。しかし、睡魔はあまりにも唐突に、タイミングよく訪れたのだ。

あらがうことすら出来なかった。

変えられるはずだったのに。

変えれると思ったのに。

僕が祭の実行委員になるのは決まっていたことだったということなのだろう。アルクはどうだか分からないけれど、夢の中では僕しかいないままで終わっていた。

人生起こってしまったものはしょうがない。と思えば楽なだけだ。

そうできないから僕はこれからも苦労するのだろう。

「パル、まだやること残っているのよ。あんたがやってくれなきゃ困るでしょーが」

「それくらい自分でやりなよ」

そうでなくてもこれから苦労しそうだけど。それくらいは何の能力も持ってなかったとしても判る。

はあ。全く。

ままならないなあ。

「これより学園祭実行委員会を始めます」

土曜日（つまり週の最初の日）の放課後。いつも僕が訪れる生徒会室は、いつもより人が多い。いつもの何倍いるのだろう。狭いんだから他の教室を借りればいいのに。口には出さないけれども他の連中も同じことを思っているはずだ。

「今回は顔合わせとちよつとした説明だけです。本格的な打ち合わせは次回より行います」

レネさんがそれが解らないとは思えないのだけれど。今日は……
…今回はかなり事務的に動いている。普段との落差がひどい。

今のレネさんを知っている人が初めて今の彼女を見ると、態度の違いに驚くだろう。

「手元の資料に詳細は書いてありますが、最初の仕事としてはクラスで何をするかということを決めてもらいます。制約その他については一通り目を通しておいってください」

全員に一枚ずつ配られた紙に目を通す。確かにそんな感じのことが書かれていた。

機能的な声。まるで堅苦しいお役所の人間みたいだ。

「今回は再来週の同じ時間です。それまでに申請をお願いします。」

質問がないようでしたらこれで終わりにさせていただきますが」

それ言外に質問するなって言っていないか？

たとえ質問したい奴がいたとしても、これじゃあ何も訊けないと思う。

レネさんの圧力、というよりは周りの早く終わってほしいと思う圧力から。

「では、解散します」

『あなただけ残ってください』

「へ？」

僕の間抜けな声はイスのがたつく音に遮られた。というか異常に早い。集まってまだ5分も経ってないのにもう終わった。しかも特に自己紹介とかもしていない。

とりあえず訊きたい。こんなのでいいの？流石にこれではよくないような……………」

「パルくん？帰らないの？」

アルクが座ったままの僕に話しかけてきた。アルクは——疑問持ちそうにないよなあ……………」

「ああ、いや。会長にちよつとした用事があるから先に帰ってて」

「うん？分かった」

アルクが扉を閉めると部屋が静かになり、背中に重みを感じた。

「あの、レネさん。重いんですけど」

「女性に重いと言うのは失礼よ。役得なんだからその辺味わっておけば？」

「はあ」

確かに何か当たってるけど、いつものことだし。

知っていたし。

何を、とはいわないけれど。

「それで？疲れたんですか？」

「うん」

「まだ、慣れませんか？」

「うん」

「見ている分にはちゃんとやってましたよ」

「うん」

「これもなかったら特に僕から言うこともなかったんですけれどね」

「それにしても」

「はい？」

「これで狼狽えなくなったあなたは面白くないわね」

元に戻った？最初からこうだったのかもしれない。

けれども。

昔の彼女は弱かった。

少なくとも生徒会長をやれるような性格ではなかった。

いつから彼女がこんなにも強くなったのか。一応の推測は出来る。
だから。

「分かっていますから」

何が、とは言わない。

彼女は僕のことを知っている友人なのだから。

そして僕もまた。

他人の心が見えるわけではないけれども。

「そう」

そして彼女の体温は遠ざかった。

「それじゃこの無駄に出されたイスと机の片づけでも手伝ってもらおうかしら」

「2人でやるんですか。誰か呼びませんか？」

「1人でも20分もかからなかったわよ」

「はあ。まあ終わらしにかかりましょうか」

互いの心が見えるわけではないのだから、僕は彼女のことをほとんど知らないのかもしれない。

けれども。

今は、これで。

10分ほどかけて大体の机とイスを折りたたみ、僕は自分の教室に向かった。かばんは自分の机の横に置いたままだったのだ。

「すー、すー」

まだ居たのか。驚いた。もう帰っているとばかり思っていたのに。自身の机の上でアルクが突っ伏していた。

もうヒカリが弱まり始める時間だ。もう少ししたらこの教室はもっと冷え込むことだろう。

「アルク」

呼びかけてみた。何の反応もない。

「アルクさんやーい」

先ほどよりは声を大きめにしてみたけれども身じろぎすらない。

「揺り動かすべき……かなあ」

「すう、すう」

アルクはおそらく触っても怒らないと思うけれども。

僕自身が……アルクに対しては何も起こらないか？

本当に？

試すか？

あれが一時的な自分の異常だっ
たりする可能性は？
本当に触れても問題ないのか？
何も……起こらないか？

気づけば。

恐る恐るながらも。

まるでヒカリを掴^{つか}もつとするかのように。

手を伸ばし。

彼女の肩に。

きっと、明日は。

自分の気分が少しでも良くなりますように、と。

ちっぽけで。

とても独善的な僕は。

本来の目的も忘れ。

そのまま抗うことなく。

手を。

自ら。

起きた。

いつもよりほんの少し、気分が良かった。

あの日から日々を繰り返して、僕は初めて何かに感謝しようかとも考えた。

演技でなく。

限りなく本心から。

喜べる。驚ける。

かつてあって凍てつかせたもの。

普段は動くことのないもの。

道の外れにしかいつもは落ちていないもの。

そして道の外れに至った場合、それは大抵悲しみや怒りやその他

の暗いものにしか覆われていない。

外れることなく。新鮮な気持ちで。それに会える。

こんなものを抱いたのは初めてだったかもしれない。

いや、間違いなくこれが世間一般でそう称するものだとは確信できる。

「おはよう、パルくん！」

嗚呼。彼女の近くに僕が居れたとするならば。
きっとそれはどんなに楽しいことなのだろう。

それがどんなにかおこがましい事であるかもしれないけれども。

それでも、僕は。

アルク3

起きた。

いつもよりほんの少し、気分が良かった。

あの日から日々を繰り返して、僕は初めて何かに感謝しようかとも考えた。

演技でなく。

限りなく本心から。

喜べる。驚ける。

かつてあって凍てつかせたもの。

普段は動くことのないもの。

道の外れにしかいつもは落ちていないもの。

そして道の外れに至った場合、それは大抵悲しみや怒りやその他

の暗いものにしか覆われていない。

外れることなく。新鮮な気持ちで。それに会える。

こんなものを抱いたのは初めてだったかもしれない。

いや、間違いなくこれが世間一般でそう称するものだとは確信できる。

「おはよう、パルくん！」

嗚呼。彼女の近くに僕が居れたとするならば。
きっとそれはどんなに楽しいことなのだろう。

それがどんなにかおこがましい事であるかもしれないけれども。

それでも、僕は。

放課後。

僕は魔法使い様ななんてものに感謝する前に、クラスのみんなと担任に感謝し、そしてほんの少し恨みをぶつけることになった。

「どうしたの？ パルくん」

彼女が僕の顔をのぞき込もうとしている。

「いや、別に何でもないよ」

ダメだ。まともに相手を見ることすら出来ない。

「授業の時もおかしかったし、風邪引いちゃったの？」

平静を保つのが精一杯だ。

「引いてない、引いてないからあんまり顔近づけないで」

「どうして？」

顔が別の意味で火照るから、とは口が裂けてもいえないことだった。

そして今になって気づいた。

どうやら彼女はかなり変わった子のようなのだ。

性質ではなく性格的な意味で。

「どうしてって、両親から男の子と2人っきりの時に近づかないように言われなかった？」

「お父さんにパルくんにはあまり近づかないように言われた」

「ああ、そう」

行くのにはなかなか苦労しそう……って何考えてんだ僕は！！！！

「何で頭を机に打ってるの？」

「大丈夫、何でもない」

自分がこんなにバ力になるだなんて考えもしなかった。

夢の中ではアルクは存在しないから、僕は彼女の行動が全く予測も出来ない。

素直に狼狽えてしまうのだ。
だから。

「パルクんまた黙っちゃったし。いったいどうしちゃったんだよ」
状況的には嬉しいのだけど、素直に喜べない。

困った。

「ええい!!」

「わ、わ」

「とりあえず……ええと、あの、僕何かした？」

気を切り替えようとしたら、目の前の彼女は怯えた目でこちらを見ていた。

「突然目の前で大声出されたらびっくりしちゃうよ」

「あ、うん。ごめんなさい」

いや、なんかほんとすいません。バカですいません。

「そんなお父さんみたいに頭ペコペコしなくてもいいよ」

「お父さん会社員なの？」

「ううん。貿易会社の社長」

なんと。社長令嬢だったらしい。

「初めて聞いた」

「うん。初めて言った」

ほほお。

「そんなことよりもパルクん。私たち何のためにここに残ってるの？」

は。しまった。

「そうだね。やろつか」

いい加減照れている場合じゃないし。

この別人のようになった頭を何とかごまかしながら打ち合わせを開始した。

ちなみに打ち合わせと言えば、夢の中では前みたいに、アルクの存在そのものが出ることもすらもなくなった。よって作業を一人でやっているため、非常に順調である。

しかし、現実はそのなに簡単にいくものではない。

「今やれることは……あれ、実はほとんどないの？」

「そうでもないんだけど。でも自分たちのクラスで何をするのが決まらないと動きようがないんだよね」

今の段階でやることは、クラスで何をするつもりなのかを決めることだ。

「でもそれって」

「うん。クラスの人みんなで話し合わないといけないことだから」

「ほとんどないっていうよりはぜんぜん……よね」

「うん」

代弁ありがとう。

「というわけで、僕は担任殿のいらっしやるところに行こうと思っているけれど」

「え、何で？」

「まずね、さっきも言ったようにみんなと話し合わないといけない」

「うん。それでそれで？」

「でもみんなが放課後に残ってまで決めようと思う？」

「う……ん。私は別に良いけれど……」

「アルクは部活に入っていないからね」

「放課後に用事がある人もいるんだ」

「そう。かといってもこの話にはどうしても時間がないと困るでしょ」

「うん。みんなで決めた方がいいと思うし」

「だから、授業の時間を使う」

「あゝ。納得いったよ」

「うむ。というわけで職員室に行ってくるよ」

「え？私も行くよ？」

「…………一人いれば十分だと思うけど」

個人的には嬉しいけれども。

「くう。パルクくんがイジワルだ……………」

「…………アルクがしたいようにすればいいと思うよ」

そう言うしかないじゃないか。

「それじゃあついてくね」

なんか嬉しそうだ。…………ま、まあ、いいんじゃないかな。

「そ、それじゃあ、行こう」

内心の動揺を隠すのに必死だった。慌てて立って、扉を開けた。

「あ、ちよつと待ってよ」

扉を開けたところで止待った。

「あれ？パルクくん行かないの？」

行きます。

「失礼します」

「おゝ、私初めて入るよ」

手続きとかで入ったと思うけれど。後で訊こう。私語はあまりよくない。

僕は教師からはそんなに好かれていないから。

ここに入るのに躊躇いとか遠慮とかはないけれども。

「あれ？ニクラス先生いないよ」

「そう」

そこら辺にいた先生を捕まえた。

「すいません。ニクラス先生がどこにいらっしゃるか心当たりはありますか？」

「ちょっと、パルクくんその先生って……」

「おや、久しぶりだね。パルミラ君」

「久しぶりではないと思いますが。僕とあなたはそこまで親しい仲ではないですよ」

「ふむ。別に私はそれでも良いけど」

「???」

アルクが変な顔してる。(?!?) ↑こんな感じ

「それじゃあ質問に答えようか。答えは知っている。でも君が期待するような答えは返せない」

「じゃあ、帰ったんですね」

「正解だ。今度私の部屋にくるか？君のような生徒は歓迎するよ」

「いえ、先生の机を見れば分かりますよ」

バグなかったし。

「確かに返答として芳しくないことはありませんでしたが、ありがとうございます」

「はい。気が向いたら来なさい。歓迎するよ」

「僕はあなたに嫌われてると思うってたんですけどね」

「いや。あれは彼女が悪いからねえ」

「????????」

アルクがもつと変な顔してる。:-) とか、:-) とか。

「では、思いついたら行かさせていただきます」

「はい。それではまた」

「失礼しました」

アルクも礼をしてた。一言もしゃべってないのにね。

「アルク、明日にするから教室に戻るよ」

「……」

「アルク？」

「パルクんって」

「ん？」

「何者？」

「答えても良いけど、教室に戻ろうね。先生方が睨んでくるから」
「あ、うん。分かった」

やはり他の先生からは嫌われてるなあ。

ま、あんなことやったもんねえ。はつきりとそうだとはばれていないけれども。

「それで、パルクんって何者なの？」

「僕は僕だよ。パルミラ・アガスティアだ」

「そうかもしれないけれど!!」

「ああ、うん。あの人と親しい……親しそうに見えたのは前ちょっと会ったことがあるからなんだよ」

「なんで校長先生と会うことがあるの？」

相手がアルクといえども言いたくはないなあ。黒歴史だし。

「まあ、いろいろと無茶したことがあったってだけなんだけどねえ」
個人的には無茶じゃなかったんだけど、自分でやったことを後から鑑みたらかなりの無茶をしていた。

「もしかしてパルクんって不良だったの？」

「職員のみなさんから見たら僕はまだ不良生徒なんだろうね」

ま、今となってはどうでもいい話だ。

「先生いなかったね」

「明日言うしかないね」

できれば明日の授業を使用させてもらいたかったが、いないのならしょうがない。

「やることは……まあ、雑用も今はないだろうし、帰ろうか」

「もうこんな時間なんだ」

「うん」

「そういえばパルクんの家ってどの方向なの？」
え。

「………だいたいあっちの方角だけど」

「ふうん」

「そういうアルクは？」

「方向は同じ」

「へえ」

もしかして、これは。

「一緒に帰る？」

「……………うん」

なんかかなり嬉しいんですけど。

「それでシロエさんが初めて王様にあつたときにね……………」

彼女の話す内容は自分のことよりもクラスの人たちの話の方が多い。彼女が3週間前にクラスに来たということを考えれば、クラスに馴染んでいるのは素晴らしいことだと思う。

そしてそれなりに深い話——あまり他の人に立ち入らせたくないような話も聞いている、ということとはなかなかできないことだ。

「宮仕えなのは知ってたけど、へえ……………。って僕にそんなこと言っただけなの？」

「いいんじゃないかなあ。そんなに気にしてないみたいだよ」

「なかなかショッキングな話だと思うのだけど。あまり言い触らさない方がいいと思うよ」

「本人は気にしてないって言ってたけど」

「いいのかなあ」

「何で？」

「何でって、アルク。君も僕に言いたくないこととか隠していることとかあるでしょ」

「え？別にないと思うけど」

……………これは僕を信用しているというわけではないよな。もしもアルクが普通の女の子だったら勘違いしそうだが、残念ながら彼女は普通の子ではない。

今までいろいろと話してきたことから判断するに、もしかしたら

彼女は常識と世間一般で言われているものの一部を持っていないのではないだろうか。

「あのね、アルク」

「うん。何？」

「えっと、僕とシロエさんはそこまで親しくない。おそらく彼女は相手がアルクだから言ったんだと思うんだ」

「ふんふん」

「たぶんだけどアルクと彼女の間にはある種の信頼関係があるのだと思う。だけど僕とシロエさんの間にはそんなに信頼があるわけでもない」

「それでそれで」

「で、そういう立場の人にはそういうことはあまり言わない方がいい」

「でも私とパルクの間には信頼関係があるよね？ だったらいいんじゃないかな」

本当に勘違いしそうだから、できればそういう爆弾をぼんぼん投げ込んでくるのは止めて欲しい。

「パルクんどつたの？」

「……………いや、なんでもないよ」

ええ、なんでもないですとも。

「と、ともかく、アルクが自分で判断して、こういうことは他の人に聞かせたくないなあって思ったことは言わないようにするべきだと思います」

欠けているなら、今から補えばいい。

「うん。たぶん分かった」

「そう」

「それでパルクくんは他の人に言いたくないことって何かあるの？」

「……………」

ああそうだね。いろいろとあるね。

能力のこともそうだけれど。

他にもね！……！！

「どうなの？」

「……うん、まあ」

「教えてくれる？」

「う」

言える訳ないだろ！……！！

ああ、でもここで何か言わなかったらアルクを信頼していないという事になってしまうのか。

じゃあ、他に何か――

「あ、パルくん私ここまでね」

「……へ？」

「それじゃね〜」

「ああ、うん。また」

道をほんの少し戻り、そこを右折していった。

「……助かった」

果たして本当に助かったのかは、はなはだ疑問ではあるのだけけれど。

しかし、これは思っていた以上にやっかいだね。

まさか、僕がこんな風になるとは。

もしも未来が見えなかったならば、自分がこんな状態になることもなかったかもしれない。

今日、僕は初めてこの力に意味を見出せたと思った。

アルク4

6010年7月28日（風曜日）

起きた。

今日は担任と対決する日だ。

いつもより少しだけ早く出て、自分の教室ではなく職員室に向かう。

「おう、パルミラ。何か用か？」

「珍しいですね。まさかいらっしやるとは思ってなかったです」
我が担任は職員室にはほとんどいない。

「今日の授業を早めるから、明日の6限を使い。十分だよな？」

「はい。1時間使えれば問題ありません」

「有効に使ってくれ。そしてまた要るようになったら言ってくれ。後2時間ぐらいならどうにかなるだろう」

「わかりました。ありがとうございます」

話ができるどころではない。話が非常に早い。

「今のところ問題はないな」

「はい。では、失礼します」

「おう」

僕が朝から来たことだけで推察したんだよな。恐ろしい……。

そして宣言通り、今日の数学はかなり厳しかった。

「あゝつらかった」

「何かあったのかな」

「でも、たまにやるんだよな」

「早すぎますわ……」

僕はどうにかなったけれども。他の人は大変だったようだ。

「よし、俺次寝るぞ」

「バカなこと言っ^てないで準備したら？ …… 気持ちは痛いほどに分かるけれど」

次はセラ学か。 …… 寝れるな。

……

……

いや、僕は寝ないよ！ まじめな子だもの！

……

…… 痛い目にあつたから当分はイヤだというのが本音だけだね。
そして僕は誰に向かつて弁明したのだろう。

「……………」

「ん？ 何？」

前の席の昴が僕をつついてきて扉の方を指さす。

「ああ、ありがとう。準備するよ」

「……………」

ゆっくり肯いて席に着いた。彼の耳にはいつものようにヘッドフォンがついている。北の国で開発されたものらしい。

…… そういえば彼に対して教師が注意したところを見たことはない。
何でだろう。

「席に着いてください」

へこへこしながら教師が入ってきた。だから嫌われるのに。

「えゝ、では今回は頭色^{とうしよく}について続きを」

教室の中はまだうるさい。

今からちょうど1分後に委員長（女子）がキレて、委員長（男子）がなだめるといったまにある構図が発生する。

それで、何人かの奴がはやし立て、授業が5分ほど長引く。

そして授業が終わったら、あの教師を責めるのだ。

はあ。

昼を挟み、アメリカ先生の常識の授業ではクラスの大半が寝るだろう。起きているのはたぶん10人ぐらいになるはずだ。

内容は宗教について深いところをやるのだったかな。存在意義とかなんでやってるのかとか。

はあ。

そして特にやることはないから、何もしないのなら生徒会室に行つて、家に帰ることになるのか。

たまには教室に残ってみようか。家よりはきつとヒカリがきれいに見えるはずだ。

きつとそれが綺麗だと思えたなら。

まだ、僕は大丈夫だろう。

うるさかった教室はいつの間にか静かになっていた。消しゴムを何の気無しに立ち上げて倒す。これを繰り返す。

あー、退屈。

気分がささくれだってきた。

どうしようか。

寝るか。多少なりとも気分がましになるだろう。

道を外れていることだから、きっと教師から当てられるのだろうな。

まあいいや。頭色についてならほとんど完璧に答えられる。問題はないだろう。

では、おやすみなさい。

6010年7月28日（風曜日）

起きた。

さて、担任殿に会いに行こうか。

いつもより少しだけ早く出て、自分の教室ではなく職員室に向かう。

「おう、パルミラ。何か用か？」

「いらっしやるとは思ってなかったです」

我が担任は普段なら職員室にはほとんどいない。

「今日の授業を早めるから、明日の6限を使い」

「はい。1時間使えれば問題ありません」

「有効に使ってくれ。また要るようになったら言ってくれ。後2時間ぐらいならどうにかなるだろう」

「わかりました。ありがとうございます」

「話分かるどころではない。話が非常に早い。」

「今のところ問題はないな」

「はい。では、失礼します」

「おう」

僕が朝から来たことだけで推察したんだよな。恐ろしい……。

「おはよう、パルクン。今日もギリギリだねえ」

「おはよう。今日はそれなりに早く来たんだけどなあ」

教室に入ったらいつも通りぐらいの時間だった。少しびっくり。

「あ、そうそう。アルク」

「どうかしたの？」

「近い近い近い！」

「あ、うん」

顔が熱い。

「たしかにどうかしているな」

「うん？ 何か言ったの？」

「いいや。明日の6限目を使わせてもらえることになったから」

「え？ 何に使うの？」

「自分たちのクラスが何をするかを決めるのに使うよ」

「あゝゝゝ。分かったよ」

分かっていただけでなによりです。

うん。これが普通だ。

「連絡事項無し。以上」

「あ、HR終わっちゃった」

いつものように瞬間的だった。

「他にはなにもないの？」

「ああ。これ以上はなにも」

「今日は集まるの？」

「いや、委員としては集まらない」

「分かったよ」

アルクは他の女の子に呼ばれてそっちに行った。

「ふう」

ため息を一つ。我ながら上手くやっていると思う。

アルクは多分だけど鈍いから、おそらく気づいていない、と思いたい。

「いつまで保つかなあ」

襲うことはないと思う。彼女に嫌われるのは勘弁だ。

でも、何かの弾みでどうにかなった時、僕はいつも通りの僕でいられるだろうか。

彼女の未来が見えない僕は、そうならないことを何かに願った。

今日の数学はかなり厳しかった。

「あゝつらかった」

「先生に何かあったのかな」

「でも、たまにやるんだよね」

「早すぎますわ……」

僕はそうなることを知っていたからどうにかなったけれども。他の人は大変だったようだ。

「よし、俺次寝るぞ」

「バカなこと言っていないで準備したら？ ……気持ち痛いほどに分かるけれど」

次はセラ学か。 ……寝れるな。

………

………

………

いや、僕は寝ないよ！ まじめな子だもの！

「パルクくんも寝るの？」

「何回も言わせないでよ！！ 寝ないよ！」

「パルクくん1回しか言っていないよ？ どうかしたの？」

どうかしてますね。落ち着こう。

「アルクのタイミングが良かったからかなあ」

「そなの？」

ちよつと不安そうな目。

「ああ、アルクのせいってわけじゃないから。僕が考えていたことをアルクが言ってくれただけだから」

「パルクくん。授業中に寝るのはよくないんだよ」

「考えていただけで実行に移すつもりはないから！！」

もしかして僕は不真面目な奴だと思われているのだろうか。かなり不本意だ。

「でもきつと私は寝ちやうんだよ」

「悪いことだって自分で言ってたよね！！ 寝ちやダメなんじゃないかっただんじやないの！！」

「悪いことだけど、人にはそうしなければならぬ時があるのです」

「それ、どこで覚えたの」

「お父さんがお酒飲んだるときに言ってた」

アルクのお父さんはどうやら楽しい方ようです。

「……できるだけがんばって起きてようね」

「パルクくん、無茶は言わないでよ」

僕が言ってるのは無茶じゃなくて常識だよ。

「あ、先生来た」

「そうだねえ」

「座らな、きやあ！！」

ガタガタ、ガシャン！！！！

「いた〜」

何でただ座るだけなのにこけるかなあ。と頭の冷静なところはそ

う考えた。

「アルク、大丈夫!？」

「アルカンシエルさん、大丈夫ですか」

「ちよつと痛いですけど、大丈夫です」

「立てる？」

「うん。ありがと」

見た感じではけがをしたようにも見えない。多分、問題ないだろう。

ただ座るだけなのにこけるということは少し問題あるような気がするけれども。

「では授業を始めます」

おや。騒ぎがなくなっている。アルクのおかげかな。授業が早く始まった。

これであるの先生が文句を言われることもなくなるだろう。

昼食。普段とは違い、騒がしい教室でとる。

他意はない。

ええ。アルクも教室でとっているが他意はない。

ないとも!!!!!!

僕はどこに向かって主張しているのだろうか。

「はあ」

「……………」

「ん？」

前の席の昴が振り向いてきた。何故だか驚いている。

「どしたの？」

「……………」

無言で僕の弁当を指した。

「ああ、これ？ 普通の弁当じゃない？」

「……すごいな」

「え、どこが」

「……自分で作ってる」

「ああ」

「……俺は面倒くさいから」

「君は他に作っているものがあるだろう」

「……あれはそんなに大したものじゃないから」

「音楽作れるのは大したことだと思うのだけど。」

「見られていると食べづらいのだけど」

「……おかまいなく」

「いや、かまうから言ってるんだよ」

「……俺のことは空気だと思ってる」

「いや、無理だから」

「……残念」

本当に残念そうな顔をして正面を向いた。そして購買で買ってきたらしいパンに食いついていた。

「いただきます」

僕もなにの憂いもなく食べ始めた。

「あ、それでさー」

「へえ、そうなの」

右斜め前方向にどうしても目がいく。

他意はない。

証拠に食べ終わった後は、教室の外にでた。

特にすることもないので、そこらへんをぶらぶらと歩く。廊下を少し歩いていたらよく見知った顔とエンカウントした。

「よう、パル。もしかして久しぶりか？」

「そうかもね、フレン。久しぶり」

クラスが違うとなかなか会わなくなるものだ。

「昼休みにぶらついていてるだけって珍しくないか？」

「そうでもないと思うけど、っていうかよく分かったね」

「普段昼休みは教室外の場所で食べてる奴が今の時間帯に教室外のところに向かつてる。理由はこれくらいだ」

「ふっふん。さすが情報通」

「違う。おまえの行動を見ておけば分かる」

まあ、そうか。特に去年から違うことをしているわけでもないし。

「何か面白いことでもあった？」

「ない。だからパルよ」

肩をがちり捕まれた。

「な、なに？」

「レネさんの私服画像を撮ってきてくれ!!!」

「……いや、無理だから。僕とレネさんはそこまで親しい関係じゃないから」

「いや、出来る。おまえならいける」

「でも僕、レネさんの私服見たことないよ？」

「そんな……バカな!!」

「バカって言われてもなあ」

「でも、多分彼女に……」

「あれ、フレン？」

「あ、あ、あ、あ」

「フレン？ おーーーーい」

「……………」

「帰ってこーい」

「……すまん、急用が出来た」

「え？」

「……じゃあな」

「え？ ちよつと！？」

ふらふらしながら教室に戻っていった。

「急用が出来たって風じゃなかったけど」

「そう見えなくても、そうだったのではないかしら」

「うわ！」

真後ろからレネさんの声が聞こえた。

「何も驚くことはないじゃない」

「突然後ろから声がしたら驚きますよ」

「というか、今驚いたわね」

「ええ。普通の人の反応だと思いますけど」

「……………」

「レネさん？」

「いえ、なんでもないわ」

普通の反応に普通の受け答えをただただだよな。特に気に障るようなことも、中傷することも言っていないはずだ。

「何かあったんですか？」

「いえ、特に何もないけど。見かけたから珍しい。」

「暇なんですか？」

「そんな訳ないでしょう。忙しいわよ。頼りにしようと思っていた人は委員になってるし」

自惚れでないのなら謝らないといけないか。

「すいません。クラスの決定に逆らう力はなかったの」

「あ、自分で立候補した訳じゃなかったのね」

「そうですよ。特にうちのクラスは担任が『一位を取るぞ！』って言うてしまったせいで、誰も立候補しませんでしたから」

「それはそうなってしまっわね……」

「それで僕が強制的に当てられて、委員になったんですよ」

「お疲れさま」

「そう言うていただけると多少救われます」

しかし、僕が委員になったことでレネさんの負担が増えたのはなんだか申し訳ないな。

「あの、忙しいのなら手伝いましょうか？」

「……………」

「そんなに驚かれると、まるで僕がそんなことを言わない人間に思われてるみたいですね」

「そ、そんなことないわよ」

「顔そらされると肯定されたようなものです」

「そ、そういうことじゃなくて」

「じゃあどうということなのだろう。」

「と、とりあえず、今は手伝ってもらわなくても大丈夫だから。それに手伝ってもらったはいいいけど、途中から抜けられたら私だって困るから」

「なるほど。分かりました」

「それじゃ、また放課後に」

「ええ。また……？」

また、ということとは。生徒会室にはいつも通り来なさいということだろうか。

「それって結局手伝うことになるのでは？」

僕の疑問に答えてくれそうな人は、すでに階段を上って姿が見えなくなっていた。

常識の授業は僕が見た通りになった。

違うのはアルクが寝ているメンバーの中に入っていることぐらいだ。

宗教は普通はティムナート教のことを指す。

魔法使いを崇める宗教のことだ。

僕は全くもって信じていないので、左から右に聞き流しておいた。

放課後。

レネさんに言外にそうしなさいと言われたとおり、生徒会室にやってきた。

「失礼しま……あれ」

見たときと違って、ドアは鍵がかかっていた。

「誰も来てないのか」

鍵はレネさんが持っているはずなので、その当人が来ていないということなのだろう。

「困った」

待つべきか、行くべきか。悩みどころではある。

「せめて漆原が来てくれれば」

「呼びましたか？」

「タイミング良すぎだ！」

どうしてみんなこんないいところで現れたり言ったりするのだろう。

「ま、いいや。レネさんのクラスに行ってくるから」

「あ、じゃあ私がついていきます」

うるはが着いてくると言ってくれた。

「ありがたい」

「いえいえ。私も入れないと困りますから」

レネさんのクラスに行った。上級生のクラスなので少し抵抗がある。

「すいません。えつとレネさん——会長いますか？」

「もういないよ。多分生徒会室に行ったと思うけど」

「ありがとうございます」

「おかしな話ですね」

「そうだね」

「泪によれば、やっぱり鍵がかかっているそうです」

「ダメか。どこ探そうか」

「う……ん。心当たりがないです」

「どうしようか。……帰る？」

「私にそれをやる勇氣は……」

「僕も恐ろしいし、命は捨てたくないからなあ」

実際にそこまではしないだろうけれど、近いところまではするはずだ。

「出席番号って分かるかな」

「会長のですか？」

「うん。靴箱の中を見れば会長が帰ったかどうかぐらい分かると思うんだ」

「ああ。靴箱の番号って出席番号で割り振られてるから……」

「職員室に行ってみよう。何か分か——あ、君は来なくていいからな」

「……いえ、行きます」

「長時間居座ることも考えられるけどかまわないかい？」

「ええ。大丈夫です」

へえ。職員室にいるのが平気、か。

ま、僕もそうだけど。

「それじゃあ、行こうか」

「はい」

それで職員室に行って名簿を見つけて、靴箱の位置が分かったところまでは良かった。

しかし——

「予想外だったね。まだ学校を出ていないとは」

「困りましたね。教室に鞆もなかったですし」

「……しょうがない。ここからは二手に分かれよう。それであらかた探し終わった後に見つからなかったら帰ろう」

「分かりました」

泪も搜索の方に加わり、3人で探した。

僕は途中で自分のクラスにも立ち寄ってみた。

ヒカリが射し込んで綺麗な教室だった。

その中には机とイスと一人の人物が作り上げていた影が存在していた。

「アルク？今日は集まりはないよ？」

特に驚きもない様子で彼女は振り返った。影も動いた。

「パルくんこそ。何で今の時間まで残ってるの？」

「僕はちよつとした用事」

「じゃあ私もちよつとした用事があるということに」

「じゃあつて。今思いついたみたいな」

「うん。今思いついた」

「……理由も無しにここにいたの？」

「じゃあ、そういうことに」

つてことは何か理由はあるのか。でも

「僕には言えない、か」

「そうじゃないよ」

「え」

僕は独り言のように思わず言ってしまったその一言に反応があったことに驚いた。

「こんなこと、誰にも言える訳ないよ」

「どういう——」

「それじゃ、また明日ね。パルくん」

「あ」

隣を通り過ぎて出ていく彼女を、掴むことは出来なかった。

「……………」

思わず右手を叩きつける。

話してくれなかった彼女にイラついてではない。

こんな時でも、相手がアルクでも、怯えた自分にイラついたから。

「出よう」

2人と合流しよう。

レネさんには明日の朝一に話を聞くとして。

今日はもう、帰りたいかった。

やっぱり僕は自分がかわいいから。

彼女に対してイラついていたのかもしれない。

アルク5

ほんの少し憂鬱な気分だった。

とはいえ不幸中の幸いなことは昨日のいらだちを彼女にぶつけてはいないということだろうか。

「ふう」

学校への道をたどる。今日は周りの人たちは急いでいる。そんな時間帯だ。本来なら朝早く出てレネさんに事情を説明するべきなのだろうけれど、そんな気力が湧かなかったのと、今日はどうやらレネさんはいないそうなので僕も遅く来ている。

「……………」

チャイムが鳴る直前に教室の中に滑り込む。いつも通りのぎりぎりの時間。

クラスは珍しいことに全員出席。イザもちゃんという。

「今日の6限は学園祭の出店決めだ。以上」

相も変わらず早かった。何もなかったら最終的に扉を開けて閉めるだけになりそうな予感がする。

「授業ないのか」

「通りで昨日厳しかったわけだよ」

「出店かぁ。何やるんだろう」

それを話し合うんだけどね。

「何が良いかのおくく。やっぱり、リング飴とかかのう」

「イザちゃん、わたあめっていう方向もあるよ」

「おお!! それもええのう!!」

悪いけど2人ともそんな方向性にはならないと思うよ。

「………… BGM要る?」

「あ、どうなるか分からないけど、喫茶店みたいなのになったらお願いできる?」

「………… 了解」

店の中に音楽を流すというのはこの辺りではまだ酒場でしか一般的ではないが、北の大陸では一般的だ。雰囲気も出るからやれるのならやってみたい。

とはいえ、どうなることやら。

みなさん気が早いよう。もう5時限目が終わりましたよ。休憩時間の間も店をどんなにするのかということは会話の話題にも挙がっていたようだ。

面倒なことに委員は僕だ。このクラスには馴れてきてはいるだろうけれど、アルクに司会進行役をやってもらうわけにもいかないだろう。

「それじゃ早速、意見言ってもらいます。指名された後発言してください」

「はいはいはいはい！！」

クラスの中でもお調子者と言われる奴が真つ先に手を挙げた。他にもちらほらと手が挙がる。

「早いな。じゃあ、委員長」

「ちよつと待てい！！なぜに俺をスルー」

「どうせお前は素晴らしい意見を言ってくれるんだからトリが一番良いだろう？」

「お、おうよ。俺のやつは言ってしまったら最後、みんなが選んでしまうからな！！」

「それって先に」

「はい、それじゃ委員長どうぞ」

「え、あ、うん」

アルク、余計な口を挟まないでくれ。今だけは。あれは喋り始めるとうるさいし長いんだ。

「喫茶店とかどうかなって」

「はい。まず喫茶店」

書記と化しているアルクが黒板にきつさてんと書き込む。店ぐらい漢字で書けるのでは？

「他に候補は――」

駄菓子屋、お好み焼き屋、焼きそば、焼き鳥、休憩所（最後のは担任に却下されたけど）と意見があがっていく。基本的に既製品、もしくは火をしっかりと通したもののしか出せないという制限はなかなかにきびしい。

「……揚げアイス」

「はいよ。って何それ」

「……アイスを揚げる。結構おいしい」

「へえ。面白そうではあるね」

被った意見もあったからかだいたいの意見は出そろったようだ。

「他にはないか？」

「なら俺の番か？」

「はい、どうぞ。語ってください」

「じゃあ。こほん。」

お前等！！ お前等は大事なことを忘れてる！！！！」

「授業中だ。もう少し静かに。隣の担当から文句を言われるのは俺なんだ」

「す、すみません」

やはり担任には逆らえないか。

「お前等は大事なことを忘れてる！！」

先ほどより大分小さな声になったな。

「今回やるのは何だ？ 一生に多くとも3回しか味わえない学園祭だぞ！！ ハジケなくてどうすんだ！！」

とりあえずここまで言っていることはまだ理解できるが。

「つまりだな俺はここにメイド喫茶を行うことを宣言するっ！！！！」

「はい、喫茶に一票。他に何かある人」

「何で流すんだよおお！！！！」

「え、じゃあ、メイド喫茶がしたいという人は拳手を」

まばらに挙がる。うちの男子には常識人が多いようだ。

「なぜだお前等……！ どうして手を挙げようとしな……！ 今このときだけは自らの本能からの声に耳を傾けるんだ……！！！」

「とりあえず、一つ聞きたいんだけど、服はどこから調達するの？」

「そりゃあ……自作？」

「自作って、服一つ作るのがどれだけ大変だと思っているのよ。時間はあるけれど、布代もいるしさすがに無理よ」

「むう。いや、だがかしだな——」

口論が始まった。勝ち目は無いと思うけど。

まあ、少し中放っておこうか。

「ふう。どうやってこれ収集しようかな」

「……………」

「多分、先生が口を——あれ、先生いない」

「……………」

「ねえ、アルク。先生がいつ出ていったか——アルク？」

「……………」

「おーい。アルクさんやーい」

「出来る。うん。きつと」

「何が出来るんですかアルクさん」

「えっとね、うちにそういうのあったかなって」

ちようど口論が終わったタイミングだったのだろうか。そのアルクの声はあまり大きくない声だったにも関わらず教室の後ろまで聞こえた。

「今、なんとおっしゃった？」

「私のお父さんね。貿易のお仕事していて、そのときにそういうの仕入れたって言ってた気がするの」

そういえば貿易会社の令嬢でしたね。

「それでね。先方の人が要らないって言ったらしくて。多分だけどそうこの中に入ってると思うの」

さて、何人が余計なことを、と思っているのか、何人が良くやった、と思っているのやら。

「だから、衣装は何とかなると思うけど」

「それは可愛いのか？」

「うーん。私から見たら可愛かったと思うよ」

「よし！！！ 女子諸君！！！ 君らもそんな服を着れるのはこの年が限界だろう。メイド服を着て祭りに参加してみないか！！！」
教室が一気にざわめいた。

「どうする？」

「私、ちよつと着てみたいかも」

「確かに、納得できる部分は多かったけど」

「でもねえ」

これは賛成の方に傾いたかな。僕としては喫茶店になれば勝ち目はあると踏んでいるけれど。

「ここで一つの大きな思い出を作るチャンスだぞ！！ さあ、今だけは恥ずかしさを捨てて立ち上がるのだ！！！」

「まだ、仕入れることが出来るって決まった訳じゃないのだけど」

アルクの声は今度は届かなかった。男子のほとんどは賛成し、女子もだいたいの人がやっても良いかなという雰囲気。ちよつと止めれそうにない。

「それじゃあ、２－Ｃはメイド喫茶ということで打診するけど、いいんですね？」

『うおおおお！！！！』

確実に隣から文句言われそうな声。担任いなくてよかった。

「それじゃあ、これで決定します。なお、文句言われた場合、喫茶店にするけどそれもいいですか？」

『いよっしゃあ！！！！』

僕、こんなにノリのいいクラスだと思わなかったよ。叫んでないのって普段から静かな人か、真面目な人以外全員だよ。

「あわわわわ」

アルクはアルクでどうしよう、みたいに思っているみたいだし。

「じゃあ、これで終わります。お疲れさまでした」

『乙でーす』

いや、みんなまだ帰っちゃだめだよ。帰るのにも担任が来ないと
「おーし、決まったか。ならもう帰っていいぞ。休日を楽しんどけ」
来ましたね。例のごとく一瞬で去っていったけど。

立ち上がる音。みんな部活に行くなり帰るなりするだろう。僕も
バイトに行かないといけない。

「アルク、終わったよ」

「……………」

「アルク？」

「……………どうしよう」

さっきの言葉を考慮するとこれは

「服がなかったときのこと？」

「……………うん」

僕もそれは考えておいた。だから一つ逃げ道を作っておいた。

「文句言われた場合、ただの喫茶店にするって言うておいたんだけ
ど聞いてた？」

「……………え？ ホント？」

「うん」

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして」

涙ぐまれながらお礼を言われても。っていうか泣！？

「なんで泣いてるかなあ」

「だって……………」

自分の動揺は抑え、彼女が落ち着くようになだめた。

いや、誰かに見られたら絶対に誤解されるよねこれ。

僕が彼女を泣かせているって。

というか年頃の女の子の頭をなでてる僕って何なんだろう。そし
てなでられているアルクってどうなんだろう。

まあ、僕個人としてはうれしいし、アルクも落ち着いたからいいんだけど。

「ふう。ありがとう〜」

「どういたしまして」

「あ……」

「ん？」

あ、アルクも現状に気づいたのかな。いまごろ真っ赤になってる。

「ご、ごめんね。パルクン」

「ああ、うん」

というか僕も今更ながら照れてきた。生返事しか返せない。アルクがかなり近かった。それに気づいていたら僕も危なかったかもしれない。いろんな意味で。

「え、えつと、それじゃ私帰るね」

「あ、うん。分かった」

「ま、また明日ね」

「ああ。また明日」

扉の閉まる音がした。廊下を早足で駆け抜けていく音が聞こえた。なんとかまた明日って言えた。僕がどこかおかしいとは思われていないと思いたい。

そういえば。今日はアルクに触れていた。何も考えていないままに。まあ、彼女が泣いていたからっていうのもあるからなんだろうけれども。

昨日は怯えていたというのに。何とも現金なやつだと思う。

「でも、まあ、結果オーライ？　かなあ」

アルクはある程度立ち直ってくれたっぽいし、僕が彼女に触れることが出来るっていうのも分かったし。

「よし」

手を握ったり開いたりを繰り返してみる。端から見たらなんだか変な人っぽいけど、どうせだれも見えてないだろうから繰り返してみる。

でも、この動作。特に自信がわいてくることもないね。触れることが出来たっていう実感ならわいてきたけど。自信が先ではなくて実感がわいてきて自信もわくのだろう。きっとそうだ。

さて、どうでもいいことを考えるのも終わり。バイトに行こう。

昨日とはきつと正反対に近い感情のまま。僕は教室を出た。廊下に扉の閉まる音が響いた。

アルク5（後書き）

次はインターラード。

アルクの内面の話です。

ちゃんと内面書けてるかなあ……。

追記：ツイッター始めました。

@sutrorrutaです。

よければツイートしてくれるとうれしいです。

インターロールドアルク2

「ただいま」

「お帰りなさ——あら？」

お母さんの不思議そうな声が後ろから聞こえた。

でも、私は家の中を走って私の部屋に駆け込んだ。

扉を閉める。

「ふう」

そこで私の力がなくなった。足に力が入らなくなって床にそのまま座り込んでしまう。はしたないなあ、ってお母さんには言われそうだけど。

ほんの少し頭が冷えてきて最初に浮かんだのは、よく学校からずっと走ってこれたなあ、ということ。我ながらすごい、って思った。普段はきつとこんなに走れないもの。

「どうしてかなあ」

そのまま床に倒れこんだ。冷たい床は、なんだか体の熱くなった私の体に心地いい。熱いのはきつと学校から走ってきたからで、それで、走ることに、なった、原因、は、

「はふう」

う~~~~。なんでかなあ。また熱くなってきちゃった。床が冷たかったんだから、私の体も冷えてもおかしくないのに。

「うう。どうしてあんなことしちゃったのかなあ」

ふと、思いついちゃったから言ってみたことが、ホントに出来るか分かんないのに、どんどんどんどん膨らんでってどうしようって思ってたけど、パルクくんがうまくまとめてくれて、安心したらなんだかほつとして、近くにいたパルクんに

「はふう」

お父さんにもあんなことしたことがなかったのになあ。でも、ちっちゃい頃にはあったのかも。覚えてないけど。

なんでパルくんにしちゃったんだろ。

「うう~~~~」

頭がこんがらがってきちゃった。

「アルク~~~~、もうすぐご飯だから出てらっしゃい」

「は~~~~い」

そうだ。お母さんに訊いたら分かるかも。

「よし!」

勢いよく立ち上がった私の頭に火花が散った。もしかしたらゴーンって音が鳴ったかもしれない。

「いった~~~~」

うう~~~~。どうして扉の取っ手に頭が当たるかなあ。

「できたわよ~~~~、早くでてらっしゃい」

お母さんの声が聞こえたけれど、頭が痛くて返事が出来なかった。

「いただきます」

「いただきます」

今日の机の上には鳥の唐揚げとサラダとご飯がのっかっている。

お父さんはいない。今日はお母さんと2人だけの夕食だった。

「ねえ、お母さん」

「な~~~~に~~~~」

「私って小さい頃はお父さんに泣きついてたりしてたっけ?」

「え、う~~~~ん。どっちかっていうとお母さんの方に泣きついてたわよ~~~~」

「そうだよね」

やっぱり。そこは何となくそんな気がする。

「どうしてそんなこと訊いたのかしら」

「えつとねっ、今日学校で——」

今日起こったことをお母さんに話す。夕食の時の日課だ。といってもお父さんがいないと話することがそんなになくて自然とその話題になっちゃうんだけど。

「それでそれで——あ」

「どうしたの？」

「パルクんにしちゃったことを話す前に思い出してしまった。」

「今日はお父さん帰ってくるかな」

「もうちよつとしたら帰ってくると思うけど。お父さんになにか用があるの？」

「うん。前に向こうから返品されたっていう服があったでしょ。あれがまだ残ってるかなって」

「あれね。もう残ってないんじゃないかしら」

「え」

私の背中に汗が伝う。

嘘だと叫びたくなる。

「どうしたの、アルク。顔が青白いわよ」

お母さんの口調も変わってるよって言いたかったけど声がでない。頭の中はどうしようって言葉で埋め尽くされた。

パルクんは大丈夫って言うてくれてたけど、それでもこれは私のせいになるのかなという考えが頭をよぎる。

「ただいま——！！ 帰ったぞ——い——！！」

そのとき玄関の方から大きな声がした。お父さんだ。私はあわてて駆けだした。

「お父さん、お父さん、お父さん——！！」

「おう、どうした我が娘よ。母さんにでもいじめられたか？」

「私がいじめ——もといいいじるのはお父さんだけですからご安心を」

「おお、なんかあまりうれしくない言葉が返ってきたがまあよい。

何があったんだ？」

「あのね、あのね、前に業者側から突き返されたっていう服があったでしょ」

「おお、あったな。それがどうしたんだ？」

「あれってまだある？」

「あれなら今日処分したぞ」

目の前が真っ暗になった。

「アルクどうしたんだ」

「話から察するに文化祭で要るのではないかしら」

「あんな服が――文化祭か。普段は着ないであろうが、祭りなら気分を着るやもしれぬな」

「でも今日だったの。間が悪かったわね」

お父さんとお母さんが何か話している。でも、内容はちゃんと頭の中に入っていないかった。

「むう。まあ箱ごとゴミ捨て場に運んだだけだからまだ残っておるやもしれんが」

「そうなの。それなら。アルク、アルク」

お母さんが何か私に話しかけている。

「よく聞いてくださいね。お父さんが今から服をとって来てくれるそうですよ」

「おい、母さん。俺はそんなこと一言も」

え、ほんとうに？

「ええ。本当ですよ。アルクはその服を着るんですよ」
多分そうなると思うから首を縦に振った。

「……母さん。夕食は後だ。今から会社に戻る」

「は……い。行ってらっしゃい」

私はお父さんの背中をぼんやりと見送った。

「ふう。私のことよりも動くのが早い気がしますけど、まあよしとしましょうか」

ようやく頭が物事を理解してくれた私の脳味噌は、安心したのか部屋の時と同じようにその場に座り込むことを要求した。

「よかった」

「そうね。それで、アルクはそれで何をやるのかしら？」

「学園祭で喫茶店をやることになって。そこで着ることに決まったの」

「それで必要だったのね」

「うん。そうなの」

それにしても、お父さんにすごく迷惑かけてしまった。

「お父さんにあんなことまでしてもらってよかったのかな」

「いいに決まってるわよ」。だいたいお父さんはきつとあなたがあの服を着たところを見たいだけだと思っわよ」

「そうなの？」

「そうよ」

本当にそうなのかな。お母さんが私のために言っているようにしか聞こえないんだけど。

「きつとお父さん帰るの遅いから、もう寝ておきなさい」

「うん。わかった」

寝る気はないけど、部屋には戻ろう。ここにいても今はしょうがないから。

部屋に戻った。

ベッドに倒れ込む。いつかのぬいぐるみが跳ねた。

「本当にお父さんに迷惑かけちゃったな」

こんな私が委員なんてやってて良いのかな。

今回はたまたまどうにかなったからよかったけど、もしも明日だつたら間に合つてないと思う。

「はあ」

この部屋の主も、今の私も、この体の持ち主も、全部私のはずなのに。

どうしてここにるのが苦しいの？

わたしはここにいちやいけないの？

このままやってたらパルくんにも迷惑かけることになっちゃいそう。

「先生に頼んでみようかな」

でも、たぶん無理だ。きっと私じゃあの先生の前に立つたところで何も言えなくなると思う。

「どうしよう」

問題は解決したはずなのに。

私の頭の中はまたその言葉で埋め尽くされた。

インターロールドアルク2（後書き）

ここから3話ほど展開進まない短い話が続きます。

か、書くのが楽なようにしたわけじゃないんだからねっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9638t/>

未来視の生きる方法

2011年12月12日08時48分発行